

戦女神×魔導巧殻 第三
期 ～新たなる理想郷
～

Hermes_0724

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『戦女神×魔導巧殻 第三期 新たななる理想郷』

※17年11月16日・大変お待たせしました！12月1日から、投稿を再開します。
第八話は12月1日22時にアップ予定です。

【あらすじ】

後世において「伝説」となったケレース地方の理想郷「ターペエトフ」は、賢王インドリトの死によってその歴史に幕を降ろした。その後ケレース地方を統一したハイシエラ魔族国も、マーズテリア神殿によって滅ぼされた。「光と闇」という二項対立の世界観に対する対立命題アンチテーゼの象徴は消え、神殿勢力が歴史の舵を握るかに思われた。

しかし「黒衣の男」は諦めてはいなかった。ターペーエトフ歴二百八十年、後に多くの国々に影響を与える「新たな理想郷」がアヴァタール地方南部に誕生した。光と闇、現と古を融合させた新たな宗教体系「神の道」を掲げ、多様な種族が生きる混沌の国。それが、エディカーヌ王国である。

原作ではエディカーヌ王国はあまり出てこないため、オリジナルの設定を入れていきます。腐海の大魔術師との対決、聖女ルナークリアの蠢動、そして「神殺し」の覚醒……「戦女神×魔導巧殻 第三期」は、エディカーヌ王国を中心に「戦女神ZERO終章」までを描きます。

※Image Song

曲名：Jing Ling

作詞・歌：Saju

<https://www.youtube.com/watch?v=aElnvhJQD5I>

【作者より】

第一期、第二期では多くの誤字脱字があり、読み難い書き方もしていったと思います。第三期はそれらを反省し、段落の書き方なども工夫をしたいと思っています。また、文

字数についても、平均で八千文字以上を目指しております。

更新頻度は未定ですが、感想の投稿をして頂けると嬉しいですよ。仕事の合間でポチポチと文章を作成し、それを繋ぎ合わせて一話を作っているため、モチベーション維持に苦勞しています。第三期も「外伝」などを入れていきたいと思っています。

皆様、応援の程、宜しくお願い申し上げます。

目次

序章：闇夜の国

第0話：美神と聖女の対談	1
第一話：リプリール協定	14
第二話：魔導技術の未来	32
第三話：メヘルの遺跡	49
第四話：太陽の民	73
第五話：腐海の歪み	92
第六話：ベルリアの怪	113
第七話：奇妙な共闘	130
第八話：狂気の魔術師	144
第九話：女神と聖女の対談	165
序幕	

序章：闇夜の国

第0話：美神と聖女の対談

七古神戦争によつて形成された「ブレニア内海」は、その後の中原に大きな影響を与えた。オウスト内海に匹敵する大きさの塩湖の誕生は、大陸中原アヴァタール地方を多人口地帯に変えた。その後、レウイニア神権国の誕生によりアヴァタール地方の発展は決定的なものとなる。東西を結ぶ交易路「大陸公路」が走り、ヒトとモノが動くことで産業が発達し、西方諸国にも匹敵する大国が形成されていくのである。無論、その歴史は決して平穏なものではない。特に「エディカーヌ王国」「神殺し」の登場は、中原の歴史を大きく左右した。ここで、整理の意味で大陸中原の歴史について、振り返っておきたい。

大陸中原に国家が形成され始めた頃、最初の激震が走る。震源地は中原北部「レスペレント地方」であった。光の現神「姫神フェミリンス」と、闇の魔術師「ブレアード・カッサレ」による光と闇の大戦「フェミリンス戦争」である。この大戦の直接的影響はレスペレント地方に限定されていたが、歴史的に見ればこの大戦こそが「ファステイナ創世記の終焉」と「大陸黎明期の始まり」を象徴するのである。「神が人間に封じられた」と

いう大事件によりラウルバーシユ大陸、とくに歴史に対する神々への影響は急速に小さくなる。「神々および神殿」が歴史を動かしていたのがファステイナ創世記であるとすれば、フェミリンス戦争以降は「名も無き人々の意思」が歴史を動かすようになっていくのである。その一例が「メルキア王国」である。メルキア王国の建国者「ルドルフ・フィズメルキアーナ」は、神殿のためでも信仰のためでもなく、「平和な世界を創りたい」という「自身の信念」に基いて建国をしたのである。ヒトの意思が歴史を動かした端的な例であろう。その一方で、隣国に「ファステイナ創世記の名残」が建国されたのも面白い。「神の意志」によって生み出された最後の国、それがレウイニア神権国である。西方諸国は国教を定め、それ以外の宗派を（原則的には）禁じているが、レウイニア神権国においては、他宗教も禁じられていない。「水の巫女」と呼ばれる地方神を信仰しているが、これは民衆による「自発的信仰」に近い形態であり、国家は「教義」と「法」によって統治されている。ファステイナ創世記と大陸黎明期の、ちょうど中間で建国された国らしいといえるだろう。

次の激震は、一般的にはエディカーヌ王国の登場といわれているが、私はそれに疑問を提示する。歴史を観察するとエディカーヌ王国以前に、大きな衝撃が大陸に走っているからだ。それが「ターペエトフ」である。ターペエトフは、その存在自体が半ば伝説となっているが、各種史料から「大陸一の富裕国」であったことは間違いない。ター

ペーエトフで生み出される膨大な物産は、中原の発展に大きく寄与している。もしターペーエトフが無かったら、後の中原の勢力図は大きく変わっていたはずである。少なくともステインルーラ女王国、エディカーヌ帝国、メンフィル帝国は現存していないだろう。レスペレント地方、ケレース地方、アヴァタール地方の三大地方の歴史を左右した国家の存在は、決して無視はできないのである。

そして、ターペーエトフの「思想的衝撃」は、おもに西方諸国に影響を与えている。ターペーエトフは「光と闇の共生」を掲げていたとされている。西方神殿に残されている当時の記録では、光神殿からはガール、ナーサティア、イーリユン神殿がターペーエトフの首都プレメルに神殿を建て、神官を派遣している。闇神殿からはヴァスタール、アーライナが神殿を進出させている。一国の首都に、光と闇の神殿がこれほどに並び、共通の法によって統治された例は、ターペーエトフにおいて他にはない。後のエディカーヌ王国においてすら、あくまでも「神の道」という信仰体系の中で並列させているのみであり、西方各神殿に承認されているわけではない。ターペーエトフの登場は、政治と宗教を分離させ、教義ではなく法によって秩序を作り上げるという「法治」の概念に光を当てたといえるだろう。

ターペーエトフの登場と滅亡は、アヴァタール地方をはじめとする中原諸国に激震をもたらした。何しろ三百年にわたって生活基盤を支えていた「オリーブ油」が無くなっ

たため、各国では物価が一気に高騰し、バルジア王国やメルキア王国内では、集落単位での国家からの離脱や暴動などが発生している。レウイニア神権国内でも、複数の貴族が殺害されるなどの事件が発生しており、ステインルーラ王国でも、男女でオリーブ油配給量の差をつけたため、男たちが不満の声をあげている。ターペⅡエトフの滅亡が中原に与えた「経済的影響」は計り知れなかった。大陸中原は物価が高騰し、東西の商人にとつては格好の「稼ぎ場」になったのである。しかし、この稼ぎ時を利用したのは意外にも商人ではなかった。マーズテリア神殿の新たな聖女となったルナⅡクリアは、マーズテリア信仰を東方に広げるために、この稼ぎ時を利用した。大量のオリーブ油を仕入れ、マーズテリア神殿で無償配給をしたのである。貴族も平民も関係なく、椀一杯のオリーブ油を平等に配給したため、ともすると騎士層に集中していた信者層が、平民にまで一気に拡大したのである。当時の商取引の記録を見ると、ルナⅡクリアは商人としても凄腕であったことが伺えるのである。

そして、この稼ぎ時を利用したもう一つの勢力が「エディカーヌ王国」である。「闇夜の混沌の国」という国名からレウイニア神権国をはじめとする各国は、当初はエディカーヌ王国に対して必ずしも好意的ではなかった。エディカーヌ国王は中原の物価高騰を利用して、アヴァタール地方南部からニース地方で生み出された大量のオリーブ油、食糧を安価で供給した。それは「エディカーヌ産」への抵抗感を払拭して余りある

ものであった。リスルナ王国、ステインルーラ王国をはじめ、光神殿の影響が強いアンナローツエ王国ですら、エディカーヌ王国を認めざるを得なかったのである。ターペⅡエトフ滅亡を利用して、マーズテリア神殿は信者層を得て、エディカーヌ王国は国家としての認知と信用を得たのである。

エディカーヌ王国の建国については、幾つかが謎のままとされている。オリーブ栽培の技術をどこから獲得したのか、建国から短期間で多くの建設事業を行っているが、その資金はどこから得たのか等は不明のままである。エディカーヌ王国の建国以降、中原は束の間の平穏が保たれる。再び歴史が流れ始めるのは、エディカーヌ王国建国から百四十年後に起きたメルキア、レウイニア、エディカーヌの各国を巻き込んだ混乱「神殺しの登場」を待たなければならない……

メルキア帝国皇立博物院 院長 アーダベルド・D・マリーンドルフ著
「ラウルバーシユ大陸歴史大全 大陸中原編」序文より

ハイシエラ魔族国の討伐に成功したマーズテリア神殿聖女ルナⅡクリアと聖騎士エ
ルヴィン・テルカそして四千の精鋭部隊は、ケレース地方からアヴァタール地方に入り、

レウイニア神権国王都プレリアに戻っていた。往路は機密性を確保するため、市井の宿すら取らなかつたが、復路では迎賓館が用意されていた。いかに神格者とはいえ元々は人間である。魔族国討伐の疲れが無いといえ嘘になる。ルナークリアは素直に感謝し、迎賓館の一室で深い眠りについた。翌朝、朝餉を取った後に外出をする。この遠征を締めくくる重要な会談を行うためだ。

『この先は、水の巫女様が住まわれる「奥の泉」となっています。泉には栈橋が掛かっています。橋を渡り、中央の亭にて水面に手を入れてください。水の巫女様がお姿を顕します』

扉が静かに開かれると、眩しい光が目に入ってきた。どこまでも透明な泉が広がっている。中に入ると扉が閉められる。強い神気を感じた。水の巫女は滅多に姿を現さず、西方諸国ではその存在すら疑う声もある。だがルナークリアは領いた。

(なるほど・・・「本物」ですね)

栈橋を渡り、亭に入る。美しい巫人を象った石像が置かれている。その側で、水面に手を入れた。石像が光り輝いた。冷たい石像は、美しい女神への変わった。

『よく来てくれました。マーズテリア神殿聖女ルナークリア殿・・・』

殆ど無表情に近く、冷たく感じる。だがルナークリアは瞬時に悟った。これは「そういう神」なのだ。跪礼して名乗る。

『マーズテリア神に仕えし聖女ルナークリアで御座います。水の巫女様への御目文字が叶い、光栄の極みで御座います』

『・・・私はただの地方神、貴女が仕える神ではないのです。そうした跪礼は不要です』
『いいえ、たとえ仕える神とは異なれども、人々から慕われ、安寧を齎す神へは、敬虔なる気持ちを持つべきでしょう』

水の巫女の表情が少しだけ変化をする。ルナークリアは表情には出さなかったが、疑問を感じた。

『失礼・・・少し、昔を思い出しました。貴女の前の聖女殿も、同じようなことを言っていました。きつと、貴女の後の聖女も、同じなものでしょうね』

水の巫女は少しだけ微笑み、すぐに無表情に戻った。実際は、相当に愉快だったに違いない。ルナークリアは疑問に思った。先ほどの言葉は「冗談」のつもりだったのだろうか。神が「冗談」を言うのだろうか。促されて着席する。水の巫女は無表情のまま、聖女を見おろす。

『それで、聖女殿は私に聞きたいことがあるそうですか？』

『この度のケレース地方の混乱、正確にはマクルの崩壊、魔族国の登場、ターペエトフの滅亡に至る五十年の歴史を生み出す契機となった「赤髪の神殺しセリカ・シルフィル」のことについてです。彼は蒼髪の魔神ハイシエラに、その肉体を乗っ取られていまし

た。そしてハイシエラは、魔神でありながら建国という行動に出ました。国造りを行っていたことも解っています。およそ魔神とは思えぬ行動です。率直にお尋ねします。魔神ハイシエラに古神の肉体を持つ神殺しの存在を教え、さらに魔族建国という智慧入れをしたのは、水の巫女様・・貴女様ではありませんか？ターペⅡエトフの黒き魔神、ダイアン・ケヒトを止めるために・・・』

水の巫女は無表情のままであった。美しき女神と聖女が、沈黙の中で見つめ合う。しばしの沈黙後、水の巫女は口を開いた。

『ヒトは、どのように生きるべきでしょうか？どのように在るべきでしょうか？』

それは、聖女の質問への回答とは思えぬ、眩きにも似た言葉であった。だが聖女は、黙って耳を傾けた。

『この地を生み出したのは私だといわれています。悠久の時の中で、人々は忘却をしましました。遙か昔、ブレニア内海の岸边に力いっぱい振り下ろされた鶴嘴： たった一人の人間の、とても熱い夢から、レウイニア神権国が始まったのです。私はただ、それを見ていることしかできませんでした。雨の日も風の日も、人々は力を合わせて土を掘り、堤防を整え、五十年の歳月と百名以上の犠牲を費やして、この地を生み出

したのです。河川の氾濫に苦しんでいた彼らは、神に祈ることはしませんでした。己自身の力で、現状を変えようと立ち上がったのです。それがヒトが持つ力、ヒトが持つ可能性なのです。私は見たのです。魂が生み出す眩い光を、その光が持つ力を。神に祈るのは良いでしょう。ですが神に縋り、神に依存してしまつては、その輝きは得られません。どれほど過酷な試練であつても、ヒトは己の力で立ち向かい、己の力で克服すべきなのです』

『・・・・・・・・』

この神は、あの魔神と同じものを見ている。同じ地平を目指している。ただ時間軸が違うだけだろう。水の巫女は遠い遠い歴史を見据えている。あの魔神は、それを短期間で実現しようとした。だから水の巫女は止めるために動いた。ルナークリアは口を開いた。

『水の巫女様のお話は、私にも理解できません。ですがマーズテリア神の教義も、ヴァースタール神殿の教義も、努力によって苦難を克服する姿勢を推奨しています。神に縋る、神に依存すると仰りますが、敬虔な信徒であれば、努力を怠ることはしないでしよう』
『「教義で推奨されているから努力をする」・・・それ自体が「縋っている」のです。この地を生み出した人々は、教義に定められていたから立ち上がったのではありません。たとえ今は苦しくとも、子のため孫のため、未来のために苦難に立ち向かったのです。神

を信じるのは良いでしょう。教義に影響を受けるのも良いでしょう。ですが「教義に頼って」行動を、判断をしてはいけません。己の主人は、己自身なのです』

『・・・そう仰られますが、己の主人は己自身と言い切り、人生のすべてを自己責任で生きたるなど、並大抵のことではありません。ごく一握りの強者だけの生き方に感じます。多くの人々は教義の中で、教義に沿って生きること、平穏と幸福を得ているのです。ヒトの心は、そこまで強くありません。いたずらに混乱をもたらすだけに思えますが？』

ルナークリアは信じられなかった。これは一市民の言葉ではない。百万人以上の人々から信仰を受ける「神族」の言葉なのである。水の巫女は再び沈黙すると、ふっと笑みを漏らした。

『・・・ごめんなさい。今のが、かつて私との問答でディアン・ケヒトが語っていたことです。彼は「ヒトは神に頼らず、己自身の足で歴史を歩むべき」と考え、ターペーエトフを通じて思想的な革命を起こそうと考えました。ですが、その取り組みは余りにも急進的でした。光も闇も関係なく広く知識を普及させ、科学的思考によって世界を解き明かし、技術発達によって暮らしを豊かにし、民主という政治体制によって民衆自身が歴史を動かそうという取り組みでした。私は危惧しました。理由は、いま貴女が言ったとおりです。ヒトはそこまで強くない。ましてこの世界には、人間族以外にも多くの種族

が生きている。彼らにも、同じことを求めるのでしょうか。ターペーエトフは余りにも進みすぎました。それが、私が動いた理由です』

『……では、水の巫女様はディアン・ケヒトとは違う意見をお持ちなのですね？』
『いいえ…… 先ほど貴女が感じたとおりでです。彼の歩みは早すぎました。ですが目指した地平まで間違っているとは言えません。私には、彼と同じ地平が見えています。ですが、貴女の懸念も理解しています。旧世界のヒトは、行き過ぎた技術によつて破滅を呼びました。現神たちは意図的に技術的進歩を停滞させ、光と闇という対立軸を構築することで、種族間の争いを抑えながら、平穏な社会を構築しようと考えました。三神戦争から二千数百年、幾つかの災いは起きれども、多くの人々は信仰の中で平穏に暮らしてきたのです。その世界を護り、変化の少ない中で平和と幸福を求めるといふ考え方もあるでしょう』

ルナークリアは理解した。この神は「どちらも正しい」と言っているが、それを決めるのは自分では無い。それぞれが選ぶべきだと言っているのだ。そしてルナークリアは既に選択していた。この世界は二千数百年、平穏を保ってきた。七古神戦争などはあつたにせよ、いまも現神のもと、人々は暮らしている。それを変えようとすれば、どれほどの犠牲が生まれるだろうか。あの男を止めなければならぬ。光と闇の違いはあれど「神への信仰」を基盤とした社会秩序を護らなければならない。それが聖女とし

ての自分の役割であろう。ルナークリアはもう一人の「可能性」について尋ねた。

『・・・水の巫女様のお考えは解りました。お尋ねしますが、魔神ハイシエラの元々の肉体は・・・セリカ・シルフィルが殺した古神は、いったい何という神なのでしょう？』
『それは教えることはできません。いずれ彼が目覚めたときに、直接聞けば良いでしょう。少し先になるでしょうが・・・』

『バリハルト神殿騎士であったセリカ・シルフィルは、神殺しとなった後にマクルを襲撃しています。その様子は正に殺戮です。彼は、破壊神になったのでしょうか？』

『既に解っていることを聞くのですね？彼は破壊神ではありません。迷いと苦悩の中で己を見失い、やがて心が弱りきった時に、蒼髪の魔神に肉体を取られてしまったのです。いまはオメール山で静かに眠っています。いずれ目覚めし時は、現神からも古神からも狙われる、平穏とは程遠い「過酷な途」が待っているでしょう。本人の意志とは関係なく、災厄の方から襲い掛かってくる。一時の休みもなく剣を奮い続ける「戦女神」となる運命・・・彼をそこまで追い詰めた一端に、私が関わっていたことは事実です。その償いは、しなければなりません。彼を庇護し、激動の中でどのような生き方をするのか、見守りたいと思っています』

『ディアン・ケヒトは、ある意味で破壊神です。目に見える破壊ではなく、目に見えない方法で世界を変えようとしています。私は「力には力で」「言葉には言葉で」と考えてい

ます。ディアン・ケヒトが言葉で世界に関わる限り、私はそれを全力で止めます。ですが、彼が力を奮うようになったら・・・」

『・・・大きな災厄ですね。その時は「神殺し」が動くでしょう。たとえ本人が望まなくとも、運命がそのように流れるでしょう』

『解りました。私は西方に戻ります。いずれ来る「新たな激流」に備えることに致します。水の巫女様、いずれまたお時間をいただきたく存じます。オメール山が動く頃に・・・』

水の巫女は頷き、元の石像に戻った。ルナークリアは数瞬瞑目し、立ち上がった。振り返り、そこで止まった。栈橋の向こう側に、黒い外套を纏った男が立っていた・・・

第一話：リプリーール協定

エディカーヌ建国歴二十二年、ターペⅡエトフの滅亡から四年が経過したこの年、エディカーヌ王国王都「スケーマ」においてアヴァタール地方の歴史を決める重要な会議が開かれようとしていた。リスルナ王国宰相「トマス・ウートウルス」は、リプリーール山脈内にある「紅き月神殿」まで出ると用意されていた馬車に乗った。殆ど遺跡に近かったはずの神殿は綺麗に掃き清められ、石工たちが崩れた柱を補修している。護衛の竜騎士や部下も、その様子に目を見張っていた。

『宰相閣下、これから訪れる国は「闇夜の眷属の国」と聞いていましたが、何故、闇の現神ではない「紅き月神ベルーラ」の神殿を補修しているのでしょうか？』

『いや、聞くところによると、エディカーヌ王国は別に、闇の現神を国教としている訳では無いようだ。何でも「神の道」なる教えを定めており、現神も地方神も古神も関係なく、全ての神々を祀っているらしい』

『私もその噂は耳にしている。だが、そんな教えは聞いたことがないぞ？』

部下たちの会話を聞きながら、トマスは馬車の外を眺めていた。道は綺麗に整備され、馬車や荷車の行き交いもある。獣人族の集団が歩いている。神殿への参拝者だろ

う。エディカーヌ王国は建国からまだ二十年、リスルナ王国よりも若い。その割には、驚くほどに建設が進んでいる。緩やかな斜面にオリブ畑が造られている。その間を抜けてリプリール山脈を降りると、田園が広がっていた。宿場街を兼ねた農村で一泊し、王都スケーマを目指す。宿はそれほど大きくはないが、清潔な部屋であった。どうやらこの集落は獣人族の集落のようで、農牧業で生計を立てているらしい。宿主に暮らしぶりを聞く。

『建国間もないこともあり、耕作地などを拓かなければなりませんから、そういう意味では仕事は山ほどありますね。ですが王国から支援金も出ていますし、何よりやり甲斐がありますよ』

『物資などは不足していませんか？』

『まあ贅沢を言ったらキリがありませんからね。麦、野菜、肉は十分にありますし、暮らしはそこまで困っていません。強いて言うなら、塩が少々高いことですかね』

『高い…エディカーヌ王国でも通貨を発行していると聞いていましたが、皆さんもそれを使っているのですか？』

『ええ、もちろんですよ』

素材が異なる貨幣が机に置かれた。エディカーヌ王国の通貨「ガルド」のことは、もちろん知っている。だがトマスにとって意外だったのは、それが一民衆にまで浸透して

いることだ。リスルナ王国でも通貨は発行されているが、市井では未だに物々交換の取引も多く見受けられる。「商取引」の文化において、エディカーヌ王国はリスルナ王国を既に超えているのである。

翌朝、集落を出て王都スケーマを目指す。街道は広く、石畳で整備をされている。腐海の地は魔獣が多いと思っていたが、見渡す限りの麦畑であった。トマスは思わず唖つた。これほどの畑はリスルナ王国には無い。穀物は国家の生命線である。山岳地帯の多いリスルナ王国では「段々畑」などで小麦栽培などを行っているが、必要量を賄い切れず、レウイニア神権国からの輸入に頼っている。だがこの国はレウイニア以上に豊かかもしれない。部下の一人が小声で話しかけてくる。

『閣下、今回の交渉が上手く行けば、エディカーヌ王国からの麦やオリブ油の輸入も出来る様になるのではないのでしょうか？』

『そうだな。レウイニア一国に頼ることは、将来を考えれば危険だ。それにこれほどに整備された街道があれば、安価で大量に輸入することも可能だろう。交易協定は是非、結びたいものだ』

やがて王都スケーマが見えてきた。トマスたちはその威容に開いた口が塞がらなかつた。城壁は高く、およそ二十間（36M）はあるだろう。リプリーール山脈から流れる河を引き込み、城を取り巻くように堀が形成されている。跳ね上げ式の栈橋を渡

る。白い城壁はただの石造りではない。正確に積まれた石は、純白の漆喰で接着されている。堀に排水などの生活臭は全く無い。底まで見えるほどに透明で、小魚が群れをなして泳いでる。巨大な城門を通ると、熱気が襲ってきた。多種多様な種族が行き交う。客を呼び込む店員の大声、子供たちの笑い声など様々な「声」が聞こえる。竜騎士が左右から守っているため、さすがに近づいてくる者はいない。

『これが、エディカーヌ王国か…』

思わず呟いた。

ラウルバーシユ大陸中原アヴァタール地方南方に突如として誕生した国「エディカーヌ王国」は「ウエディーカーン闇夜の混沌」という国名もあり、建国当初は他国から警戒されていた。唯一の例外は、バリアレス都市国家連合であった。バリアレス都市国家連合はブレニア内海に面しており、塩業が行われている。内陸国であるエディカーヌ王国にとって「塩」は最重要の輸入品であった。連合の中核都市「レンスト」の代表者であるセリオ・ルビースはエディカーヌ王国と交渉し、必要量分の塩を輸出する代わりに、交易路をレンスト経由に一本化させることに成功する。これにより、レンストは大きな利益を得ることになるのである。

一方、ルビースの申し出はエディカーヌ王国にとつても有り難いものであった。エディカーヌ王国は建国当初から「人の流入」を制限していた。レンストにはエディカーヌ王国の領事館が設けられ、外部からの流入者はこの領事館で氏名を登録し、滞在許可証を得ることが義務付けられた。後世において「ビザ」と呼ばれる査証制度は、エディカーヌ王国が最初に始めたものと言われている。

だが当然、交易路の一本化は不利益も存在していた。エディカーヌ王国から見れば多人口地帯であるアヴァタール地方北部への輸出路を握られることになる。アヴァタール地方への輸出路の複線化は、建国当初からの課題となっていた。そこで女王ソフィア・ノアエディカーヌは、光側の国でありながら、同時に西方神殿勢力が進出していない国「リスルナ王国」に目をつけたのであった。

王都スケーマの中心にある「神宮」において、リプリーール山脈の領有権を巡る外交交渉が始まろうとしていた。円卓にはリスルナ王国宰相トマス・ウートウルス、リプリーール山脈北部「警戒の山嶺」より竜族代表としてラド・シアル、そしてエディカーヌ王国からはヴァリエルフ族ながら國務大臣を務めるパウル・オーベルジュが座る。それぞれが身分を名乗る。パウルは温厚な表情をラド・シアルに向けた。

『会議を始める前に、まずお祝いの言葉を述べさせて頂きたい。ラド・シアル殿には、御子がお生まれになられたとか： 竜族は長命ながら子が生まれにくいと聞いています。心より、お祝い申し上げます』

中年の人型に変異をしていた雄竜ラド・シアルは、少し驚いた表情を浮かべた。

『ほう… 耳が早いな。先月、娘が生まれた。中々に強い力を秘めており、将来を楽しみにしている』

『それはそれは… 御名前は、なんと付けられたのですか？』

『気高く、美しく天を飛翔して欲しいとの思いから「空^{エア}」と名付けた』

『エア・シアル殿ですか。素晴らしいお名前ですな』

ラド・シアルの口調は、外交の場であれば非礼とも言えるものであった。だが他の二人は気にしていない。トマスは人間族、パウルはヴァリール族である。竜族であるラド・シアルから見れば、外交交渉を持つこと自体が異例であり、畏まった口調など使う必要はないと考えている。二人の方もそれを当然と受け止めていたため、摩擦の原因にはならなかった。挨拶が終わり、具体的な交渉が始まる。リスルナ王国とエディカーヌ王国とは、既に担当者同士での下案を打ち合わせていた。問題は竜族がそれを認めるかどうかである。

『フム…リプリール山脈西方はリスルナ王国、南部をエディカーヌ王国というのは

まあ良い。問題は中央部から北部、そして東部だ。北部は「警戒の山嶺」として、古来より我らが棲んでいる。この地を譲ることは出来ぬ』

『当然でしような。我らリスルナ王国は竜族を崇める国： 現在、我らが暮らしている西方部を公式に認めて頂くだけでも、王国としては有難く考えております』

『我がエディカーヌ王国も、南方に突出した山地をお認め頂き、嬉しく思います。そうなりますと問題は…』

リプリーール山脈の全体図が壁に貼られる。他の二人は、ほうと声を漏らした。リプリーール山脈の全体像を初めてみたからだ。

『これは、女王陛下の使い魔が遙か上空から描いた下絵を参考に、行商人や狩人などの話なども取り入れて描いたものです。リプリーール山脈は東西に長い山脈ですが、この通り南北に突出している部分があります。西部はリスルナ王国が、突出した南部はエディカーヌ王国が、そして北部は竜族が治めるとして、問題はこの「中央部」および「東部」です』

『竜族としては、上空を通ることを認められるのであれば、中央部や東部に関心は無い。西部については、リスルナ王国とは既に暗黙の境界線もある。東部に至っては元々、我らは縄張りと意識をしておらん。人間族が勝手にそう思い込んでいるだけだ』

『なるほど… となれば、中央部についてはリスルナ王国と、我らエディカーヌ王国との

交渉となりますな。トマス殿、その認識でよろしいか？」

『結構です。リプリール山脈中央部は「メヘル盆地」と呼ばれる盆地帯があります。これまで「意戒の山嶺」と我が国とで共同管理をしていた地帯です。出来ればそのまま、我が国が管理を引き受けたいが……』

『「管理」とは、具体的にはどのような内容でしょうか？我が国もメヘル盆地を調査しましたが、あの地帯は完全な無人地帯のようですが……』

『……』

トマスは沈黙した。メヘル盆地は水源も豊かな森林地帯だが、リスルナ王国は開発に着手していない。その最大の理由は、あの地の「遺跡」にあった。下手に開発を進めようものなら、あの地に眠る「巨大な力」を目覚めさせる危険性がある。現在は、遺跡に邪な者が入り込まないように、見張りをしているだけであった。だがこの事実を伝えるべきかどうか、トマスは迷った。遺跡は滝の奥に隠されている。エディカーヌ王国が把握していない可能性も十分にあった。ラド・シアルも同じ考えを持ったようで、沈黙をしている。両名の沈黙に対し、パウルが札を切った。

『我が国としましては、中央部および東部をお任せいただけるのであれば、その見返りとして、貴国との交易協定を正式に結びたいと考えております。小麦やオリブ油、各種香辛料や南方の名産品など、我が国の物産品と、リスルナ王国の豊富な鉱石類とを交易

すれば、両国とも豊かになるのでは無いでしょうか？ 僭越ながら、貴国はレウイニア神権国とメルキア王国に挟まれており、両国からの輸入に頼っておられるとか： 現在、メルキア王国はレウイニア神権国経由でなければ、南方物産を輸入できない状態であり、極めて高価になっていると聞いています。交易協定によって、エディカーヌメルキアの新たな交易路が貴国内に通ることになります。この利益は、無視できないものと思いますか？：』

トマスは小さく息を吐いた。こちらの期待を完全に読み切られていた。そもそもメヘル盆地の「監視」は、費用は掛かるが何の利益も無い。出来れば、エディカーヌ王国に押し付けたいくらいであつた。交易協定の話は、本来こちらから要望すべきものであり、エディカーヌ側から切り出されたのは僥倖であつた。考えるトマスに対し、パウルが意味ありげな言葉を述べる。

『貴国は既に「封鎖地」をお持ちでしょう。二箇所を持つのは、些か負担ではありませんか？』

トマスは観念した。

リプリーール山脈の權益を巡る話し合いは終わった。竜族代表であるラド・シアル

は、その後の晩餐会には出席せず、そのまま「警戒の山嶺」へと戻っていった。パウルクとトマスが見送る中、別れ際に、警告に近い言葉を発する。

『これだけは覚えておくが良い。我らは警戒の山嶺に棲むが、この山全体を見守っていると自負している。山を穢し、そこに棲みし生き物を蔑ろにするならば、協定があらうとも我らは黙っておらぬ』

『ご安心を…』

二人の後ろから、女性の声が掛けられた。エディカーヌ王国女王ソフィア・ノアⅡエディカーヌが純白と緋色のドレスを纏っている。トマスは一礼し、パウルは跪いた。ラド・シアルの前に進み出たソフィアは、ドレスの端を持って一礼し、言葉を続けた。

『我がエディカーヌ王国は、生命を粗末にはしません。エディカーヌ国民は食事の前には「頂きます」と言葉にします。これは「生命を頂く」という意味です。私たちは独りではない。独りでは生きられない。皆で助け合いながら、大いなる自然の中に棲まわせて頂いている…これが神の道の教えです。リプリール山脈という「大いなる自然」に対する畏敬を忘れることはありません』

『貴女がエディカーヌ女王か。なるほど、確かに「神格者」だな。その殊勝さを忘れぬ限り、我らは貴国に関わることは無いだろう。では、さらばだ…』

ラド・シアルは頷き、飛翔した。人型から竜へと変身する。竜族は本来、変異の場面

を人に見せることは無い。信頼の証であり、ラド・シアルなりの「礼」であった。竜が北に消えると、ソフィアは振り返り、トマスに語りかけた。

『リスルナ王国宰相トマス・ウートウルス殿ですね？私は、エディカーヌ王国女王ソフィア・ノアエディカーヌです。本来であれば晩餐会で御挨拶をすべきでしたが、竜殿がお帰りになるとのことでしたので、慌てて見送りに来たのです』

輝くような笑みを浮かべる黒髪の美少女に、トマスは顔を赤くして畏まった。

（これが女王？なんと気軽で行動力があるのか。この方は、自分が「偉い」などとは毛ほども考えておられぬ…）

ソフィアは手を叩いた。

『さあ、晩餐会の準備が整っています。ウートウルス殿は我が国の賓客、最高のご馳走を用意しましたわ』

およそ女王とは思えぬ燥ぎように、トマスの部下たちも目を白黒させる。パウルは慣れているようで、笑いながら女王の後ろに続いた。

エディカーヌ建国歴二十二年、後に「リプリーール協定」と呼ばれる国境および交易に関する協定が締結された。リスルナ王国とは「紅き月神殿」を国境線を定め、積極的

な相互交易を行うことが決められた。メヘル盆地についてはエディカーヌ王国直轄地と定められ、実質的に「立入禁止区域」となる。アヴァタール地方とニース地方とを隔てるリプリール山脈南部、アヴァタール地方東域とニース地方を隔てる山脈東部もエディカーヌ王国の権益となるが、この当時のエディカーヌ王国はニース地方西部に進出している程度であり、山脈東部の開発は当分先のことである。一見するとエディカーヌ王国が最も得をしているように見えるが、「山脈の管理」を引き受けることにもなり、小国のリスルナ王国、意戒の山嶺の竜族も十分に納得した協定となっている。

リスルナ王国宰相トマス・ウートウルスは、報告の中でこう述べている。

『エディカーヌ王国は、その名の通り「闇夜の眷属の国」である。しかし、それが即ち「悪の国」を意味するものではない。確かに、エディカーヌ女王を始め闇夜の眷属が多い国であることは確かだろう。だがそこに暮らす人々は明るく純朴で、我が国以上に豊かな生活をおくっている。エディカーヌ女王との会話の中で、大きな気づきがあった。そもそも「闇夜の眷属」についての明確な定義は存在していない。アークリオンやマーズテリアといった「光側の現神」以外を信仰する種族を闇夜の眷属と呼ぶのであれば、竜族を信奉する我々もまた、闇夜の眷属に入ってしまうのではないか。「光と闇」という単純な二項対立は、なるほど信仰上では成立するであろう。だが現実社会においては、単純な二項対立で区分をするのは害にしかない。先入観を捨て、エディカーヌ王国を

「対等な友好国」として相互発展を目指すことが、我が国の国益に繋がると考えるものである』

リプリーール協定の締結後、国務大臣パウル・オーベルジュは協定締結および今後の外交議題について、女王および元老院に報告をした。エディカーヌ王国内に棲む六大種「人間族、イルビット族、ドワーフ族、獣人族、ヴァリールエルフ族、悪魔族」に加え、ディジエネール地方代表として龍人族が加わっている。この時期の元老院は、その構成も役割もターペールエトフと大きくは変わらない。後に帝国となった段階で、ここに各街の代表者を集めた「議会」が立法府の機能を果たすことになるが、それは少し先の話である。『リスルナ王国および竜族との交渉は、概ね我が国の要望が受け入れられ、まずは重畳でしよう。リスルナ王国からは早速、オリーブ油の大量注文が来ています』

パウルの報告を受け、各元老が話し始める。

『リプリーール山脈南部を完全に押さえることが出来たのは大きい。ドワーフ族の街「レミ」とを結び、「山越えの道」を整備すれば、ニース地方への新たな道が開けるだろう』

『レミを鉱工業の中核都市とすれば、ニース地方への経済的な影響力を更に持つことも出来る。また山脈にオリーブ園を作れば、再びターペールエトフに匹敵する生産力を持つことも出来るかもしれない』

『だが問題もある。リプリール山脈は魔獣の多い山脈だ。山越えの街道を整備するとしても、その道をどうやって維持するかが課題になる。また中央部の盆地の処置についても検討せねばならないだろう』

『史料研究および探索隊の調査により、メヘルの遺跡が古神に結びついてるのは確かです。あの盆地を開発すれば、災厄を呼び起こしかねません。立ち入り禁止区域にすべきでしょうが、それを管理する者が必要になります』

『それは大丈夫です』

女王ソフィア・ノアⅡエディカーヌの発言に、元老たちが注目した。

『メヘル盆地および山越えの街道については、私の使い魔に管理をさせます。「魔神D」であれば、万一の事態が発生したとしても、確実な対処が出来るでしょう』

『それは良い。陛下の前で申し上げるのは何だが、「魔神殿」をどうするかについては悩ましい課題であった。何しろスケーマの住民の中には、魔神と聞くだけで恐怖心を持つ者も多いからな。街道および盆地の管理に当てれば一石二鳥であろう』

『うむ。今でこそ「Dは魔神」という認識が広がっているが、時の経過と共にそれも薄れるであろう。ただでさえ、新王国は「闇夜の国」として警戒されているのだ。無論我々は、Dは信頼に値する人物であることを知っている。しかし、あまり表舞台に出て来られると、大きな問題に繋がるだろう。当分は大人しくしてもらおうしかない』

『…一言、宜しいですか?』

デージェネール地方の代表者である龍人族リ・フィナが手を挙げた。

『この会議に幾度か参加をさせて頂く中で、デージェネール地方の状況について、皆様にもお伝えしていると思います。「彼」は元々、デージェネール地方出身であり、彼に対して義理のある種族、集落も多いのです。デージェネール地方としては、彼に引き続き、貴国の窓口となつてもらいたいのですが?』

女王以下、全員が頷いた。元々、デージェネール地方とエディカーヌ王国とを結びつけたのは「D」である。ソフィア個人は、デージェネール地方は「尊重」という姿勢を持つている。だが国家として向き合うためには、具体的な姿勢の明示と政策形成を行わなければならない。それを国内に浸透させ、守らせるための法も必要になる。女王として、デージェネール地方への国家方針を明示する必要があつた。

『エディカーヌ王国女王としての、私の決意を述べさせて頂きます』

女王は立ち上がり、全員を見渡した。

『我が国には、デージェネール地方を支配する野心などありません。デージェネール大森林はその存在だけで、我が国にとつて西方に対する防壁の役割を果たします。彼の地に棲む様々な種族、文化・風習を尊重し、未来永劫に渡つて相互扶助の関係を保ちたいと願っています。「D」は既に、大森林西方沿岸域までの「転送網」を形成しています。』

彼が中心となって、今後も種族間の交流を深めていくでしょう。一方、我が国は今後、国内法による規制を考えています。デージェネール地方への入り口「エフタルの集落」を中心に、大森林への立ち入りを厳重に制限します。大森林への立ち入りを「D」独りに任せるわけにはいきませんが、彼の地の御意思は可能な限り、尊重します。どうか信じて頂けませんか？」

後世においても、エディカーヌ帝国はデージェネール大森林地帯への立ち入りを厳重に規制し、アヴァタール地方からはデージェネール地方北部のブレニア内海沿岸域しか立ち入ることは出来ない。エディカーヌ建国歴三百年頃、西方諸国の大国「神聖フェルス帝国」は、海外進出の第一歩としてデージェネール地方西方沿岸域への侵略を企図する。しかし、その野望は果たされることはなかった。デージェネール遠征軍を載せたフェルス帝国船団は、ラウルバーシュ大陸中原西方「ルノーシュ地方」の沖合を航行中に、尽く沈没したからである。当時、南方の「絹の海」からリガール半島西方「翡翠の海」までを縄張りとした大海賊「ガウテリオ・ボネツツイ」は、この大海戦を勝利したことにより「珊瑚海王」と呼ばれることになったのである。

リプリーール協定の締結、そして元老院での会議を終えたソフィアは、侍従たちに「瞑

想する」と伝えて神宮奥の自室に戻った。内側から鍵を掛け、隣接した部屋へと入る。部屋には三台の転送機が置かれている。嚴重な境界を形成すると、そのうちの一台に手を置いた。足元から光に包まれ、一瞬で転送された。

『：以上が、協定の内容です。リスルナ王国との交易協定については、詳細を詰めていく必要があるでしょうが、概ねは満足出来る結果です。リ・フィナ殿が残念がっていました。デイアンに会いたがっていたようです』

エディカーヌ王国某所にある「魔神の研究所」に、ソフィアは戻ってきていた。報告を聞きながら、デイアンは書類に眼を通していている。壁一面が本で埋め尽くされ、もう一面は全面が「黒壁」となっている。そこには様々な走り書きが貼り付けられ、棚は未知の素材で埋め尽くされていた。

『リプリーール山脈南部「山越えの路」の管理か：ようやく、あの路が整備できるな。元々が無人地帯だし、道が整備できれば国も豊かになる。利益相反の心配は無さそうだな。この四年、お前にばかり苦勞をさせて済まないと思っていた。オレもそろそろ、動き始めるぞ』

『魔焰研究のメドはついたのでですか？』

『ああ、ようやく完成した。本当はあと一つ残っているが、この開発だけでも歴史が大きく変わるだろう』

木箱を開け、人差し指程度の長さの水晶を取り出した。魔焰ではあるが従来のもとの色味が違う。蒼い光が内部から発していた。

『「蓄魔焰」と名付けた。魔力の吸収、貯蔵、放出を行うことが出来る。これで魔導技術は飛躍的に進歩をするだろう』

『「汎用型魔導技術の三大難問」のうち、二つは解決できたわけですね？魔導技術研究所で、さらなる研究を進めさせます。我が国は今後、魔導技術を中核とした「新たな社会」を実現します。ハイシエラ魔族国の滅亡によつて、西方にも魔導技術が広がるでしょう。「技術革新による社会体制の変革」…新世界が見えているのは、恐らく私たちだけでしょうね』

嬉しそうに蓄魔焰を眺めるソフィアに対して、デイアンは首を振った。

『いや…あと一人、見えている人物がいる。オレたちが「わざと残した」理由を彼女なら見抜くはずだ。だが、彼女一人で食い止めるのは限界があるだろう。利便性がある技術の普及を止めるのは、誰にもできないのだ』

『止めたところで、どうせデイアンが広めるのでしょう？』

薄暗い部屋の中で、魔神とその使徒はお互いに笑った。

第二話：魔導技術の未来

【汎用型魔導技術の普及における課題について】

デイルⅡリフィーナが形成される以前、人間族の世界「イアスⅡステリナ」は「科学技術」によって、その社会が形成されていた。科学技術とは、自然界の様々な現象を観測し、その構造を明らかにし、普遍的な「理論化」を行い、その理論を技術として応用したものである。彼らはこの技術により、数百人を載せた「空を飛行する乗り物」や、「衛星」と呼ばれる機械を遙か天空に打ち上げ、世界全体を観測したりしていた。現在のデイルⅡリフィーナとは比較にならないほどに「技術的発展」を遂げていたのである。だが無論、これには弊害があった。イアスⅡステリナの人間族は、機械の動力として「電力」と呼ばれる力を利用していた。動力とは、水車に例えれば「川の水」のことである。水車は水の流れを受け止めて回転し、その回転を利用して麦を脱穀したりする。電力があれば、水がなくなるとも水車を回すことが出来るのである。簡単な例であるが、これが「電力の作用」である。

彼らは様々な手法によって電力を生み出し、信じ難いほどの「物産量」を誇っていた。だが「大量生産・大量消費」という社会形態は住環境を汚染し、人間族以外の種族を苦

しめ、ついには人間族自身すら、生活できない程になってしまった。彼らは魂が生み出す「魔力」という動力を知らなかったのである。もしイアスエステルナ人が魔力を知っていたら、あるいはデイルリフイーナは誕生しなかったかも知れない。魔力は魂を持つ種族であれば誰しもが持ち、一定の教育によつて発現する。電力を生み出すと環境が汚染される。だが魔力であれば、そうした汚染は発生しない。

「電力ではなく、魔力によつて機械を動かせば、環境を汚染せずに豊かな生活が出来る」そう考えたのが「ガーベル神」である。ガーベル神は、魔法石を利用することで「魔力を発現していない者でも魔法が使える」ことを目指した。その代表例が「魔導火付け石」である。魔導火付け石は、魔法石と術式を描いた銅板を繋ぎ、誰しもが火炎魔法を使うことが出来るようにした装置である。こうした、「電力に代替して魔力を利用して機械を動かし、物産に役立てる一連の思想・技術体系」のことを「魔導技術」と呼ぶ。

魔導技術の誕生から二千年以上が経過しながらも、この技術は普及をしていない。魔導火付け石は高価であり、貴族の好事家などが、道楽で所有している程度である。「古の宮」の魔導巧殻などの例に見る通り、ドワーフ族内でのみ魔導技術は伝わっているが、社会の中核となったことはない。確かに魔導技術は、科学技術が実現した「より早く、より多く、より安く、より高品質に」という欲求を叶える可能性を秘めている。だが、魔導技術の普及には大きな課題が立ちはだかっているのである。それが「汎用型魔導技術

の三大難問」である。

まず第一に、魔力の不安定性である。魔導技術は魔法石を利用するが、魔法石はその結晶純度により、含有する魔力に差異がある。また魔力の放出量にも違いが出る。魔導火付け石程度であれば問題にはならないが、魔導技術を社会に普及させる上では、この不安定性は致命的である。魔法石に代替する「新たな魔力供給素材」を開発する必要がある。

第二に、費用の問題である。魔法石は産出量が限られており、単位重量あたりの価格が極めて高い。現在の魔導技術は魔法石を「使い捨てる」ことが前提であるため、これではごく限られた富裕層以外には、魔導技術を利用することは出来ない。また、魔力が切れた魔法石の処分の問題もある。魔導技術普及のためには、低価格化を進めると共に、この「使い捨て」を解決しなければならない。

第三の難問は、「術式保存」である。「魔法」とは、魂あるいは神核などが生み出す魔力を使って様々な現象を起こす「技術」および「現象」の総称である。魔力自体は誰しもが持っているが、目的達成のためには魔力を正しく操作しなければならない。一に對して二という回答を得たければ、一を加えるか二を掛けるかをしなければならない。求める結果を得るための魔力操作方法を「術式」と呼ぶ。この術式こそが、魔術師にとつての研究課題であり、新たな術式は「秘奥」させるのが一般的である。術式を得たけれ

ばそれなりの魔術師に弟子入りをし、長い時間を掛けて学び取らなければならない。ガールベル神は魔導火付け石を発明する際に、魔法石からの魔力抽出方法を確立するとともに、極小火炎魔法の術式が描かれた銅板によって、この課題を解決した。しかしこの方法では、より複雑な術式を組むことは困難である。例えば「日が沈むと点灯する街灯」を魔導技術で実現するためには、単純な「光魔法の術式」以外にも「外部からの照度を計測する術式」「光魔法の発動を制御する術式」など、様々な「組み合わせ」が必要となる。これらを銅板で行おうとすれば、巨大な装置となってしまう。複雑な術式を一括して保存する「術式保存の新方法」が必要なのである。

この三つの難問を解決する方法は、残念ながら発見されていない。この難問の解決方法を発見した国家は、世界最大の「魔導技術大国」となるであろう。三神戦争から二千年が経過した今日においても、技術的革新は停滞している。後世において、志有る者がこの難問を解決してくれることを切に願うものである。

Blaird Kasserre

ターンツという音が響く。見守っていた兵士たちが慄いた。二十歩離れた鎧には、弾がめり込んでいる。その様子を見ていた聖騎士エルヴィンは顎を擦りながら呟いた。

『驚いたな……この武器が広がれば、戦場のあり方が一変するぞ』

ハイシエラ魔族国を滅ぼしたマーズテリア神殿軍は、レウイニア神権国を通過し、ブレニア内海を渡つてベルリア王国に来ていた。プレメル王宮の武器庫で発見した「謎の道具」を調査した結果、魔導技術によつて生み出された新型の武器であることが判明した。空気抵抗を抑える術式を刻印した弾、純粋魔術の爆発力を一定方向に向ける新たな術式版、そして小さいながらもかなりの魔力を蓄えている水晶、これらはいずれも、西方諸国には無い新技術であつた。

『総本山に到着次第、技術者をかき集める。コレの複製を研究させる』

聖騎士の指示を横目に、ルナークリアは沈思していた。武器としての性能もさることながら、ルナークリアを悩ませたのは「未知の魔法石」の存在である。通常の魔法石とは異なり、これは人工的に作られたものであつた。つまり魔力貯蔵量と出力に安定性を持つている。この人工魔法石は、魔導技術を飛躍的に広げる可能性を秘めていた。それは即ち、「誰もが魔術を駆使できる世界」に近づくことを意味する。戦場のあり方もそうだが、それ以上に「社会全般の革新」に繋がるだろう。

（牛や馬で耕していた畑を地脈魔術で耕す。水系魔術で砂漠を肥沃な大地に変える。光系魔術で夜の街頭を明るく灯す……これが実現すると、ヒトは……）

ルナークリアは魔導技術の可能性と、それがもたらす「新世界」に対して、ある種の

不安を持った。

マーズテリア神殿総本山ベテルーラの街には、歓呼の声が響いていた。民衆たちは一斉に大通りに出て、マーズテリア神殿魔族国討伐軍を迎えた。ルナークリアの姿が見えると、その声は頂点に達した。クリアは手を挙げ、微笑みながら前に進む。だがその内心では複雑な思いであった。教皇庁に入ったクリアはさつそく、教皇ウイレンシヌスおよび枢機卿たちへの報告を行った。

『聖女ルナークリア殿、イソラを回復させ、魔族国を討伐されたこと、実に見事でした。カルツシャやフレスラントからも国王直筆の感謝状が届いています。また、ヴィルト・テルカ殿も無事に回復をされているそうです。いずれシユミネリア王女も、イソラ王国に戻り、王国の再興を果たすでしょう』

『猊下御自らお褒めを下さるとは、光栄の極みです。私の働きなど微々たるもの。全ては、兵士一人ひとりの奮闘によるもので御座います。どうか彼らにも、慰労のお言葉を お掛けください』

『もちろんです。今宵の戦勝祝賀会で、私自身が声を掛けていきましよう。本当に、良くやってくれました』

枢機卿たちも安堵の表情を浮かべている。だがルナークリアの表情は、とても勝者のものでは無かった。

『聖女殿、先程から表情が晴れないご様子ですが、何か気になることでもあるのですか？
よもや、何処かお怪我をなされているとか』

『いいえ…今回は戦勝と言つても、魔神ハイシエラ、宰相シュタイフェを取り逃がし、西ケレース地方の占領には至りませんでした。魔族国を滅ぼしたとはいえ、得るものは多くなく、申し訳なく思う次第です』

『何を言われますか。「ヒトの力で魔族国を滅ぼした」という事実は、何物にも代え難い功績、さらには新たな魔導技術も手に入れたと聞いています。確かに魔神を滅ぼすには至りませんでした。十分な戦果ではありませんか』

『猥下。その魔導技術のことですが、技術者による研究は進めるとしても、その成果については機密情報として扱っていただきたいのです』

『ほう？それは、なぜでしょう？』

聖女は少し沈黙し、説明を始めた。

『魔族国はその滅亡に際して、「全ての記録」を消去していました。ターペーエトフ、ハ

イシエラ魔族国、そしてエディカーヌ王国とを結びつける証拠は、残念ながら何一つ残されていません。プレメルの大図書館、魔導技術研究所、オリーブ油精製場など、ターペⅡエトフの主要産業のほぼ全てにおいて、その技術も使用されていたであろう魔導機械類も、跡形もなく消されていました。ハイシエラ魔族国の仕業とは思えません。彼ら是我々との戦いにおいて魔導技術を使用していませんでしたし、時間的にもこれほど徹底して消去することは不可能だったはずです。このことから、ターペⅡエトフ滅亡時点で、魔導技術は完全に失われていたものと、私は確信しています。これほどまでに徹底的に痕跡を消し去ったにも関わらず、王宮の武器庫に魔導兵器が残されていた…あまりに不自然です。何者かが、意図的に魔導兵器を残していたとしか思えません。このようなことを画策するのは唯一人、ターペⅡエトフの黒き魔神ディアン・ケヒトの仕業でしょう』

『「神からの自立」を掲げる思想家ですね？ですが、ディアン・ケヒトは何を考えて、わざわざ魔導兵器を残したのでしょうか』

『「神からの自立」とは具体的に何か？彼はこう言っているのです。「神殿は歴史の舵を握るな。国家の政治に関わるな。神殿領も神殿軍も持つな。人々の暮らしは教義では無く法によって治められ、人々自身の責任によって、その歴史を紡ぐべきなのだ。神殿は宗教団体として、信仰したい者が自主的に集い、身内で慎ましく修行をしていれば良

いのだ。自分たちの信仰を絶対として、他者に押し付けるな」と…この思想は、現在のデルリリフィーナとは全く異なる世界を描いています。我々とは決して相容れない思想です。では、彼はどのようなようにして、自らが思い描く世界を実現しようとしているのでしょうか？その答えが、魔導技術なのです』

『……』

教皇以下、枢機卿全員が深刻な表情を浮かべていた。これまでは枢機卿の中に、ディアン・ケヒトの思想を軽んじていた者も少なからずいた。だがルナークリアが語った「新思想」の具体的世界観を聞いて、その場の全員が沈黙した。その世界観はまさに、ターペエトフそのものであった。豊かで平穏で眩い光に溢れた国…人々が夢に描く理想郷の実態は、各神殿勢力に対して「滅びろ」と宣言しているに等しい「危険な国家」だったのである。枢機卿たちが頷きあう。

『…「ターペエトフだけでも滅ぼす必要があった」以前、聖女様がそう言われた理由が、やっと得心できました。それで魔導技術が答えというものは、どういうことでしょうか？』

『魔導技術とは、魔術体系の中に、旧世界の思想「科学」を組み込んだものです。その最終目的は、魔術が使えない者でも、魔術と同じ効果を得ることが出来る、というものです。ガールベル神自身は純粋に、人々が豊かになるようにと願われたのですが、魔導

技術が広がればどうなるでしょうか。魔導技術によって生まれた「魔力で動く道具」を誰でも安定して使うことが出来るようになる。そうなれば、もつと効率をもつと効果をと、人々は豊かさを求め、技術研究に没頭するでしょう。その行き着く先は、旧世界の思想「科学」の復活です。国家、そして社会の基盤は、神々に対する信仰心ではなく、魔導技術を中核とした科学思想が担うことになります』

『ですが人々が豊かになれば、それは神殿にとつても利益となるのではないのでしょうか？ 聖女様が仰られる「魔導技術を中核とした世界」とやらが、私には想像できないのですが？』

枢機卿の一人が手を挙げて疑問を提示した。皆も一様に頷く。当然だろう。枢機卿とはいえど人間である。言葉だけの概念で具体的な世界を想像するには限界がある。ルナークリアは言葉を選ばざるを得なかった。前聖女と同じ轍を踏むわけにはいかない。

『科学思想では、「事実を客観的に観測し、そこから法則を見出す」という手法が採られます。例えば、私は神格者として不老長寿を得ています。もし魔導技術が普及すれば、研究によって同等の現象を起こせないか、と考える不敬者も出てくるでしょう。神への信仰心があれば「禁忌」と考え、歯止めにもなるでしょうが、それにも限度があります。一たび刺激された人間の欲望は止められません。「魔人」という存在が事実としてあり、

魔導技術によって簡単に誰しもが魔人になれる可能性が示されたらどうなるか。数十年の寿命を数百年に延ばせるかもしれないと知れただけで、各国の王や貴族はこぞつて、魔導技術研究に明け暮れるはずです』

枢機卿たちはまだ納得がいかないようでも首を傾げていたが、教皇は理解をしたようである。

『黒き魔神が西方諸国に魔導技術を広げるために、意図的に魔導技術を残した：そういうたいのすね』

『そうです。彼の魔神はわざと、魔導技術によって生み出された「武器」を残しました。確かに、魔導技術は社会を豊かにする可能性を持っています。ですが使う者次第では、大きな災厄を引き起こしかねません。いたずらに各国に教えれば、間違いなく戦争で使われるでしょう。その悲劇は、これまでの戦争とは比較になりません』

この説明は、枢機卿たちも理解が出来たようである。教皇ウィレンシヌスは頷いた。『他の神殿とも相談をしなければなりません、この技術は私たち神殿によって管理をしましょう。魔導技術が普及した社会という点については、まだ解らない部分もありますが、戦争で使用される可能性は十分に理解できました。マーズテリア神殿の機密として、厳重に保管しましょう』

『私の言葉が足らず、申し訳ございません。いたずらに危機感を煽るようなことを申し

上げたこと、お詫びいたします』

『未知の技術が齎す、遠い将来の可能性を話されたのです。言葉にすることが難しいこととは理解しています。さあ、そろそろ支度をせねばなりません。聖女殿、本当にご苦労様でした』

聖騎士エルヴィンはホツとした表情を浮かべた。何が語られているのか、殆ど理解できなかつたからである。ルナークリアもそれ以上は語らず、一礼して部屋から出ていった。

戦勝祝賀会を終えたルナークリアは、聖女の館に戻ると湯殿に入った。侍女たちも手伝つて、白い礼服を脱ぐ。口には出さないが、ルナークリアはこうした礼服が嫌いであつた。元々が活動的な彼女は、胸を締め付ける堅苦しい服よりも、多少は露出が多くても、普段着を好んでいた。白い足が大理石の床を進み、湯に浸かる。深く息を吐き、緊張を緩める。男たちの中には、自分に対して「別の視線」を向ける者もいる。酒の入る祝賀会では特にその傾向が強かつた。それも男の性とは思ふが、舐め回すような視線には不快感を抱かざるをえない。湯に浸かることで、そうした視線が洗い流されていくように感じた。

（あの男も、私に対してそうした欲情を抱いたのだろうか？）

ふと、黒衣の魔神を思い出す。対面して言葉を交わしたのは僅かに二度、だがそれでも強く印象が残っている。十三歳で聖女として見出されてから、聖女ルナークリアとして生きてきた。自分の本名「クリア・スーン」の名を知る者は殆どいない。皆が「マーズテリア神の聖女」として特別視する。その期待に応えるように、多くの言葉を吐き続けてきた。マーズテリアの教えを広め、生きる指針、価値判断の基準を提示してきた。闇夜の眷属など、自分を拒絶する存在はあつたが、対等に反論してきた存在は無かつた。あの男だけが、真つ向から別の思想をぶつけてきた。

『同じ時代に生きる者同士、お互いにしがらみなく現在いまと未来について語り合ったら、きつと面白いでしょうね』

ありえない可能性を夢想して、聖女は小さく笑つた。

ベテルーラに戻ってから一週間後、総本山の中にある「魔術研究所」にルナークリアの姿があつた。魔族国から持ち帰つた未知の魔導技術に、研究者たちは興奮していた。『聖女様、この水晶は驚異的です。魔法石と同じ効果を持っていますが、蓄えている魔力は桁外れです。製造方法はまだ不明ですが、おそらく魔法石の結晶と思われれます。私た

ちはこの水晶の名を「魔鉛」と名付けました。これが量産できれば、魔導技術は一変します』

『「魔鉛」ですか… それで、量産化のメドは立ちそうですか?』

『現時点では何とも… 一口に魔法石と言っても、その種類は多岐にわたっております。また、破砕した場合は魔力も喪失してしまうのが普通なのです。どの種類の魔法石をどうやって結晶化したのか、現時点では全く解りません。研究をさらに進めたく思います』

『持ち帰った筒状の武器はどうですか? 純粹魔術によつて、金属の弾を打ち出す仕組みのようでしたが…』

研究者は嬉しそうに聖女を案内した。部屋の一角の机に、分解された魔導銃が部品ごとに整理されていた。

『まず驚異的なのは、この術式です。魔導技術は術式を描いた金属板に魔力を透過させる仕組みですが、純粹魔術の爆発力を一定方向に流す術式など、見たことも聞いたことありません。よほどの大魔術師が長い期間を掛けて研究した成果なのでしょう。この術式一つで、魔術師たちは大騒ぎです。さらにはこの金属、鉄でも鉛でもなく、全く未知の金属です。ドワーフ族の技術と思われまますので、ガール神殿に協力を仰ぐべきでしょう。よく見ていてください…』

棒を立て、その先端に術式が描かれた金属板を挟む。同じく、棒に魔鉛を括り付け、慎重に金属板に近づける。接触した瞬間、ボンツという音が響いた。

『ご覧の通り、この未知の金属板は魔鉛から魔力を吸収する性質を持っています。この金属で他の術式を描けば、薪に代わって炎を安定的に発生させたり、ロウソクに代わって夜を照らしたりと、応用の可能性は無限に広がります。人々の生活が劇的に変わるでしょう』

『そうですね。そして、戦場の在り方も一変するでしょう…』

燥ぐ研究者たちを尻目に、ルナークリアは憂鬱な心境であった。

(この技術を封印したとしても、いずれ必ず漏れ広まるだろう。それが「あの男」の狙いに違いない…)

聖女はそう確信していた。

一方、黄昏の魔神ディアン・ケヒトと二人の使徒は、リプリール山脈に来ていた。三百年以上前に、行商隊の護衛として山越えをしたことがある。あの頃と殆ど風景は変わっていない。少し感傷に浸りながら、魔獣の縄張りなどを調査する。魔獣は餌を得るためか、縄張りを護るために襲撃をしてくる。狩人から聞いて予想はしていたが、魔獣

の警戒域は通っているものの、縄張り自体を侵してはいないようだ。夜道に注意を払えば、比較的 safely 通ることが出来るだろう。

『フム……これなら山道を整備しても魔獣たちを追い出すことは無さそうだな。それに、ここは景色が良いし、なにより湯が出るようだ。ここに宿場先住者を造るか』

所々に蒸気が噴出している。ディアンは地脈魔術を走らせた。瓦礫が一斉に破碎され、地面が均されていく。それなりの広さを水平にし、一気に固める。僅かな時間で大理石のように堅い地面が出来上がった。

『まずは山道の瓦礫を除去し、荷車が通りやすいように道幅を広げよう。水飲み場の整備も必要だな。行商隊が山越えをするには、三日は必要だ。朝、麓を出発したら初日は野宿し、二日目の夕刻に宿場に入るように整備する。宿場で一泊し、翌朝に山を降りる。迂回をしたら二十日以上掛かる道が、わずか三日で超えられるのだ。この山道はエディカーヌ王国の基幹道になるだろうな』

『初日に野営をしてもらうなら、その場所も整備をしておく必要があるわね。万一にも魔獣に襲われないよう、弱めの結界を張っておいたらどうかしら？』

『そうだな。だが、この山に棲むレブルドルを始めとする魔獣、洞窟に暮らすミノタウロスなどの亜人は先住者だ。縄張りには入っていないが、山で暮らす者同士、しつかりと筋を通しておく必要がある。だがいずれは、別の地に移住をしてもらう必要もあるかも』

しれん。遠い将来、この山道は片側二車線以上の大道路になるだろう。魔導技術によって自走式となった「荷車」が行き来するようになる。より速く、より遠く、より多く……これが「文明の必然」だ。デイル||リフイーナの大自然と共に生きながら、どうやってその必然を達成するかが鍵になるな』

（ブレアード・カツサレは偉大な大魔術師であったが、やはり科学世界を知らない。魔導技術の三大難問はいずれ解決できるだろう。だがそれ以上の難問がある。電力は「送電」できるが、魔力はそうではない。魔導社会を実現するには、大魔力を安定的に生み出し、それを社会の隅々まで送る仕組みが必要だ。その仕組みが完成した時に、真の魔導社会が実現する）

デリアンの脳裏には、遙か未来になるであろう「魔導科学世界」が広がっていた。

第三話：メヘルの遺跡

国家勃興期（後世の歴史家は「大陸黎明期」と表現）以前のデイルリフイーナの歴史は、七古神戦争前後で二つに分けられる。三神戦争から七古神戦争までの千数百年間を「フアステイナ創世期前期」、七古神戦争から国家勃興期までの一千年を「フアステイナ創世期後期」と呼ぶ。国家勃興期が始まる時期については歴史家によつて意見が分かっているが、「フェミリンス戦争の終結」をもつて国家勃興期の開始とするのが定説となっている。フェミリンス戦争以降、ラウルバーシュ大陸の歴史に対する現神の関わりが希薄になり、大陸各地に国家が誕生し始めたからである。

フアステイナ創世記前期については、各神殿に記録が残されており、また民間においても様々な民謡、詩歌によつて謡われている。フアステイナ創世記において現神は科学を封印し、それに替わつて魔術を広めた。その原動力となつたのが「フアステイナ神聖語」の誕生である。フアステイナ神聖語は、魔術の術式を文字形式に置き換えたもので、それまで複雑な技法であつた魔術を人間族にも扱えるほどに簡易にした。これにより人間族にも魔術が普及し、科学知識は失われていったのである。フアステイナ神聖語は現神神殿によつて広められ、言語の普及とともに現神信仰も広まつた。国家勃興期以

降、各国はこぞつて「魔術師養成」の学校を建てるが、逆に考えればそれほどに、フアステイナ神聖言語が普及していたとも言えるのである。

フアステイナ神聖言語は魔術の術式を文字として簡易化したものである。そのため、発動する魔術には自ずと限界がある。秘印術および純粹魔術、また農耕など日常で使用される魔術については、フアステイナ神聖言語によって不自由が無くなつたが、マーズテリア神殿が持つ極大神聖魔術「軍神Mar'sの鉄槌Hammer」などは、明らかにフアステイナ神聖言語の限界を超えており、デイルリフイーナ誕生以前の「古代魔術」に属すると考えられている。また、召喚術や生命融合、創造体創出などの術式は、フアステイナ神聖言語と古代魔術を組み合わせたものであり、後世においても「高度魔術」として分類されている。特に一瞬にして数百里を飛び越える「転移魔法陣」は、社会に混乱を齎しかねないことから、その術式は神殿において嚴重に管理されている。例外としては、レウイニア神権国にある「転移の遺跡」であるが、これは七古神戦争において古神たちが使用したものと考えられており、水の巫女神殿によって立入禁止地区となつている。小規模な転移を可能とする「転送装置」においてすら、ブレアード迷宮で確認できる程度である。

リプリーール山脈中央部にある盆地帯「メヘル」は、山脈から清流が流れ込み、広葉

樹が茂る豊かな土地である。この盆地が古来より手付かずであった最大の理由が「メヘル遺跡」である。リスルナ王国誕生以前から、メヘル盆地は竜族およびその眷属たちによつて厳重な管理がされてきた。しかし山脈南方にエディカーヌ王国が建国されたことにより、この盆地の管轄権はエディカーヌ王国が持つことになった。先遣隊によつて遺跡の存在は確認しているが、本格的な調査となればファスティナ神聖言語、およびそれ以前の古代文字を読めるものがいなければならない。エディカーヌ王国は正式な調査団を結成し、護衛役兼言語解読担当としてディアン・ケヒトに仕事を依頼したのである。

『おおっ……これは松露だ！それもこんなに大きなヤツは初めて見た。持ち帰つて食べよう！』

イルビット族の植物学者プルルとマルコは、メヘル盆地の自然環境を調査するため、今回の調査団に加わっていた。これまで盆地を管理していた竜族やリスルナ王国は、盆地帯の植生には興味がなかったようである。手付かずの自然がそのまま残されており、二人は興奮していた。

『プルルさん、目的を間違えないで下さい。今回は遺跡の調査です。動植物の調査は別の機会でお願ひします』

調査団長を務めるイルビット族の考古学者「ペトラ・ラクス」は苦笑いをした。休憩

中にも関わらず、イルビツトの研究者たちは周辺調査に余念がない。イルビツト族は好奇心の塊である。メヘル盆地という「未知の土地」に興味を沸かさないはずがなかった。ペトラは溜息をつき、自分の好奇心を抑えながら先に進もうとした。しかし肝心の護衛役の姿が見えない。

『あら？ ディアン殿はどちらに？』

『彼なら…』

レイナは笑いながら指差した。黒い背中が見えた。いつの間にか池沼の縁に立って釣り糸を垂らしている。ペトラは思わず叫んだ。

『ディアン殿ッ！ なにを遊んでいるんですか！』

『ん？ いや、これは遊びではないぞ。この池の生態調査だ。見ろ。鯉とナマズがいるぞ。これなら魚料理が食える。しまったな… 塩は持ってきているが、味噌や醤油は無いぞ』

ペトラは腰に手を当ててディアンの後ろに立った。瞳を怒らせている。

『…ディアン殿、この魚をどうするつもりですか？ まだ日が高いのですが？』

『フム… 比較的、綺麗な池だからすぐ食えるかとも思ったが、やはり泥抜きは必要かな？ 小川の縁に岩で囲いをつくって、暫く置くか』

『そんなことを聞いているではありません！ 未知の魔獣がいるかも知れません。魚を

放して、すぐに護衛に戻ってください!』

『大丈夫だろう。「魔獣の気配」は全く感じない。この盆地にいるのは熊、鹿、猪などだ。実に豊かな土地だな』

植物学者のプルルが駆け寄ってくる。手袋をした手に「鮮やかな紅色」の茸を持つている。

『ディアン殿、この細長い茸は新種だぞ。少なくともケレース地方やディージェネール地方には無い!』

『フム：一般的な茸のような傘はなく、細長い棒状か。その紅色：ひよつとして「カエンタケ」の一種ではないか? 試しにすり潰して、そのナマズに食わせてみようか。カエンタケなら「間違いなく」死ぬ』

燥ぎあう二人の背後で、丸眼鏡の女性は拳を震わせていた。

『いい加減にしなさいつ!!』

怒鳴り声が森に響いた。

メヘル遺跡は盆地の北東部にある。中央部の池沼を通り抜け、調査団は北東部に入った。リプリール山脈から流れ込む滝の音が聞こえる。遺跡までもう少しというところ

ろで、ディアンが立ち止まった。

『ディアン殿？どうしたのですか？』

『…レイナ、お前は何か感じたか？』

ペトラの問いに答えず、ディアンは自分が信頼する第一使徒に問い掛けた。だがレイナは首を横に振った。

『いいえ、特に気になる気配は感じなかったわ。ただ、どことなく気持ち落ち着かないわね』

『お前もそうか。オレも気配は感じていない。だが…』

粘りつくような視線に近いものをディアンは感じていた。森の動物たちも異邦者である調査隊を見ている。そんな視線はいちいち気にしていられない。だがその中に「観察の眼」を感じた。ほとんど直感にも近いが、ディアンは慎重を期した。

『ペトラ殿。滝に到着したら、調査を始める前に野営の準備をして欲しい。こちらも境界を張っておきたい。どうも「変」だ…』

『なにか感じているのですか？』

『いや、感じていない。だから変なんだ。このメヘル盆地は植生が豊かで、餌となる動物も多い。一方で、人間に襲いかかるような魔獣はいない。これは気配からも明らかだ。これほどの餌場に魔獣がないなんて、可怪しいとは思わないか？誰かが魔獣を狩って

いるとしか思えん』

『我々が気づいていないだけで、先住民族がいると?』

『恐らくな。そもそも、古神の遺跡でファステイナ神聖言語が見つかったということ自体がな… 何か可怪しい』

調査隊はやがて、滝壺にたどり着いた。デイアンの進言を受けて、野営の準備を始める。デイアンは地面に魔法陣を描き、己の血を滴らせた。描かれた文字が、黄色い光を放つ。

『…眷属創造「アース＝ゴーレム」!』

魔法陣が描かれた地面が変形する。七尺以上の背丈を持つ人型の魔物「ゴーレム」が生み出される。精霊魂を入れていないため、自己判断力が弱いという欠点はあるが、創造主の命令には絶対的に従う。

『イルビット族の護衛を務めろ。特にペトラ殿のテントの護衛だ。襲撃者がいたら無理に撃退せず、護ることに集中しろ』

ゴーレムは一礼し、ペトラのテントの前に立った。デイアンは更に念を入れて、木々に自分の地で結界の紋章を描いた。エルフの杜と同種の結界で、相手の力が強いほど、結界も強くなる。

『これで大抵の魔物は近づかないはずだ。ペトラ殿、少し早いですが、ここで野営をして

明日から調査としてはどうでしょう？もう少し、周囲の様子を探っておきたい』

『随分と警戒をされていますが、それ程に危険なのでしょうか？』

『古神が封じられた遺跡だ。それを護ろうとする存在がいても不思議ではない。これだけ豊かな地帯に魔獣がいないこと、そして先ほどから感じる「観察者の視線」…「何かがある」と想定しておいたほうが良い。オレの役目は「護衛」だ。慎重の上に慎重を期すべきだろう』

首を傾げるペトラに対してというよりは、自分自身で確認するようにディアンは呟いた。

『…サーヤ姉様。あの人、魔物を召喚したよ？人間じゃないのかな？』

リプリール山脈東域の「とある場所」で、二人の男女が話をしていた。栗色の髪をした美少年は、不思議そうな表情を姉に向けた。同じく栗色の髪をした姉は、険しい表情を浮かべていた。弟と同様に美しい外見をしているが、眼元が少しだけキツイ。

『どうやら「奴ら」が来たみたいね… レオン、そのまま監視を続けて。私は皆を呼んでくる』

弟は頷いて瞳を閉じた。自分の霊体を野鳥に移して観察しようとする。その時、レオ

ンは思わず退いた。黒衣の男と視線が合ったからだ。木枝に留まり、葉陰から観察していたはずなのに、男は気づいたようであった。だが鳥を飛び立たせる訳にはいかない。そもそも、そんな隙が無かった。レオンは額に汗を浮かべた。

『姉様、早く戻ってきて…』

『ディアン、どうしたの？』

二十歩ほど離れた木を見上げているディアンに、レイナが声を掛けた。だがディアンは微動だにしない。口元だけが微かに動いた。

(レイナ…メルカーナの轟炎を調整して、あの木だけを一瞬で燃やし尽くせるか?)

言い終わった瞬間に、見上げていた木は凄まじい炎に包まれ、瞬く間に燃え尽きた。普通の人間では、魔術を放つ素振りすら見えなかっただろう。三百年以上、魔術の研鑽を続けている第一使徒にとっては、この程度のことはい戯である。完全に燃え尽きてから、レイナは首を傾げた。

『あら…何か気配が消えたみたいね』

『ああ、視線の元はこの木からだ。恐らく鳥や栗鼠などの小動物を媒介して、観察していたんだろう。いるぞ。このメヘルには、何かがある。今夜はオレが徹夜で見張る。』

お前はペトラ殿と同じテントで寝ろ』

『解ったわ』

木は完全に灰になっていた。ディアンはその跡を見下ろし、周囲に鋭い視線を送った。視線は消えているが、予感には消えていなかった。

翌朝、調査隊は朝から動き出した。ディアンの警戒を余所に、夜に襲撃は無く、ペトラたちも安心した様子である。だが、熟睡したペトラが見たものは更に三体増えた。「アースゴーレム」の集団であった。

『…ディアン殿、いくらなんでも警戒し過ぎでは？』

ペトラの疑問にディアンは真顔で答えた。

『予告しておく。オレの勘が正しければ、今日にも襲撃があるだろう。未知の相手だ。アースゴーレムは物理打撃には強いが、雷系魔術には弱い。だが一体でも消えれば、オレは気付く。野営地を四体に警備させる。必要な物を持って、遺跡に向かおう』

『ティナがいないのが痛いわね』

『ソフィアの警備役が担えるのは、オレかお前たちだけだからな。ペラを頼るわけにはいかないし、あの芸術バカは役に立たん』

レイナも苦笑いをして肩を竦めた。この三百年間、魔神ディアン・ケヒトは自らの使徒を増やしていない。ターペⅡエトフではそれで良かった。だが新国家は広大で、たださえ人手不足の状態だ。その上、女王ソフィア・ノアⅡエディカーヌは神殿勢力以外からも命を狙われる可能性があった。自分もつとも信頼する者を警備に充てるしかなかったのである。

リプリール山脈東側の山から滝の裏手に回る。魔導飛行ができるディアンたちとは違って、ペトラたちはロープを使って降りるしかない。滝の裏には洞口があった。前回の調査隊は、この洞窟の入り口に描かれた紋章を確認して撤退をしている。考古学者ペトラは、興奮を抑えるのに苦労していた。

『驚きました。これは初期のファスティナ神聖言語です。二千年以上前の文字で、解読できる者も殆どいません』

ペトラは己の研究ノートを持ちながら、文字の解読に当たった。ディアンならすぐに読めるが、それでは「好奇心の充足」にならない。自分の力で文字を解読したのである。

『ええと… 旧き神なれどその力を称え、此処に封じるものである…かしら？それから…あら、この先は読めないわね。見たことも無い文字だわ。ディアン殿ツ！』

『どれどれ…』

ペトラが示した場所を、ディアンは読み始めた。だがその表情が険しくなる。

『…参つたな』

『ディアン殿？』

『ここには、こう書かれている。…眠りを妨げんとする「解放者」に告ぐ。我らこの地の「護手」也、世を乱さんとする汝らの悪意を誅さん：「解放者」と来たか』

『どういうことでしょうか？』

『簡単に言えば、オレたちは誘い込まれたんだ。ここに古神が眠っているかは分らんが、どうやらその話を意図的に流布し、尤もらしく見せていたようだな。「古神の復活を企む連中」を一網打尽にするために…』

『まさか…「オメラスの解放者」！彼らを誘い込むための罠ということですか！』

その時、ディアンの脳裏に電流が走った。自分が創造した警護兵四体が「同時」に消えた。ディアンの顔つきが変わった。

『レイナ、来るぞ。お前はイルビットたちを護れ。オレが迎え撃つ』

ディアンが先導し、洞窟の奥に入る。レイナは最後尾を護る。少し奥に入ると広い空間があった。岩壁に大きな扉がある。ディアンは舌打ちした。前後から挟まれる可能性もあった。これでは取り囲まれてしまう。その時、レイナが張っていた結界が反応した。洞窟の入り口から、純粹魔術が撃ち込まれてきた。

『皆は壁によりそつて固まっている。オレの姿を見るなよ』

ディアンの指示で、研究者たちは岩壁に寄り添い、しゃがんで頭を抱えた。ディアンはレイナを下がらせると、全身を覆っていた魔力を消した。人間の気配から、魔神の気配へと変貌する。

《人の話も聞かずに、いきなり攻撃か。それもたかが「レイルーン」だと？ どうやら舐められているな。レイナ、ペトラたちを護れ。ここはオレ一人で十分だ》

『気をつけてね』

ディアンは眼を細めた。

『どうだっ！ レイルーンの雨を浴びせてやったぜ！ これなら…』

金髪の幼い少年が自慢げに胸を張る。その頭にサーヤの拳が落ちた。

『バカッ！ いきなり攻撃しちやダメだつて、フィーナ様に言われたでしょっ！』

頭を抱える少年を栗色髪の美少年が介抱する。

『で、でも姉様、いきなり攻撃したのは向こうだよ？ 木を燃やすなんて…』

レオンがオドオドしながらも姉に意見する。サーヤが何か言おうとしたとき、洞窟の奥から凄まじい気配が漂ってきた。

『え…嘘っ！』

『な、なにこれ…姉様、怖いいい！』

それは「魔の気配」の暴風であった。その気配の強さは、とても魔神の域ではない。サーヤは両足を開いて踏ん張るように洞窟に立ち、結界を描いた。嵐が多少、収まる。そこによくやく、武装した大人たちがやってきた。

『なんだ、この気配は… まさか、古の神が復活したのか！』

『そんな馬鹿な！あの封印を解けるのは現神アークパリス様だけだ！』

男たちは頷き、サーヤの前に立った。

『サーヤ、子供たちを下がらせなさい。どうやらお前たちが言っていた通りのようだ。

「奴ら」が来たらしい』

剣を抜いた男たちは、雄叫びをあげて洞窟内に飛び込んだ。

魔神ディアンは斬りかかってくる男たちの表情に眉を顰めた。その表情は何かを必死に護ろうとする者のそれであった。自分たちは侵略者ではない。ただ調査に来ただけである。ならばここで殺す必要はない。背中の剣は抜かず、無手で戦う。男たちは次々と、首筋や腹を打たれて倒れた。だが誰も死んではない。十人程度が倒れる。だ

が次々と武装した男女が入ってきた。ディアンは魔神の気配のまま、問い質した。

《オレの名はディアン・ケヒト： 白と黒・正と邪・光と闇・人と魔物の狭間に生きし、黄昏の魔神だ。お前たちに問う。何故、いきなり襲ってくる。オレたちはこの遺跡を調査しに来ただけだ》

『黙れっ！この世界の秩序を乱し、混沌を望む「解放者」めっ！「太陽の民」の名に賭けて、貴様を誅してくれるっ！』

『・・・？』

ディアンは眉を顰めた。言葉の音程が微妙に異なる。訛のようであるが、意味不明の単語も混じっていた。魔神の気配を収め、岩壁を指差す。相手に伝わるよう、ゆっくりと喋る。

『…お前たちの目は節穴か？「解放者」がイルビツト族を連れていると思うか？』

取り囲んでいた者たちが顔を見合わせる。ディアンが言葉を続けた。

『お前たちが言っている「解放者」とは、「オメラスの解放者」のことだろうか？オレたちも、連中のことは調査している。確かに奴らは、古神を解き放ち再び三神戦争を起こそうとしているようだな。オレたちをそんな「アホ」と一緒にするな。傷つくぞ…』

『だ、だけどお前は魔神だっ！』

金髪の少年が叫んだ。ディアンは笑って問い返した。

『ならばお前たちは何なんだ？ 打ちすえた時に解ったが、微かに神気を発しているな。お前たちは「現神の眷属」だろう？ 先ほど「太陽の民」と言っていたな。アークリオン、いやアークパリスか？』

『……』

「太陽の民」たちは沈黙した。栗色髪の少女サーヤが問いかけた。

『で、ではあなた方は一体……』

ペトラが立ち上がり、デイアンの前に進み出た。さすがは「元族長」だけあり、胆が据わっている。

『どうやら行き違いがあつたようで、お詫びいたします。私はイルビット族の研究者ペトラⅡラクスと申します。このメヘル盆地の南西部にできた新興国エディカーヌ王国より依頼を受け、この地の調査に来ました。以前、この地を管理していた竜族及びリスルナ王国も承知をしています。私たちは、ただ調べに来ただけです。この遺跡に古神が封じられているのであれば嚴重に管理し、何人も立ち入らないようにすると、エディカーヌ女王陛下も断言しておられます。また万一の事態に備え、こちらの「魔神殿」をメヘル盆地に置き、眼を光らせてもらいます。皆さまもお気づきの通り、デイアン・ケヒトは魔神の域を超えるほどの強さを持っています。一方で、彼は争いを好まず、余計な血を流すことを忌避しています。そちらに死者がいらつしやらないことから、ご理

解いただけると思います』

明らかに空気が弛緩していくのが判った。

『…何てことだ。要するに「勘違い」か』

『我らの存在を外部に知られてしまった。これはマズイぞ…』

サーヤが慌てたように言い訳をする。

『だ、だって変な魔物を召喚するし、いきなり木を燃やしたりするし…』

『アレは創造体といって、生命を持たない土人形だ。未知の土地での野営だから、警備をするために創ったものだ。木を燃やしたのは、監視者がそこにいたからだ。察するところ、どうやら君のようだが？』

『あ、あれは私じゃなく弟が…』

ディアンの説明に、サーヤがしどろもどろになる。その時、背後から足音が聞こえてきた。白髪だが美しい肢体をした美女が姿を現す。強い神気を発していた。

『お下がりなさい、サーヤ…』

『フイーナ様…』

サーヤが一礼してさがった。取り囲んでいた男たちも下がる。フイーナと名乗る女性^性が頭を下げた。

『この度は、私どもが大変なご無礼を働き、申し訳ありません。この責任はすべて、族長

である私にあります。責めるのであれば、どうか私を責めてください」

ペトラは慌てて手を振った。知らなかったとはいえ、縄張りに立ち入ったのは自分たちなのだ。ならば非はこちら側にある。互いに謝罪し合うというかたちで落ち着くと、フィーナはディアンに質問をした。

『貴方は「魔神」なのではないか？先ほど感じた気配は、魔神の域を超え、神々にも近いものでした。その一方で、今は人間のようにも見えますが…』

ディアンは懇懃な姿勢で返答した。「太陽の民」と「エディカーヌ王国」との接触である。外交交渉の場に等しい。

『「人と魔神の間を歩き来している者」… そうご理解ください。それ以上は、申し上げられません』

『「人と神」ですか… わかりました。これ以上は尋ねません。殺意を持って襲いかかった者たちに対し、手心を加えてくださり、感謝申し上げます。それと、貴方を監視していた者ですが…』

人垣の中から二人の子供が出てきた。姉のサーヤが頭を下げる。弟のレオンもそれに倣う。

『以前、複数人があの地に侵入者し、この遺跡まで辿り着きました。いま思えば、あなた方の先遣隊だったのですか？この遺跡を護る使命を受けてから二千と余年… 私たち

の中にも油断があつたのでしよう。部族内は大騒ぎになりました。そのことがあつて以来、監視を強化していったのです』

『小動物を利用しての遠方からの監視、見事な術でした。まさか子供がやつていたとは……判つていれば、いきなり燃やしたりはしなかつたのですが……ところで、先ほどの言葉に気になる部分がありました。「遺跡を護る使命を受けてから二千年」……つまり三神戦争終結時に、この遺跡を護るように使命を託された。誰にです?』

『貴方は既に、お気づきのようですが?』

『やはり、アークパリス神ですか。なるほど……』

『ディアンは納得したように頷いた。ペトラが疑問を提示する。』

『ディアン殿は、彼らの存在に最初から気づいていたのですか?』

『最初にこの依頼を受けた時に、違和感を感じていた。古神を封じた遺跡、その歴史は古く三神戦争まで遡れそうだが……そう聞いた時の最初の疑問は、なぜ「ファスティナ神聖言語」が描かれていたかだ。ファスティナ神聖言語の原型は、三神戦争以前にもあつただろう。だが現在まで伝わる言語は、人間族が魔術を駆使できるよう三神戦争後に整備されたものだ。三神戦争の遺跡にファスティナ神聖言語が描かれていたという時点で、何者かが後から書いたのではないかと仮説できた。その違和感は、この地に来て確信へと変わった。この盆地は自然豊かで、魔獣にとつては格好の餌場だ。リプリール山脈

はただでさえ魔獣が多い。にも関わらず、この地にはそうした捕食者が皆無だ。誰かが魔獣を狩っていると思えなかった。そこまで考えると、あとは簡単だ。この地を管理している「未知の存在」がいるのなら、オレたちを監視していて当然だろう。監視者を想定すれば、あとは見つけければ良い……』

『では、この遺跡は偽物ということでしょうか？』

ペトラは焦った表情を浮かべた。自分の好奇心を満たすアテが外れそうだからである。だがディアンは首を振った。

『いや、それは無いだろう。アークパリスが自らの眷属を二千年以上もこの地に置いていたのだ。それなりの理由があるはずだ。「解放者」への罠ってだけでは、説明ができないな』

ディアンは扉の前へと歩を進めた。後方でざわめきが起きる。フィーナは手を挙げてそれを鎮めた。扉には三神戦争の様子が描かれているが、その縁には未知の文字が刻まれている。ディアンはペトラを呼んだ。

『ペトラ殿、あの文字を見たことがあるか？』

ペトラは眼鏡を拭いて、さらに扉に近寄った。じつくりと観察する。呼吸が少し荒くなっている。興奮しているのだ。

『凄い……これは……この文字は「神代文字」です！神々のみが使うといわれている文字

で、アークリオン神殿の聖遺物「黄金の大剣」に刻まれている文字と同種のもので、私も本でしか見たことがなかったのですが、まさかこの眼で観ることができるとは……』

『当然、読めないよな？なら、オレが解説するか』

『お待ち下さい！それ以上、この遺跡を知ることとは認めません！』

『…何故です？』

振り返ったディアンが理由を尋ねる。フィーナの声に、太陽の民たちが再び戦闘の体制を取った。

『この地は、私たちの聖地です。遙か昔、古の神をアークパリス神がこの地に封印し、私たちに守護を命じました。その時、神はこう仰られました。「いつの日か、この神を解放しようとする輩が現れるだろう。この戦いは終わってはいない。古の神を解き放ち、自らの野心を果たさんとする邪悪なる者たちを討ち果たした後に、真の意味で戦いは終わるのだ」と… 私たちはその言葉を胸に、この地を護り続けてきました。何人も、この遺跡に触れることは許しません！』

『二千年…か…』

ディアンは瞑目し、ペトラの肩を叩いた。

『ペトラ殿、諦めよう。この遺跡は触れてはならない。調べようとしてもならない。そ

れは「彼らの信仰」を穢すことになる』

『…そうですね。ならばせめて、あなた方の話を聞かせていただけませんか？「太陽の民」はどのような歴史を持ち、どのような言い伝えが残っているのでしょうか？』

ディアンは苦笑した。好奇心を触発されたイルビツト族は、ある意味で厄介である。遠慮というものを知らない。

『それは後にしよう。今は、彼らの聖地から出ることが優先だ。だがその前に…』

ディアンは瞬間的に短剣を抜き放った。天井付近に止まっていた蝙蝠が落ちてくる。片膝をつき、両手で翼を掴み、赤黒い瞳を自分に向けた。怒りの表情で蝙蝠に言葉を吐きかける。

『…オイ、覗いているか？警告しておくぞ。この遺跡には手を出すな！歴史の影でココソと蠢きやがって。なにが「解放者」だ！貴様らは古神を利用して「自分たちの世界」を造りたいだけだろうが！』

蝙蝠は炎をあげて燃え尽きた。立ち上がったディアンに、フィーナは青い顔を向けた

…
【ラウルバーシュ大陸某所】

…貴様らは古神を利用して「自分たちの世界」を造りたいだけだろうが!…

鏡に映った男が言葉をつきかける。男が指を鳴らすと、その光景は炎に包まれて消えた。元の鏡に戻ったことを確認し、机に向き直る。

『さて諸君…今の男が、ターペⅡエトフの黒き魔神ディアン・ケヒトだ。現在はエディカーヌ王国に拠点を遷しているが、中々に慎重な男で、隙きが無い。それにどうやら、我らのこともある程度は気づいているようだ…』

『困った男だな。魔神なら魔神らしく、己の欲望に忠実に生きれば良いものを…』

『だが、我らにとって脅威になり得るのは事実だ。いつそ、こちら側に引き込めないか?』

『無理だろうな。あの男はエディカーヌ王国の建国にも関わっているはずだ。あの王国の思想「神の道」は、我々とは相容れぬ。エディカーヌ王国もろとも、あの男を消すべきだろう』

中央に座る男は、百出する議論を黙って聞いていた。やがて意見が出尽くしたところで、口を開く。

『ディアン・ケヒトなる魔神の思想は、「二つの回廊の終わり」を前提として組まれている。我らが求める「二つの回廊の始まり」とは相容れないのは確かだ。だがあの魔神と正面からぶつかれば、こちらは無傷では済まない。ここは新たな同士に動いてもらって

はどうか?』

『なるほど。では「腐海の大魔術師」殿に…』

『時は無限にある。まずはエディカーヌ王国を弱体化させることから始めよう』

薄暗い部屋の中で、男たちは低く嗤った。

第四話：太陽の民

〔赤き太陽神アークパリス〕

光の現神アークパリスは、デイルⅡファイリーナ世界にある四つの太陽のうち「赤の太陽」を司る第一級神であり、主神アークリオンの息子である。アークパリスは若さと自信に漲る王子であり、白き天馬に乗って大空を駆け抜ける騎士として描かれることが多い。剣と体術においては軍神マーズテリアに及ばないが、それを補って余りあるほどに強大な魔力を有しており、魔術を駆使して戦うとされている。三神戦争においてはマーズテリアと共に最前線で活躍し、古神の中でも特に高位の存在を封じたといわれている。「三神戦争叙事詩」では、剣と体術で荒れ狂う古神を魔術によつて封じる場面が描かれており、「魔術の優位性」を示すものとされている。

アークパリスは、その姿や経歴から主神アークリオンと共通する部分が多く、西方の大国テルフィオン連邦などはアークリオンとともにアークパリスを国教としている。アークパリス教の教義はアークリオン以上に正義に厳格で、教義で定める「正道」を貫くことを求めている。アークリオンは、特に社会的地位のある者に対して厳しい自律心を求めるが、アークパリスは姦淫や怠惰などの誘惑に対する自己規律を万人に求めるも

ので、西方諸国を中心に兵士や騎士、役人のみならず平民にまで大きな影響を与えている。冒険者の神として崇められる「嵐神バリハルト」は、関所通過や冒険先での振る舞いとして「袖の下（賄賂）」なども認めており、その点でアークパリスとは反りが合わないといわれている。

アークパリス神殿総本山がある「リパレード」は、テルフィオン連邦の西方にあり、「歪み地帯」といわれる「エテの街」に近い。そのためエテでは、夏に太陽神の祭り（夏祭り）として騎士達が舞いを踊る祝い事がある。その際、家々には紅炎の木から作った飾り物を飾り、夏の太陽の祝福を受ける風習がある。

リプリーール山脈東部は、切り立った山々の間に湖が点在している。その湖の畔に「太陽の民」たちの村落がある。アークパリスの眷属である太陽の民は、人間離れた身体能力によつてメヘル盆地との行き来ができるが、イルビット族などの常人では、村に行くことさえ苦勞をした。切り立った谷を上り、森を抜け、河を遡つてようやく辿りつく。紅色や蒼色の屋根が連なる美しい村を見た時、ディアンは思わず口笛を吹いた。しっかりとした村がそこにあつたからである。

『村の裏にそびえる山には、岩塩坑があります。狭い集落ですが、野菜や穀物、家畜など

も育てています。目の前の湖からは魚も獲れます。私たちはこの地で二千年以上を過ごしてきました』

『()で二千年か・・・』

集落に入ると子供たちが駆け回っていた。売店などは無いが、皆で物産をしながら暮らしてきたようである。

『なるほどな。三神戦争から二千年以上、外界と隔絶した場所で暮らしてきたのだ。言葉に違いが出てても仕方がないだろう。文字もそうだな。古代のファステイナ神聖言語をそのまま使い続け、微妙に変化をしてみた。ペトラが読めなかつたのも当然だ』

『つまり()は、三神戦争当時の文化がそのまま残っているということですね？なんて素晴らしい発見なんでしょう！早速、調査しましょう！』

ペトラは燥いで駆け出そうとしたが、ディアンが肩を掴んだ。

『余計な接触はするな。彼らには彼らの文化がある。我々がいたずらに接触すれば、その文化が汚染される。本来であれば、こうして村に来ることすら問題なのだ』

ディアンに止められ、ペトラたちイルビット族は渋々、頷いた。その様子を不思議そうにフィーナが見ている。

『私たちはこの山から出たことはありませんが、外の世界はそれほどに変化をしているのですか？』

『この場では申し上げられません。「太陽の民」全員に伝える必要は無いと思います。宜しければ、どこか部屋をお貸しいただけませんか?』

『解りました。では、私の家に来てください。それほど広くはありませんが、皆様を持成しするくらいはできます』

他の家とそれほど変わらない大きさの、赤い屋根の家にディアンたちは入った。

『改めてお詫びを申し上げます。予言された「解放者」だと勘違いし、皆様に危害を加えてしまいました。私には謝罪をすることしかできません』

『お気になさらず。実害は何もないのです。こうして村まで案内をしてくださいました。こちらこそ、感謝を申し上げます。改めて名乗らせていただきましょう。私の名はディアン・ケヒト・・・どうぞ、ディアンとお呼び下さい』

『有難うございます、ディアン殿。では、私もフィーナと呼んでください』

レイナやイルビット族たちも名乗る。家の中はあまり物が無く、質素であった。ミントを浮かせた水を飲み、ディアンは話し始めた。

『まずは現状をお話ししましょう。周囲の種族たちはこの山を「リプリール山脈」と呼ばれています。皆様と邂逅したあの盆地は「メヘル」という地名です。かつて、あの盆地

は竜族が管理をしていたと聞いていましたが……』

『それは事実です。アークリオン神が、竜族にあの地の管理を委託したと伝わっています。とはいっても、私たちは竜族と関わってはいません。お互いに無関心なのです』

『初耳ですね。竜族からはそのような話を聞いていません』

『失伝したか、あるいは言う必要がないと判断をしたのでしょうか。いずれにしても、私たちと竜族は長きに渡って、あの地……メヘルを護ってきました。いつの日か現れるであろう「封じられし神を解き放とうとする者」に備えてきました。ですが、二千年の平穩の中で、私たちも使命の意義を見失っていたのかもしれない。一年前、あの地に何者かが入ったと聞いたときは、私も驚き、そして恐怖しました。気を引き締め直し、厳重に監視している中で、貴方がたがやって来たのです』

『おそらく、竜族は失伝をしていたのでしょうか。もしアークリオン神の使命を忘れていなければ、メヘル盆地の監視を続けているはずですよ。フイーナ殿。この二千年でこの山の周囲は様変わりをしています。人々は「国家」と呼ばれる、大規模な集落のようなものを形成し、生活圏の拡大を図っています。より豊かさを求めて、未踏の地を切り開いているのです。この村にも、そしてメヘル盆地にも、人々は必ずやってくるでしょう。そうなる前に、我が国が山脈の管理を引き受けます』

『エディカーヌ王国、という名前だそうですね？「闇夜の混沌」ということは、闇の現神

を信仰しているのでしょうか？ そうであれば、私たちとは相容れませんが、この村からも立ち去っていただきたいのですか？』

『名前は確かにそのような名前ですね。実際、闇夜の眷属たちが多いのも事実です。ですが闇の現神を信仰している国家、というわけではありません。例えばここにいるイルビットたちは、光の神ナーサティアを信仰しています。彼らも普通に暮らしているので、エディカーヌ王国は「神の道」と呼ばれる信仰体系を持ち、光も闇も古も関係なく、全ての神を祀っています』

フィーナは首を傾げた。

『それは、光の神と闇の神とを一つにする、ということでしょうか？ アークリオン神とヴァスタールを一緒に考えていると？』

あえて「神」をつけないことから、フィーナの内心が読み取れる。ディアンは言葉を選んだ。「神の道」は自分が設計したものだ、彼らには彼らの信仰があるのだ。

『我が国……私たちの集落では、光の神を信仰する民もいれば、闇の神を信仰する民もいます。ですが、それを良し悪しでは考えていません。信仰とは「個人の心に帰結するもの」なのです。自分がヴァスタールを信仰しているからといって、アークリオンを信仰する者に対して、自分の信仰を押し付ける権利はありません。人はそれぞれ、様々な生き方があります。畑を耕す者、牛を飼育する者、魚を獲る者……多様な生き方があ

れば、多様な考え方があつたのです。異なる生き方、考え方を持つ者同士が集まり、支え合うのが「社会」です。この村にも「社会」はあるでしょう。ヒト同士が集まれば、必然的に意見の相違などから、時として争いに繋がることがあります。それを調停するには万人を均しく統治する「決まりごと」が必要になります。それを「法」と呼びます。我が国では、神殿の教義よりも、法が優先されています。法の下に各神殿の教義が存在し、法に認められる範囲で、各神殿はそれぞれの信仰を行つています』

『つまり「法」という主神が存在し、その主神によつてアークリオン神やヴァスタールの存在が認められている・・・ということでしょうか？』

ディアンは首を振つた。二千年以上も一つの神を信仰し続け、生き続けた民から見れば、そう見えても仕方がないだろう。

『「法」は神ではありません。ヒト同士が集まつて生きるための「共通の取り決め」が法なのです。貴女にこう申し上げるのは気が引けるのですが、解りやすく申し上げますよ』

ディアンは言葉を一旦切つた。相手が受け止める姿勢を見せてから続ける。

『私たちはこう教えています。「神のために民がいるのではない。民のために神がいるのだ。信仰とは、民が日々を平穏に生きるための、ただの「道具」に過ぎない。どの包丁が良いかで争うなど、愚かしいこと。自分にとって使い勝手の良い包丁をそれぞれが

選ばば良い」……』

『……』

フィーナは黙ったままであった。だが複雑な表情を浮かべる。デイアンは若干の後ろめたさを持つていた。彼らに接触をするのは「早すぎた」と思った。

『……お許しください。やはり、話すべきではなかった。明日の日の出とともに、私たちは立ち去ります。どうか今の話は、聞かなかったことにしてください』

『待ってください』

フィーナは慌てた様子で、デイアンの手を握った。手を通じて、神気を感じる。それは怒りでも焦りでも戸惑いでもなく、興味に近いものであった。

『……もう少し、詳しく聞かせていただけませんか？ 貴方様の話は、私にとって目を見開かされるものになるかもしれません』

デイアンは戸惑いを感じながら、頷いた。

太陽の民の村落は、山羊や羊を育て、山で畑なども耕しているが、小麦は採れないようである。稗や粟などの雑穀を煮て主食としているようだ。デイアンたちは自分たちが持ってきた小麦粉は出さず、彼らの食事に合わせた。岩塩が採れるようだ。エディ

カーヌ王国が必要とする量はまかない切れない。マスの岩塩焼、雑穀を煮た粥、畑で採れた野菜などの質素な料理である。村の人口は五百人程度であるが、全員がアークパリスの眷属である。

『神々の大戦』の直後に、アークパリス神が人間との間に成した半人半神「サイラス」と、神格者「エルフィーア」との間に生まれたのが私たちの始祖です。それから二千年以上が経ちましたが、恩寵はまだ私たちの中に残っています』

『恩寵』とはなんでしょう？ 大変興味があります』

マスを齧りながら、ペトラは眼を輝かせて尋ねた。食べながら喋るなど品がないが、イルビット族にとって知識の前では「品」など無意味である。

『私たちは人間族ですが、普通の人間よりも長く生きることができません。かつてはエルフ族ほどに長寿であったと伝わっています。ですが今でも、二百年近くを生きるのです』

『なるほど、集落に子供が少ないのはそういう理由ですか・・・』

ディアンは頷いた。口元を拭いて説明する。

『閉鎖された小集団では、必然的に近親婚が繰り返される。太陽の民の当初の人数は不明だが、二千年百年間も近親婚が繰り返されたとは思えん。おそらく最初は千年近くを生きる「不老の民」だったのだろう。だが、生まれてくる子供の恩寵は、親よりも少な

いものであった。その結果、徐々に寿命も縮まった。この盆地に古神が封じられているという風聞を流し、あの洞窟に神聖文字を刻んだのは、貴方がたですな?」

『・・・正確には、前々の長です。二千数百年を待ち続ける・・・私たち人間には、余りにも長すぎたのです。いかに恩寵を受けようと、いつ来るかも知れないという「解放者」を待ち続けることに、耐え切れなくなる者もいました。彼らは主張しました。「外界に出て、この地を意図的に報せることで、解放者を誘き寄せよう・・・」当時、長であった私の祖父は反対しました。太陽神の眷属として、己の信仰を疑ってはならない。待つこともまた、太陽の民の使命であると・・・言い争いは決裂し、何人かがこの村を出ていきました。祖父は止めなかつたそうです。きつと、祖父の中にも迷いがあつたのでしよう。残つた者たちを宥める意味で、あの文字を刻んだそうです』

『アークパリス神は、教義の中で正道を定め、その遵守を厳しく求めています。「与えられし使命に忠実たれ。たとえそれが、如何に過酷な試練であろうとも・・・」ですが、その教えを護り抜くことは困難です。貴女の祖父も、出ていった人を責める気にはなれなかつたのでしょうか』

フィーナは目尻を抑えた。光も闇も関係なく、こうした健気な話には、ディアンは弱い。数瞬、瞑目して意を決した。彼らの信仰は尊重する。だがこの使命は余りにも過酷である。少しは軽減させるべきだと。

『フイーナ殿、宜しければ「使命の一部」を、エディカーヌ王国にも担わせていただけませんか？ 私は女王よりメヘルおよびこの山の一部を管理せよ、と命じられています。メヘル盆地は精霊種も多く、良質な土もあります。私が創造体を作りましょう。創造体は疲れを知らず、昼夜を問わず監視を続けることが可能であり、また戦闘力も優れています。数十体も作れば、あの地を護ることができます。その上で、エディカーヌ王国と交易をしませんか？ この山からは岩塩が採れるようです。エディカーヌ王国は内陸国であるため塩が得られず、困っているのです。この山の塩は、エディカーヌ王国で高く売ることが出来るでしょう。肉や野菜、あるいは衣類などと交換できます』

『ですが、私たちはアークパリス神を信仰しています。貴方がたの国の信仰とは違いますが……』

『いいえ、違います。エディカーヌ王国が管理しているのは「神殿」であつて「信仰」ではありません。どうぞアークパリス信仰を続けてください。アークパリス神殿は「神の道」を祀る総本山「神宮」の下位組織として扱われますが、そのようなことは個人の信仰には関係ないでしょう？ なぜなら貴方がた太陽の民は、「アークパリス神を信仰している」のであつて、アークパリス神殿を信仰しているわけではない』からです』

フイーナの瞳が輝いた。何か答えを得たようである。ペトラも領いて、ディアンの意見を推した。

『エディカーヌ女王は、多種多様な信仰と、その文化を尊重される方です。皆さんの暮らしや習慣、考え方は最大限に尊重されます。極端な話「アークパリス神を信仰する者以外は立入禁止」などという取り決めすら、認められるでしょう。ですがあの遺跡の守護は、貴方がただけでは無理です。私はファステイナ創世記前期を研究していますが、歴史の節目で「解放者」の存在が見え隠れします。七古神戦争を引き起こしたのは「オメラスの解放者」ではないかとすら、考えられるのです。彼らは皆様の想像以上の力を持っています。どうか私たちにも、遺跡の守護を手伝わせてください』

『皆とも相談をしなければなりません。私たちのこれからの話ですから… ですが私個人としては、こちらからお願いしたいくらいの有り難いお話です。前向きに考えたいと思います』

自分の主人に「感謝以上の眼」を向ける美女をレイナは黙って見つめた。

土精霊を呼び寄せ、創造体を生み出す。先日のアースIIゴーレムではない。精霊体が入っているため、自律判断が可能であり、魔力を生み出すこともできる。さらに一体は一回り大きく、土精霊をさらに集中させて生み出した。表層部に砂鉄を集中させ、錬金術を応用して強固な甲冑を浮き上がらせる。デイアンの後ろには、大きな木箱が積まれ

ている。創造体に持たせるためのものだ。

『名づけるなら「アースIIガーディアン」とするかな。さて、お前たちは「何故、生まれたのか」を知りたいだろう。これからオレが説明する。どうか力を貸して欲しい……』

古神を封じた遺跡、その遺跡を護り続けてきた太陽の民、それを侵そうとする解放者について説明する。五十体のガーディアンは五列に整列し、ディアンの説明を聞いた。

『この地を護つて欲しい。魔物も入ってくるかもしれない。盗賊なども来るかもしれない。邪な存在から、この無垢の土地を守護して欲しいのだ』

『承リマシタ……我が主^{あるじ}ヨ……』

一 一回り大きなガーディアンが一礼する。土精霊を基礎とした新たな生命体である。五十体のガーディアンを束ねる守護将軍「ガルガンチュア」は手を挙げた。木箱が開けられるとドワーフ族が鍛えた「大剣」が並べられている。一体に一振りずつ配られる。

『遺跡ノ入り口ニハ、二人ヲ貼り付ケヨ。四方ノ山々カラノ獣道、主要ナ水飲ミ場ナドモ監視スル。邪ノ反応ヲスル者ニハ、遠慮スル必要ハ無イ……』

ガルガンチュアの指示でガーディアンたちが動き出した。ディアンは腕を組んで頷いた。同じ土地で生まれた精霊を使っているため、意思疎通は完璧である。ズシズシと足音を立てながら、ガーディアンたちは森に消えていった。サーヤとレオンの姉弟は、その様子に目を瞠っていた。

『凄いな、姉様。あんな魔法、初めて見たよ?』

『あれが「召喚魔法」ね。本当に凄いわ。私たちも学べるかしら・・・』

：「太陽の民」は永きに渡って、外に出ませんでした。私たち大人は、もう外に馴染むことはできないでしょう。ですが、この子たちなら・・・

フイーナの頼みを受け入れ、ディアンは二人を引き受けた。まだ王都スケーマには連れて行っていない。少しずつ外に馴染ませるつもりであった。

『いづれ教えてやる。だがまず、お前たちには「文字」と「計算」を教えなければならぬ』

まだ幼い「新しい弟子たち」の頭を撫でた。

リプリール山脈東方、メヘル盆地から少し入った場所が、太陽の民とエディカーヌ王国との交流の場となった。大規模なものではない。太陽の民たちは二千年以上も自給自足を行っており、外から何かを輸入する必要はない。イルビット族が中心となった「情報交換」が主な目的となっていた。考古学者のペトラ・ラクスはメヘル盆地に簡易住居を建て、太陽の民の調査に没頭していた。

『言い伝えでは「解放者」は、神々の大戦以前から結成されていたそうです。世界が融合

する以前の人間族の中に、新世界で自分たちが生き残るために動いていた者たち、このことです』

『それは「メルジュの門」に科学知識を封じた「先史文明期の科学者」「機工女神アリス」のことでしょうか?』

フィーナは首を傾げた。聞きなれない用語が多数、入っているからだ。ディアンが噛み砕いて教える。フィーナは少し考えて首を振った。判断ができないのだろう。ディアンは自分たちの情報を述べた。

『「解放者」……私たちは「オメラスの解放者」と呼んでいます。彼らの目的は不明です。ただ、「古の神々を蘇らせ、世界を混乱に陥れること」などは、彼らの目的ではないでしょう。手段としての「古神の利用」はあっても、目的ではないはず。なぜなら、彼らもまた人間だからです』

『解放者は、やはり人間族なのですか?』

『全員がそうとは限りませんが、最初に結成されたときは、人間族が中核にいたはず。各地の種族、特に竜族、龍人族、エルフ族の伝承を調べましたが、三神戦争……つまり「神々の大戦」後の世界には、幾つか説明できない事象があります』

『具体的には、何でしょうか?』

『まず第一に、言語と文字の統一性です。貴方がた太陽の民は、二千年以上も外界と隔絶

していました。つまり貴方がたの言語は、二千年以上も前のものということでも
関わらず、さして不自由なく意思疎通が出来ています。つまり、現在の世界で使用され
ている言葉は、三神戦争直後には使われていたということです。一方で、イアスⅡステ
リナ世界の遺跡から発見された「先史文明の文字」は、現在とは全く異なるものです。つ
まり、三神戦争直後に「何か」があつて、言葉と文字の統一が図られたということです
『ディアン殿。その謎については、現神神殿が回答しています。ファステイナ神聖言語
を生み出した神々によつて、言葉の統一が図られた、とされていますが?』

ペトラが口を挟んだ。ディアンは頷きながらも疑問を提示した。

『確かに、そう回答しているな。だがオレは疑問を持つている。何故なら、そんなことが
出来るのであれば、そもそも神々の大戦なんて起きないからだ。「文字と言葉の統一」
は、「意志表現の手段の統一」という程度ではすまない。我々は思考する生き物だ。その
思考において、言葉は重要な役割を果たす。そして社会を創り、文化を生み出し、習慣・
思想・価値観・感情までも形成する。文字と言葉というものは「ヒトの存在そのもの」を
左右するのだ。そんなものを自在に操れるならば、戦争なんて起こす必要はないだろ
う』

『・・・では、一体なにが起きたのでしょうか?』

『解りません。だからそれが疑問その一です。そしてその二ですが、それは科学技術の

伝承です。たとえば太陽の民たちは「蠟燭」を使っていました。蜜蝋は、蜜蜂の巣から作ります。それ以外にも、オリーブ油や獣脂などからも作るができます。私たちはそれを知っています。ですが、知っていることと作れることは、全くの別物です。三神戦争以前まで、人間族は高度に発達した科学世界を形成していました。数百人の人間を載せた乗り物が、音を超える速度で空を飛び、世界の果てまで一瞬で人を運んでいたのです。それほどに発達した文明が、三神戦争で一瞬で失われました。当時は、科学技術を支えていた「知識」は、すべて機械によって管理され、機械の中に貯蔵されていました。人間族は、数千年以上に渡って蓄積した「知識」を一瞬で失ったのです。おそらく、当時の人間族は「蠟燭の作り方」など知らなかったでしょう。ですが太陽の民の村には、蠟燭があり、車輪があり、水車がありました。鉄の包丁があり、鉄の釘があった。麻の服があり、それを作る針がありました。フィーナ殿、それらを一体どこで手に入れたのです?』

『包丁は、村に鉄を加工する職人がいますし、麻は畑で育てていますが・・・』

『包丁を作るには、鉄を加工する技術が必要になります。鉄鉱石あるいは砂鉄を採り、それを炉に入れて鉄を熔解させて取り出し、さらに高温の中で鍛えて、鉄が生み出されるのです。その技術はどこから来たのでしょうか? 旧世界イアスステリナでは、そうした製造は全て機械によって自動化されていました。イアスステリナ人の殆どが、鉄の鍛

え方など知らなかったはずで。つまり「誰か」が教えたのです。「誰か」が、人間族が原始人にならず文明人でいられるようにしたのです。その一方で、二千年以上も科学文明は形成されていません。現神および西方神殿勢力が科学知識の普及、科学的思考を規制しているからです。その結果、二千年以上も技術革新が進まず、人間は未だに空を飛ぶことすら叶いません。一定程度の技術を持った文明社会、しかし神々への信仰を忘れるほどには発達せず、他種族の脅威にもならない程度で留める・・・二千年以上もこの「絶妙」な、ある意味で「神々にとって都合の良い」文明世界が続いているのです』

ペトラもフィーナも沈黙した。デイアンは咳払いをして、水を飲んだ。

『話が少し逸れましたが、私はこの世界の形成そのものに疑問を持っています。そして「オメガスの解放者」は、その疑問に対する答えを持つている。あるいは答えの一端に関わっているのではないかと考えています。三神戦争以前、二つの世界が重なる際に、イアスステリナの一部の人たちが、世界の消滅を防ぐべく「結界」を形成しました。その結界の形成と管理、そして世界融合を実現させる役割をしたのが「機工女神」です。彼らは人間族の滅亡をなんとか防ごうと、必死でした。ですが大多数のイアスステリナ人は世界融合など気づきもせず、ノホホンと暮らしていた筈です。そしてある日突然、世界が一変しました。世界を救った者たちはその存在すら知られず、歴史の闇に消えた

のです。そしてここからが私の仮説ですが、彼らとは別の動きをしていた者たちがいたと考えています。つまり、二つの世界の融合を果たすのではなく、二つの世界を引き離そうと考えた集団がいたのではないでしょうか。それが「解放者」の原型ではないかと考えています』

『ディアン殿、その証拠はあるのでしょうか？メルジュの門に封じられていた「遺産」の中には、そうした存在を示すものはありませんでしたが？』

『無いな。できればメルジュの門に戻って、女神アリスに直接尋ねたいくらいだ。まあ二度と開けないと言っていたから、無理だろうな。他の機工女神に聞くという方法しかないだろう』

『機工女神そのものが、謎の存在ですからね。探し方が無いでしょう』

ディアンは一つの可能性を考えていた。あの「青髪の魔神」なら何か知っているのではないか。だがディアンはその考えを途中で止めた。彼女はおそらく機工女神だろう。だが彼女はそれを否定した。否定する理由があるからだ。ならば触れないほうが良い。気を取り直したように、話題を変える。

『お預かりしている二人についてですが・・・』

フィーナの顔に笑みが戻った。

第五話：腐海の歪み

イアスⅡステリナとネイⅡステリナという異世界同士の融合は、神々や動植物が一緒になったといった単純なものではない。この両世界は時間の流れや物理法則などが異なっていた。そのため本来であれば、同一の世界となり得ないのである。この異世界同士を融合させたのは、旧世界の科学技術によって生み出された人造の神Ⅱ機工女神エリユアである。「異質同士を融合させる」という特異能力を持っていたエリユアは、膨大な魔力を科学技術によってさらに増幅させ、二つの時空間そのものを融合させることに成功する。異なる世界同士が重なることによる「世界崩壊」を避け、「二つ世界の終わり」という新世界を創造したのは現神でも古神でもなく、人間によって造られた神だったという事実は、後の歴史を考えると皮肉というほかない。機工女神エリユアが存在しなかつたならば、アークリオン神もヴァスタール神も存在していないのである。

機工女神エリユアの名は、永くに渡って殆ど知られていなかったが、新七古神戦争以後にエディカーヌ帝国によってその名誉が回復される。帝都スケーマの神宮には「機工女神の「柱」としてエリユアの石像が置かれるが、いささか露出が多い生々しい姿は神宮に相応しくないという意見も存在している。いずれにしても、これによりエディカー

又帝国を中心にエリユアの名は知られるようになる。石像の足元には以下の説明文が刻まれている。

「機工女神エリユア：旧世界の科学によって生み出され、デイルリフィーナを創世した機工女神の一柱である。外見は「蒼髪」の美しい女神だが、その性格は苛烈で残酷である。その一方で卑怯を嫌い、交わした約束は守り、正々堂々とした性格である。弱者の立場に甘える者を嫌い、自らの足で立ち上がろうとする者を好む」

後世、「エリユアの石像」については都市伝説のような噂が存在している。その内容は「エリユア像が動く」というものである。エリユアは「右手を腰にあて、豊かな胸を張り、挑発めいた笑みを浮かべ、艶めかしい肢体を露出させている」という姿で彫られているが、数十年単位で比較をすると、左手や足の位置、口元などが微妙にズレているというのである。これが一市民の話であればただの与太話で終わったであろうが、皇立魔導大学院の名誉教授が長年の計測結果に基づいて唱えたため、神宮を巻き込んだ一騒動となった。ついには大司祭であるエディカーヌ皇帝自らが、騒動を鎮めるために動いた。皇帝ソフィア・ノアⅡエディカーヌはただ一言で、この騒動を沈静化させたといわれている。曰く

「あら、別に構わないではありませんか。神宮に祀られる「神」なのですから、動くこともあるでしょう?」

機工女神エリユアの力をもつてしても、異世界同士の融合は「完全」とはならなかった。それが「歪み^{ひずみ}」と呼ばれる現象である。歪みとして有名なのは西方の大国テルフィオン連邦の一角「ヴァシナル」の小都市「エテ」に存在していた「歪みの主根^{おもね}」である。テルフィオン連邦歴六百七十八年、小都市エテで「異界守」として活躍していたフィーノ・セフィットは主根を安定させ、氷結の女神ヴァシーナを役目から解き放つことに成功する。ヴァシーナは本来の守護地である「霜天の盆地」と帰還するのである。

後世の歴史家たちは、この一連の事件に一つの疑問を提示している。女神ヴァシーナが主根の守護者となつてから三百年以上、歪みはある程度に安定していた。それが突然、歪みが活性化し始めた理由は何であつたのだろうか。魔神アストラールをはじめとする歪魔族が原因とする研究者もいるが、時系列で観るならば、むしろ活性化したために歪魔族たちを呼び寄せたと考えるのが自然である。ちょうどこの時期、ケレース地方においても歪みの発生が確認されている。マーズテリア神殿の元聖女であつたルナⅡクリアが歪みに飲み込まれ、行方不明となつたのである。遙か離れた二つの地帯で、ほぼ同時期に歪みが活性化した背景には何があつたのか、様々な説が出ているがどれも仮説の域を出ていないのが実情である。

獸人族の子供オルガは、森を駆け抜けた。草木が生い茂る鬱蒼とした森であっても、獸人族である自分にとつては庭のようなものだ。躓くこと無く、集落に駆け戻る。

『父ちゃんっ！出たよっ、またあの雲が出たっ！』

息を切らして、父親に報告した。近年、不定期に得体の知れない雲が発生する。そのたびに森の獣たちが騒ぎ、見たこともない魔獣が暴れたりする。獸人族の戦士ギフンは分厚い剣を手にした。

『今度こそ正体を見極めてやる。子供たちを家に入れろ。男は魔物に備えてヤリを持っておけっ！』

『待て、ギフン。ディアン殿に知らせたほうが良い。「東の国」の力を借りよう』

仲間の呼びかけにギフンは止まって少し考えたが、首を振った。

『いや、これは我が部族の問題だ。他族の手を借りる必要はない。俺が様子を見てくる。皆はここで待っている』

仲間が呼び止めるのも聞かず、ギフンは駆け出した。

『父ちゃん、大丈夫かな…』

不安げな表情を浮かべるオルガの頭を撫で、仲間内で話し合う。

『ギフンは気にしているのだろうな。なにしろ「闇夜の混沌」ウエディンカインだからな。ディアン殿個人は信用できるとしても、「東の国」自体はまだ信じられないのだろうよ…』

『俺だつてそうさ。だが、あの国を訪れた連中の話では、彼らはブルーラ神殿を立て直したそうじゃないか。彼らの集落には魔族もいるそうだが、人間族やドワーフ族、龍人族もいるって聞いたぞ？ そんなに警戒する必要は無いと思うがな』

『いずれにしても、ディアン殿には伝えたほうが良いだろう。「雲が発生したら教えてくれ」って言われているしな。族長のところに行つてくる』

話を聞いた族長は頷き、懐から黒い水晶を取り出した。

リプリール山脈中央部にあるメル盆地には、静かな変化が起きていた。盆地の四方を屈強な創造体「アースIIガーディアン」が取り囲み、警戒に当たっている。その一方で、盆地の南部では建設が進んでいた。リプリール山脈に続く緩やかな斜面には畑が作られ、平屋の家が建てられた。地脈魔術によつて温泉を発掘し、広めの露天風呂も造られている。家の間取りなどは「以前」と同じにしているが、一回り広く造った。また、弟子を取ることを想定して空き部屋も用意している。使徒たちは昔を懐かしむように家の中に入った。

『…ファミと別れてからもう七年になるわね。元気にしているかしら？』

レイナは懐かしそうな表情を浮かべる。ディアンは笑つて頷いた。

『庭の一角に小屋を設けて転送機を複数台、置くつもりだ。ティナやソフィアも、夜になればこの家に戻ってくる。ディージェネル地方西方海岸や、モルテニアとも繋げるつもりだ。今はまだ、かつて程の賑わいは無いが、いずれここが楽園になる。今度こそ、絶対に護りきる…』

ディアンの表情に一瞬だけ影が射した。だが子供たちの声ですぐに明るくなる。新たに引き取った弟子、サーヤとレオンが燥いでいた。

『凄く凄く！姉様、こんな広い厨は初めてです！それに、見たこともない鍋があります』

『レオン！あまり騒がないで！もう…先生に怒られるわよ？』

弟の面倒を見る姉も、新しい生活の始まりに興奮している様子であった。折角だから、今夜はご馳走にしようと思っていた時、ディアンの脳裏に電流が走った。レイナも敏感に感じたようだ。

『ディアン？』

『レイナ、悪いが二人を頼む。どうやら「異界」が出現したようだ。すぐにディージェネル地方に向かう』

『わかったわ。ティナとソフィアには、私から伝えておく。気をつけてね』

漆黒の外套を羽織り、魔神剣クラウソラスを背負う。穏やかな表情が一変し、闘い

に臨む戦士の貌になる。サーヤとレオンは、デイアンの一変に少しだけ怖がっているようであった。レイナが二人を後ろから抱きしめる。

『先生はこれから、ちよつと用事があるの。何日かいなくなるけど、心配しないで。今夜はあなた達のお姉さんが、あと二人も来るのよ？五人でご馳走を食べましょう』

デイアンは黙って頷くと、庭から一気に飛翔した。凄まじい速度で西に向かう。初めて見る「飛行魔術」に、二人の弟子は呆気にとられていた。

『ハアツ！』

凶暴化した巨大蟲を斬り倒す。戦士ギフンはその体軀を遺憾なく發揮していた。分厚い劍の糧になった魔物は数知れない。息を切らしながらも、雲を追いかける。雲に近づくに連れ、濃霧が立ち込めてきた。まるで乳のような濃さである。

『なんだ？この霧は…』

霧をかき分けながら、ギフンは慎重に進んだ。一刻ほど進んだ時、目の前に巨大な石壁が出現した。天に届くほどに高く、圧倒的な存在感である。

『こゝ、これは一体…』

有り得ない光景であった。この辺りは一面が森となっている。こんな巨大な建物が

出来れば、嫌でも気づく。壁に近づくに連れ、ギフンの疑問はさらに膨らんだ。壁がまるで点滅しているように見えた。目をこする。自分が可怪しくなったのではないかとさえ思った。壁に沿って周囲を歩くと、やがて入り口と思われる巨大な扉が出現した。

『一体、何なんだ？この建物は？』

『この建物は「狭間の宮殿」と呼ばれるものです…』

いきなり背後から声を掛けられた。ギフンは飛び上がって振り返り、剣を構えた。黒い外套を頭から被り、杖を持った男が立っていた。見たところ、魔術師のようである。俯いているためか、顔は見えない。

『誰だ、アンタは！』

『誰？ふむ、私は誰だったかな… もう随分と昔のことなので、自分の名前も忘れてしまいましたよ。だが、この中にある炎だけは忘れない。そう、彼女を…愛しき女神を手に入れるという炎だけは…』

気が触れたようにブツブツと呟く「黒い魔術師」に、ギフンの警戒心はさらに上がった。剣を構えたまま、ジリジリと後ろに下がる。魔術師は思いついたように顔を上げた。

『そうだ。いま、一つ実験をしているのであった。人間でやってみたが、上手いかなかった。見たところ、躰が強そうな獣人… 良い実験材料です』

その言葉ではなくその顔に、ギフンは凍りついた。気がついたときには、ギフンは悲鳴を上げていた。

『ディージェネール地方の「異界」については、私の使い魔に調査を一任しています。アレは余りにも危険です。彼以外の者に任せるわけにはいきません』

エディカーヌ王国女王ソフィア・ノアⅡエディカーヌは、元老院で説明していた。王国を取り巻く状況は、決して樂觀視はできない。物産は増えているが、かつてのターペⅡエトフほどのオリーブ栽培は気候的に困難であった。また麦栽培も同様である。品種改良などの研究を進めているが、現状では王国北部での栽培に限られている。何より、塩が取れないことが問題であった。最初の友好国であるバリアレス都市国家連合から輸入をしているが、その単価は決して安くはない。新たに発見した「太陽の民」の集落で岩塩が産出されるが、その量は全体必要量から見れば微々たるものであった。かつて「腐海の地」と呼ばれた混沌の状況から見れば、遥かに治安は良くなり、暮らしも楽になっているはずだが、それでもターペⅡエトフとは比べようもない。

そして何より、最近はその治安を脅かすような事件が起きていた。その最たるものが「歪みの発生」である。女王の言葉を受けて、獣人族長が立ち上がった。

『陛下、確かにあの歪みは魔神殿でしか対処できないでしょう。ですがそれ以外にも、最近ではディージェネール地方北部で事件が頻発しています。未知の疫病、人攫い……あの地には、我々の同胞も多く棲んでいます。王国としても対処をお願いしたいのですが』

『解つています。最新の調査では、どうやら「腐海の大魔術師」と呼ばれる者が暗躍しているようです。歪みの発生自体に関わっているかは不明ですが、疫病の原因はその魔術師にあるのは間違いないでしょう。「茫熱病」と呼ばれる病だそうで、穢や瘴気が原因のようです。現在、特効薬を開発中です。ですが、それは対処療法に過ぎません。その魔術師を除かなければ、同じようなことが起きるでしょう』

ソフィアは爪を噛みたい衝動に駆られていた。経済問題だけであれば、自分の智慧でも対応できる。だがこのような「破壊活動」^{テロリズム}はターペIIエトフでは起きなかった。元老院には伝えていないが、自分を狙った「暗殺未遂」も起きている。グラティナを中心に身辺警護を強化しているが、それでも限界がある。新王国の「人材不足」は深刻であった。

(せめて、ディアン・ケヒトに匹敵する力を持つ「良心的魔術」がもう一柱でもいれば……)
後ろに控えて立っていたグラティナの咳払いで、ソフィアは我を取り戻した。いつの間にか、爪を噛んでいた。

濃霧の中を黒衣の男が歩く。複数の魔物の気配が漂っているが、異質な気配も感じていた。やがて石壁が見えてきた。

『なるほど。現在の建築技術ではこの大きさは建てられないな。これが「神の御業」か・・・』

ディアンは頷き、入り口を探すために歩いた。大きな扉を見つけたが、その前に得体の知れない存在が二つあった。黒い外套を頭からかぶった魔術師らしき者と、魔物である。ディアンの姿を見た魔術師は狂ったような笑い声を上げた。

『ヒヒヤヒヤヒヤッ！素晴らしい！実に素晴らしい！まさか狭間の宮殿に「神族」が現れるとは！これぞ中に入れます！』

『なんだ、お前は？』

ディアンは訝しげに魔術師を見て、そして魔物を見た。タテガミや腕の毛から、元々は獣人族であったのだろうか。何かしらの呪術によって「変異体^{キメラ}」となっている。ディアンの視線に気づいた魔術師は、誇らしげに魔物を紹介した。

『コイツは私が召喚した「異界の魔物」と獣人族を掛け合わせて造ったものです。人間で試したら、躰が弱くて爆発してしまいました・・・ いやいや、やはり獣人の肉体は強い。これで研究が一段と進む』

『・・・お前は誰だ？最近、耳にする「腐海の魔術師」とやらがお前なのか？』
『んん〜？』

魔術師が貌を向けてきた。その顔は皺だらけで一見すると老人である。だが異様なのはその眼であつた。白目は一切なく、全てが漆黒の闇である。その中に、紅い光が霞んでいた。デイアンの話を聞いていないのか、魔術師は勝手に説明を始めた。

『この建物は「狭間の宮殿」と呼ばれています。三神戦争より遙か前、「ある異端の神」を封じるために現神たちが造つたものです。ゆえに、この建物は「神族」しか入ることを許されません。融合体で扉を開けようとしたのですが、どうも上手くいかない。そんなときに、なんと神族が出現してくれました。なんとという幸運！これも日頃の「善行」によるものでしょう』

『「善行」だと？疫病を流行らせ人々を苦しめ、種族・性別・老若を問わず人攫いをし、泣き叫ぶ者たちを嘲笑いながら異形の魔物を生み出すのが「善行」だと言うのか！』

『なにが「善」で、なにが「悪」かは見方次第・・・私にとつての「善行」が、貴方にとつての「悪行」であるに過ぎない。善悪とはそれぞれの立場から見たものです。たとえば「強姦」・・・犯される女から見れば、犯す男は悪でしょう。ですが男から見れば、自分の性欲を晴らす行為として善なのです。むしろ抵抗する女が悪なのです。善悪とは「己の都合」によつて変わるのです。それとも貴方は、自分が「絶対的に正しい」と

でも思っているのですか?』

ディアンのが目が細くなった。目の前の魔術師には反吐が出た。口元が嘲りの笑みで歪む。

『そうか・・・ならばオレも、オレの善行をしよう。お前をここで抹殺することが、オレにとつての「善行」だ!』

剣の柄を右手で掴む。前かがみになって構える。瞬間、その姿が消えた。魔術師の懐に入り、剣を振り下ろす。だが・・・

バチンッ!

剣は魔術師の躰に触れること無く、弾かれた。ディアンは眼を見開いて、飛び退いた。「物理障壁結界」であるが、あり得ない程の強度を持っていた。比較するならば、かつて華鏡の畔に張られていた「魔神の結界」に匹敵した。

『・・・お前、人間ではないな? 魔人か?』

『さてさて、どうでしょう? 今はまだ「途上」の身ゆえ、断言はしかねますな。いずれ「女神」を手に入れたときに、改めて自己紹介をさせていただきますよ』

ディアンの眉が動いた。自分がかつて、どこかで、この魔術師と会っている。この魔力を感じている。遠い記憶を辿る。やがて数十年前に遭遇した「老化した青年」を思い出した。

『お前……まさかアビルース・カツサレか！あの時、神殺しとなった「セリカ・シルフィール」の肉体を奪おうとして魂の操作を誤った、あの青年か！』

魔術師の動きが止まった。中空に視線を向ける。ディアンのことなどまるで無視して、両手を広げた。

『おお……女神よ……その麗しき瞳、その愛おしき口元……貴女の全てを私のモノにしたい。貴女が欲しい……』

下半身の布が膨れ上がっている。ディアンは思わずツバを吐いた。これほどに胸糞悪い思いをしたのはいつ以来だろうか。かつて殺した「バリハルトの狂信者」のほうがまだマシであった。左手に「メルカーナの轟炎」を込める。目の前のゲスを焼き尽くすつもりであった。だが放つ前に、強烈な力で吹き飛ばされた。

グルルルツ……

異形の魔物が唸り声を上げる。ディアンは舌打ちをして剣を抜いた。アビルースが発狂したように啞う。

『ヒヒヤヒヤツ！素晴らしいでしょう？異界の魔物の他に、召喚したグレーターデーモンまで掛け合わせているのです。力も魔力も、魔神級ですよ？どうです？そろそろ本気にならないと、危ないですよ？』

『フンツ！お前の狙いは、オレに「神の力」を發揮させて、扉を開くことだろうか？狭間の

宮殿が神族しか入れないのであれば、その扉は「神の気配」に反応するはずだからな。だが……」

魔物が振る腕をかい潜り、懐に入る。腹部に手を当てた。

『お前、バカだろう？』

魔術が打ち込まれると異形の魔物は飛散した。グレーターデーモンと獣人の男、そして黒い瘴気のような煙に分かれる。ディアンはすかさず、瘴気を火炎魔術で燃やし尽くした。アビルースは口を開けて呆けた声を出している。

『構成要素さえ解れば、錬金術の応用で分解することが可能だ。グレーターデーモンと獣人さえわかれば、後は未知の要素だけ抽出すれば良い。「錬成式」を相手に伝えるとはな。これだから狂人は度し難い』

連続して純粹魔術を打ち込む。だがアビルースは結界を張ってそれを弾いた。滑るように後ろに下がっていく。

『これはこれは、驚きました。魔神とは「膂力と魔力を持って余す存在」と思っていたのですが、どうやら貴方は例外のようです。これほどに魔術に精通していらつしやるとは……』

『それはこちらのセリフだ。その結界は、これまで見たこともない術式だ。「大魔術師」というのは、あながち誇張では無さそうだ。頭はイカレているがな』

アビルースはクシャクシャに嗤い、そして一礼した。

『貴方との会話は中々に面白そうですが、そろそろ歪みが動き始めます。今日はこれで失礼をいたします。またいずれ……』

『させるか!』

デイアンは純粹魔術を放つと、同じ速度で斬りかかった。魔術障壁と物理障壁の結界を同時に張ることは出来ないはずである。どちらかが当たるはずであった。だがアビルースの結界は想像を超えていた。デイアンの剣も純粹魔術も弾き返した。

『なんだと?』

驚愕するデイアンを見ながら、アビルースは嬉しそうに嗤う。

『ヒヤヒヤツ……魔術師は「タネ」を教えたりはしません。せいぜい、悩んで下さい。では……』

トプンツという音と共に、アビルースの肉体は地面に飲み込まれた。地脈魔術の応用であろうが、既に元の地面に戻っている。その時、背後で異変が発生した。歪みが元に戻ろうとしていた。

『いかんつ!』

グレーターデーモンと獣人族の戦士ギフンを担ぐと、急いでその場を離れる。歪みに空間が飲み込まれていくようであった。一瞬の閃光と共に、異界「狭間の宮殿」は消滅

し、元の森に戻った。ディアンたちは辛うじて、飲み込まれずに済んだ。

『……それで、この方が私の新たな護衛になると?』

両手を腰にあて、ソフィアは睨むように見上げた。七尺近くある赤銅色の悪魔は、思わず仰け反る。ディアンが助けたグレーターデーモンは、召喚契約も消滅していたため本来であれば自由である。だが何を考えたのか、ディアンのために働きたいと申し出てきた。グレーターデーモンは上位悪魔であり、知性も高い。筋を通せば、一定の信用もできる。ディアンはソフィアの身辺警備役として、グレーターデーモン「ザボン」を連れてきたのであった。だがソフィアからすれば寝耳に水である。「上位悪魔の出現」によつて、神殿内は最大警備体制となっていた。ザボンの背後では、剣の柄に手を掛けたグラティナが、鋭い殺気を放つて立っていた。ザボンは頬を搔いて、ディアンに泣きついた。

『……ディアン殿、先ほどから背中がやけに「痛い」のだから?』

『まあ、グレーターデーモンが出てきたら、そうなるだろうな。ティナ、殺気を抑えろ。いざという時は、オレが対処する。それに途中で言葉を交わしたが、ザボンは「例の魔術師」を恨んでいる。ソフィアの護衛を務めることは、エディカーヌ王国を護る

ことになり、ひいては奴を困らせることにも繋がる。個人の感情と仕事が一致しているのだ。都合が良いだろう』

グラティナはようやく、剣から手を話した。ザボンが安心して息を吐き、ソフィアに跪礼した。

『女王よ、我が姿を前に一步も退かぬその器量、感服致しました。どうか我が主として仕えさせたまえ・・・』

ソフィアは腰に手を当てたまま暫く考えたが、やがて納得したように頷いた。

『解りました。今日から私付きの護衛として仕えなさい。ですが、その姿は少し問題ですね。グレーターデーモンは外見を変えることも可能と聞いています。人間の姿になることは出来ますか?』

『出来ませんが、躰の大きさまででは変えられません』

『結構です。その大きさはむしろ護衛としての頼もしさになるでしょう。人の顔に変わりなさい。あと、王国の法は必ず護るように。もし悪さしたら「お仕置き」です!』

どう見ても二十歳前の美少女が凄む。ザボンは一瞬で外見を変えた。口髭を生やした、些か無骨な「武人」の顔になる。ソフィアは嬉しそうに頷いた。

『あら、中々イイ男ですわね。ドワーフ族が鍛えた剣と鎧を下賜しましょう。それと神宮内に、貴方が詰める部屋も用意する必要がありますね』

その様子を見ながら、グラティナはディアンに囁きかけた。

『なあディアン…… なんだか嬉しそうに見えるのだが？』

『フム…… あの外見が似ているからだろうな。「かつての保護者」に』

確かに人間の外見をしたザボンは、かつて東方で名を馳せた「大將軍」の姿に似ていた。力もそれに匹敵するだろう。現金なもので、人間の姿になった途端、周りの者たちも安心した様子であった。

『ザボンは護衛として信用できそうですが、やはりまだ人材が不足しています。私は行政官などは育てられますが、護衛などの育成は門外漢です。王国は私一人では回せません。宰相や主要な官僚たちの警備を考えると、まるで人材が足りないのです』

メヘル盆地に建てられた「新たな住居」で、ソフィアは酒を飲みながら悩みを漏らした。ディアンも腕を組んで考える。「暗殺」を防ぐことは絶対に不可能だ。暗殺者はいつ、どこで、どのように襲撃するかという主導権を握っている。どんな人間も、生きていく以上は油断する。結界に護られたこの家でさえ、絶対に安全とは言い切れないのだ。

『「身辺警護」を担当する専門部署が必要だな。バリアレス都市国家連合は、傭兵派遣業

をしている。当面はそこから警備役を雇入ると同時に、重要人物の身辺警備を担当する「近衛部門」を用意したほうが良いだろう。だが、暗殺を完全に防ぐことは不可能だ。市井の治安維持を強化することで、発生確率を減らすことは出来るだろうが、外部から暗殺者が流入することは止めようがない』

『ダイアンが遭遇した「腐海の大魔術師」とは、どの程度の力なのでしょう?』

『正直言つて、驚いた。流石は「カッサレの血筋」だな。オレが見たこともない術式を繰り出し、必中を期して放つた魔術も上手く躲された。才能だけなら、下手をしたらブレアード・カッサレにも匹敵するぞ。頭は完全にイカレていたがな』

『惜しいですわね。イルビット族は魔術研究を禁忌としています。そのためターペⅡエトフ時代から、魔術研究は遅れがちでした。それ程の才能があれば、我が国に招きたいくらいです』

ソフィアも、アビルースの危険は百も承知である。だが国王としては、有為な人材は喉から手が出るほどに欲しい。ターペⅡエトフでは、ファームシルスが軍事的側面を支えていた。身体と心を鍛えた中堅将校たちを育て、少数ながらも強力な軍隊を作り上げていた。だがエディカーヌ王国にはそうした人材がいらない。グラティナが代役を務めているが、それでも限界がある。本来であれば口にすべきではないが、一つの可能性をソフィアは提示した。

『ディアン・・・「あの遺跡」に眠っている古神は、どのような神なのでしょうか？』
第三使徒が何を求めているのか、ディアンには正確に読めていた。

第六話：ベルリアの怪

ブレニア内海の西側は「レルン地方」と呼ばれている。七古神戦争から数百年後、アヴァタール地方に先駆けてこの地に王国が誕生した。それが「ベルリア王国」である。東西を結ぶ大陸公路は、ブレニア内海のアヴァタール地方側で二つに分かれる。一つは、セアール地方からオウスト内海西側南部を通り、インフルース王国から西方に入る路である。この路は途中でバリハルト神殿領を通ることもあり「冒険者の路」と言われている。もう一つはブレニア内海を船で渡り、レルン地方のベルリア王国を抜け、マーズテリア神殿領、エリス王国、パルシ・ネイ総本山を通る路である。この道はさらに西方へと続く路と「リガナル半島」へと続く路に分かれるが、その付け根には西方の大國「神聖フェルシス帝国」があり、物流が盛んであった。このため北回りの「冒険者の路」と対を成して「商人の路」と呼ばれている。

ベルリア王国は、商人の路が始まる「西方諸國への玄関口」として古来から栄えていた。デージェネール地方からはタバコや砂糖などが持ち込まれ、北部の鉱山では鉱業が盛んである。ブレニア内海で取れる塩は、西方の内陸国では高い需要がある。さらにベルリア王国の特産品として「茶」の栽培も行われている。ベルリア王国は亜熱帯気候で

あり雨も多く、土壌も「チャノキ」の栽培に向いていた。後世では嗜好品としてコーヒーが流行するが、大陸黎明期初頭ではベルリア産の茶が、西方に多く流通していた。こうした産業から、ベルリア王国は豊かな経済力を持つていた。だがその豊かさが万人に広がらなかつた点が、ターペⅡエトフとは異なると言える。ベルリア王国はマーズテリア教を国教とし、王族と貴族、神殿神官によつて統治されている。どれほど豊かになつても満足しないのが人間の性である。マーズテリア神殿総本山ではたびたび、ベルリア王国内の「腐敗」が取り沙汰されていた。

ベルリア王国の王都ランヴァーナは、古来から人間族の街として栄えていた。マーズテリア大神殿を中心として、信義と公正を重んじる騎士団がある一方で、「他者にはそれを口実とするが自らは別」とする特権階級層なども存在している。光側の大国として栄えながらも、その裏では人間の業が蠢いていた。

ファルナ・レギオスは、十八歳になつたばかりの「見習い騎士」である。十歳でマーズテリア総本山に入り、神殿内の「教所」で学びながら、やがてマーズテリア神殿の騎士として正式に登用される見込みであつた。現在は親元を離れ、ベルリア王国で修行の身である。この夜も、十歳年上の先輩騎士カイルと共に、ランヴァーナの治安維持のた

めに見回り活動をしていた。見習いといっても、その装備は騎士と同じである。鎖帷子を身に着け、剣を腰に下げている。ファルナは剣技の他に、魔術の素質も持っていた。教所内でも、騎士としての将来を期待されている。その自負心と自信を持って、今夜も見回りをしている。このところ、妙な噂も出ていたため、この日は特に、気合を入れている。

夜もふけ、ランヴァーナの街も眠りにつこうとしていたとき、悲鳴のような声が聞こえた。二人は立ち止まり、顔を見合わせた。

『ファルナ、聞こえたか？』

『はい。女性の悲鳴のようでした。カイル殿！』

二人は頷いて、駆け出した。裏町の一角で、悲鳴の主を見つける。若い女性が男三人に囲まれ乱暴を受けようとしていた。ファルナは怒りの表情で怒鳴った。

『何をしているか！』

男たちは舌打ちをして振り向いた。身なりからして富裕層である。

『マーズテリアの騎士たちか・・・俺たちはオルレアン公爵家の一門だ！余計な口出しはせずに、とつとと失せろ』

特権階級層の傲慢であろうか。男たちはマーズテリアの騎士に対しても臆するところがない。だがそれは、ファルナにとって怒りを増長させることでしかなかった。

『王国では、婦女に対する暴行は禁じられている！卿らは貴族の身でありながら、自らを貶めるつもりか！』

『うるせえっ！』

男が殴りかかってくる。ファルナはそれを躲し、腹部に強烈な一撃を入れた。他の男たちも捕らえ、荒縄で縛り上げる。礼を述べる女を帰し、ファルナは意気揚々であったが、カイルは内心では複雑であった。駐屯所に戻った彼らを待っていたのは、分隊長からの怒鳴り声だった。

『馬鹿者ツ！よりによつてオルレアン公爵家に連なる者たちを捕らえただと？公爵殿下は当神殿に多額の布施を収めて下さっているのだぞ！』

『ですが、神殿に布施をしているからといって、婦女を暴行しても良いということにはなりません。マーズテリアの騎士として、見過ごすことは出来ません！』

ファルナもカイルも、内心では苦々しい思いを抱いていた。ベルリア王国が建国されて数百年、大きな戦火も無く繁栄を続けている。だがその内部では腐敗が進んでいた。政事に関わる以上、マーズテリア大神殿もそこから逃れることは出来ない。分隊長は溜息をついて手を振った。二人は一礼し、黙つてその場を離れた。

『カイル殿、これで良いのですか！これでは私は胸を張つて「マーズテリアの騎士」と名乗れません！』

酒場でファルナが激昂していた。先輩騎士であるカイルは、ファルナの肩を叩いて慰めるほか無かった。

「一晩、勾留した後には釈放」

これが二人が捕らえた男たちに与えられた罰である。考えられないほどに軽いものだ。ファルナはまだ見習いである。こうした現実を受け入れるには若すぎた。自分も最初は激しい抵抗感を覚えた。だが人間は徐々に慣れてくる。騎士だって人間である。霞を食べているわけではない。こうして酒場で飲む金も、元を正せば「布施」なのだ。生きていく為には、現実との妥協も必要になる。涙を浮かべる後輩を慰めながら、カイルも徐々に痛飲したい気分であった。

マーズテリア神殿総本山ベテルーラには、児童保護施設がある。マーズテリアの騎士は国家間の紛争の調停や魔獣討伐に駆り出されることが多い。そのため、幼い子供を遺して生命を落とす騎士たちもいるのである。総本山には、そうした遺児たちを引き取り、育てるための施設がある。こうした施設があることから、騎士たちは命を賭けることができるのだ。

晴れた日の午後、施設の庭先で子供たちの声が響いていた。まだ十歳くらいの子供二

人が、取っ組み合いの喧嘩をしている。周りの子供たちは不安げにそれを見ているしか無いようだ。そこに銀髪を短く刈り込んだ中年の男がやって来た。

『コラコラ、君たち。喧嘩をしてはいけません。君らのお父さんたちは、マーズテリア神に生命を捧げた尊い方々です。お父さんたちは無闇に暴力を奮ったりはしませんでした。誇りある騎士だったのです。いたずらに暴力を振るうのは、お父さんの名誉を穢すことになります。良いですか？暴力を奮って良い相手は、魔物と闇夜の眷属に対してのみです』

『アンデルセン先生！』

子供たちが囲む。喧嘩をしていた二人の頭を撫で、優しい微笑みを浮かべて諭す。やがて、子供たちは仲直りをしたようで、笑ってその場を走り去った。アンデルセンは笑顔のまま、後ろ姿を見つめて頷いた。子供たちが来訪者と思しき神官の横を駆け抜ける。アンデルセンの笑顔が消えた。

・ ・ ・ 地は汝の為に呪われ、汝は生涯の苦しみと共に地から糧を得る。地は茨と薊とを生じ、汝は野の草を食すであろう。汗してその日の糧を得て、汝ついに土に帰る。汝は土から生ぜし塵芥、故に汝は塵へと帰するのだ ・ ・ ・

マーズテリア神殿対魔特務機関長ドレッド・アンデルセンは黒い外套を羽織り、薄暗い地下道を歩いていた。マーズテリア神の教典の言葉を小声で唱えている。その姿は、

子供たちを縛っていた心優しい神官の姿ではない。その生涯を捧げ、一点の曇りもなく神を信じ切った男の姿であった。やがて地下道を抜け、教皇庁の奥へと入る。一室に入るとアンデルセンは跪礼した。目の前の男が、自分の上司である。

『アンデルセン機関長、お呼び立てをして申し訳ありません。貴殿の力を貸していただきたいのです』

『畏れ多いお言葉です。教皇猊下……私は主にその全てを捧げし者、故にお気遣いなど無用です。ただ「使命」のみをお与えください』

マーズテリア神殿教皇ウイレンシヌスは小さく頷くと使命を与えた。

『アンデルセン機関長、ベルリア王国首都ランヴァーナにて不可解な事件が起きています。老若男女問わず、夜毎に人が攫われると大神殿からの報告がありました。ランヴァーナのみならず更に東方のディージェネール地方でも、同様の事件が発生しているそうです。現地の「腐海の大魔術師」という奇妙な噂話まで出ているそうです。対魔特務機関にて、その調査にあたっていただきたいのです』

『……恐れながら猊下、その手の噂の調査であれば、現地の神殿騎士をもつて、その任に就けるべきではないでしょうか』

ウイレンシヌスは頷いた。言葉を選んで事情を説明する。

『当初は、大神殿の騎士たちが調査にあっていました。ですが二十日ほど前ですが、夜

警中に不審者を発見し取り調べようとしたところ、見たこともない魔獣を役する男が、一人の騎士と女性を攫い消えたそうです。その……消えたのは「ファルナ・レギオス」です』

アンデルセンの眉間に血管が浮かんだ。

ファルナ・レギオスは沈んだ気持ちでその日の夜警に出ていた。同僚のカイルも「あの夜」のことは口に出さない。

(何か切っ掛けがあれば良いんだが……)

カイルは内心で溜息をついた。少し濃い霧が出ている以外、普段と変わらない夜警であった。だが霧の中で女性の悲鳴が響いた。あの日の夜と同じである。ファルナは脱兎の如く駆け出した。

『止せっ！一人で突っ走るな！』

カイルが止めるのも聞かず、ファルナは疾走った。何回か道を曲がると、やがて声が近づいてきた。予想通り女性が襲われていた。だがあの日の夜と違ったのは、襲っている者であった。大男と小男の二人組のようだが、得体の知れない漆黒の外見をしていた。ファルナは剣を抜いた。

『何をしている!』

『何をしているか? フム．．．「実験材料の調達」としておきましょうか』

振り向いたのは頭から黒い外套を被った魔術師のような外見をした小男であった。口元だけが見えるが、手には魔術状を持つている。手の甲の皺から、相当な高齢者であった。ファルナは剣を構えながらもジリジリと距離を詰めた。「あの夜」とは異なり、眼の前の二人は間違いなく「悪」である。ならば遠慮をする必要はない。斬り殺しても問題にされないだろう。「絶対悪」を前に、ファルナはマーズテリア神への信仰心を自覚した。恐怖心を抑えるように大声を出す。

『貴様らは何者だっ!』

だが目の前の魔術師は口元を歪めて嗤った。

『ヒジャヒジャッ! 何者か．．．本気で聞いているのですか? お答えするなら「黒い二人組」です』

『そんなことは見れば判る!』

『そうでしょうね。別に貴方の観察眼を疑っているわけではありません。私が言いたいのは「夜中に女性を襲っている者」に対して「何者か」と聞いても、聞くだけ無駄ということです』

ファルナは氣勢をあげて斬りかかった。だが小男に振り下ろされる剣は途中で止

まった。大男が剣を無造作に挿んでいた。ファルナが呆氣に取られた時、小男が顔を上げた。

『先ほどの言葉は少し誤りがありました。「二人組」と言いましたが、私たちは人間ではありませんでした。ヒヤヒヤヒヤッ!』

ファルナは小男の眼を見た。あまりの恐怖に、悲鳴を上げることすらできなかった。

王都ランヴァーナにあるマーズテリア大神殿の一室。若き騎士見習いファルナ・レギオスの同僚であったカイルは、震えを抑えながら答えていた。ドレッド・アンデルセンとマリア・セレンティーヌは黙って話を聞いていた。

『それで、悲鳴を聞いてお前が駆けつけたときには、黒い二人組がファルナを抱えていたんだな?』

『正確には、大男の方です。いえ、あれは人間ではありません。人間ではない「何か」です』

『なぜそう言い切れる?』

カイルは恐怖心を抑えながら、自分が見たものを語った。

『ファルナツ！無事か！』

駆けつけたカイルが見たものは、七尺以上もある黒い大男が、両脇に人を抱えている場面であった。

『気をつけよ。特に女の躰は細心の注意を払うように。妊娠できなくなったら困る・・・』

小男はカイルの姿など眼中に無いようで、大男に指示していた。

『貴様らっ！何をしているか！』

怒声に対してようやく二人が振り向いた。その時、カイルは見た。大男の貌と思しき部分に三つの赤黒い目玉があった。小男は小さく溜息をついた。

『やれやれ・・・さすがに三体も持ち帰ることはできません。見たところ手に入れた材料よりは年齢が上のようなですね。若いほうが好ましい。この男は始末しましょう』

・・・グルルツ・・・

大男が唸り声を上げる。小男が首を振った。

『時間がない。お前の餌は後で与えます。さて・・・』

小男は貌を上げて、一步を踏み出した。その貌を見てカイルは戦慄した。皺くちやな老人だが瞳が異様であった。白目は一切なく、全てが漆黒に覆われ、その中を紅い点が揺れていた。口元の笑みと相まって「恐怖の化身」のように感じた。真の恐怖に直面し

たとき、人は悲鳴すら忘れる。身じろぎもできず、ただ震えるしか無い。カイルは正にその状態であった。だがこの時、救いが起きた。別の通りで賑やかな笑い声が響いたのである。自失していたカイルは、それで気を戻した。背を向け、一目散に駆け出した。

『おやおや……』

小男の呟きが聞こえたような気がした。

『あ、あれはヒトではない。悪の化身……恐怖の化身です。私は逃げました。誇りも、使命も捨てて逃げたのです。あれ以来、私は夜を歩くことすら出来なくなってしまうしました。怖い……怖いんです……』

『それは貴様の信仰が足りないからだ。マーズテリア神に全てを捧げたとき、己と主は一体となる。貴様はその相手に負けたのではない。己自身に負けたのだ』

アンデルセンはそう言うと言手を振った。憔悴したカイルを他の騎士たちが支えるように連れ出す。マリアは小さく呟いた。

『彼は、もう駄目でしょうね』

『一度でも恐怖に負けた者は、二度と騎士に戻ることは出来ぬ。ヒトである以上は恐怖心を消すことは出来ぬ。主に対する信仰心こそが、恐怖に打ち勝つ力となるのだ。あの

男はその信仰心が弱かった・・・』

『猊下も気にされていましたが、確かにこのランヴァーナは「俗」が強い街ですね。彼も、その「俗」に汚されたのではないでしょう。いずれこの神殿に、総本山から審問官が派遣されるかもしれません』

アンデルセンは立ち上がり窓際に立った。空は分厚い雲に覆われている。アンデルセンは初代聖騎士ルクノウ・セウの言葉を呟く。

・・・過酷なる試練に相對せし時、汝の本性が試されよう。石をもて己を打ち、刮目して相對せよ。己が心と向き合え。己が声を聞け。試練とは「練る試み」に他ならぬ。故に克服できぬ試練など与えられぬ。向き合うことそのものが「練る試み」なのだから・・・

『今夜は雨になるな・・・ 夜警に出るぞ。この様な夜こそ、魔が蠢くときだろう』
マリアは頷いた。

降り始めた雨は、やがて雷雨となった。ドレッド・アンデルセンとマリア・セレンティーヌは獣皮の外套を頭から被り、夜の街を歩いていった。手にはランタンを下げているが、暗黒に近いほどに暗い。二人は意図的に裏道を歩いた。二人以外には人気は全く無

い。人攫いにはうってつけの夜であろう。やがて二人は袋小路に入った。行き止まりの前でアンデルセンは立ち止まった。

『そろそろ出てきたらどうだあ？先ほどから穢れた気配を撒き散らして騒がしいわ……』
『おやおや、やはりお気づきでしたか』

コツコツと音が鳴る。やがて漆黒の闇の中から黒い小男が姿を現した。だが大男はいない。

『こんな雨の夜でまるで襲ってくれと言わんばかりの行動……私を待ち受けるためのものでしたか』

『解っていて出てくるとは、存外、愚か者のようだな』

『ヒヒヨヒヨツ……まあ普通ならやり過ぎすのですが、貴方がたの気配が面白い』

小男は嗤いながらアンデルセンを指差した。

『貴方……神格者ですね？それにそちらのお嬢さん、貴女はエルフ族の血が流れていると観ました。こんな貴重な素材は滅多にお目にかかれません。神核とは体内の何処にあるのか、どのような形状なのか、ぜひとも解剖して調べたいものです。そちらのお嬢さんには「生命誕生」の謎解きにお付き合い願いたいですね』

『フンツ、そういう貴様こそ人間ではあるまい。鼻を掴みたくほどの邪の気配。魔人だな。最早、貴様に救いはない。塵芥と化すがよい』

アンデルセンは背に刺した二振りの剣を抜き構えた。マリアも魔術杖を構える。小男は更に一步を踏み出した。ランタンの薄明かりがようやく顔を映し出す。白目のない暗黒の瞳が浮き上がる。カイルが恐怖した瞳であったが、アンデルセンは怖じけることなく斬りかかった。剣が十字に交差する。だが手応えがない。小男は嗤いながら消えた。

『幻術か？マリア、本体はどこだ？』

『解りません。今のが幻術なのかどうかも・・・魔術を使っていた気配そのものがありませんでした。見たこともない術です』

舌打ちしたアンデルセンに強い力が襲いかかった。いきなり足元が膨れ上がり、爆発したのだ。紅い三つ目をした大男が地中から飛び出してきた。下から右拳を突き上げてくる。アンデルセンは剣を交差させてそれを防いだ。吹き飛ばされたが空中で一回転し、そのまま地面に降りる。アンデルセンの口元が歪み、瞳が輝いた。

『主は仰られた。生きとし生けるもの、みな親兄弟がある。たとえ魔物であろうとも慈悲を持つて接すべしと・・・また主は仰られた。それでもなお「邪なる者」も存在する。たとえヒトであろうとも羅刹となりて屠るべしと・・・』

アンデルセンの姿が消えた。次の瞬間、大男の両腕が肩から切り落とされた。悲鳴のような声が響く。そこに鋭さを持った雷が落ちた。通常なら感電するはずだが、その雷

は刃のように大男を頭頂から切り裂いた。真つ二つになって割れる。死体から漆黒の炎が立ち上り、灰すら残さずに消えた。パチパチと手を叩く音が聞こえた。いつの間にか先ほどの小男が立っていた。

『素晴らしい・・・ お二人とも超常の力をお持ちと思つていましたが、どうやら魔神級のようです。今の私では二人同時を相手にするのは骨ですなえ』

『口を開くな塵チリが。空気が穢れる。塵らしくさつきさと掃除される・・・』

アンデルセンとマリアは同時に攻撃を仕掛けた。だが小男は両手から別々の魔法を繰り出した。自分の周囲を炎で取り囲むと同時に、マリアには目に見えない拘束魔法を掛ける。炎に飛び込んだアンデルセンが斬りつけるが、その時は既に小男は残像となっていた。いつの間にか拘束されたマリアの横に立っている。有り得ないことであつた。自分の横を通り過ぎたはずがない。まるで一瞬で転移したかのようなであつた。

『中々の魔力を持っていますし、人間より躰も強そうです。これなら「良い子」が産めるでしょう』

自分の下腹部を撫でる小男に、マリアは唾を吐きかけた。だが小男は気にする様子もなく肩を掴んだ。再び斬りかかってくるアンデルセンに笑みを浮かべる。足元がいきなり無くなつたかのように感じた。次の瞬間、マリアの視界は暗くなつた。

『ガアッ！』

アンデルセンは怒りのあまり大地を踏み鳴らした。二人の気配は完全に消えている。力づくで襲い掛かってくる魔獣とも強力な魔力で周囲を破壊する魔神とも違う。これまで全く戦ったことがない手合であった。

『奴の巢は何処だ？地脈魔術を利用して逃げたのなら、それほど遠くには行っていないはずだ……』

『いや、その前に考えるべきだ。何故、奴は転移ではなく地脈魔術で逃げたのかをな』
上空から声が掛けられた。見上げたが暗くて朧気にしか見えない。雷が疾走った。そこには自分と同じく黒い外套を纏った男が浮いていた。

第七話：奇妙な共闘

デイル||リフィーナ世界には、多種多様な知的生命体が棲んでいる。代表的な種族だけでなく、魔族、竜族、人間族、獣人族、ドワーフ族、エルフ族、イルビット族、龍人族、悪魔族などであるが、悪魔族だけでも飛天魔族や歪魔族など分岐しており、獣人族に至っては「犬歯族」「猫爪族」のみならず「人魚族」なども存在することから、知的生命体の分類は百を超えると言われている。この多種多様な知的生命体はそれぞれに文化を形成し、外見も異なっている。生物学的に見れば全く異なる生物である。

後世の生物学者たちは、デイル||リフィーナの多種多様な生物を体系化しその生態を調査しているが、一つの疑問に対して未だに解を得ていない。それはデイル||リフィーナ世界における最大の謎とも言われている。すなわち「種族間の混血」の存在である。例えば、魔族と人間族の間に誕生した「半神半人」は、三神戦争叙事詩にも謡われ、その後も複数回に渡って歴史に登場している。具体的には魔神グラザと人間族の女性との間に生まれた「半魔神」であるメンフィル帝国初代皇帝「リウイ・マーシルン」などが挙げられる。だが「魔族」と「人間族」では、生物学的には全くの「異種」である。魔神グラザは神核を持つ不老の存在であり、筋力も魔力も人の域を遥かに超えていた。神

族は、骨密度や筋繊維の違いは無論、肉体の構成物質そのものが人間とは異なると考えられている。生物学的に考えるならば、神族の男性が人間の女性を妊娠させるということとは、人間の精液を使って鶏に雛を産ませることに同程度の「有り得ないこと」のはずである。実際、後世の生物学者の中には、犬に人間の精液で種付けを行う、という実験をした者までいる。その実験は見事に失敗したが、その一方で人間族と獣人族、エルフ族と人間族などの混血は誕生しているのである。この事実が、生物学者たちを大いに悩ませていたのである。

後世においても、異種族間の混血については「謎の事象」のままとされている。西方諸国内には、倫理上の問題から研究そのものを禁忌とする風潮がある。その一方で、国家形成期以降は種族間の交流も活発化し混血者も僅かずつではあるが、増え始めていた。それらの事例の多くが「人間×他種族」という組み合わせであったことから、人間という種族そのものに「異種族と混血する土台」がある、と唱える生物学者もいる。無論、後世においてもこの学説は仮説の域を出ていない。

目の前に降りてきた黒衣の男を見て、アンデルセンは一瞬驚き、そして急速に覚めた。数歩離れた二人の間に微妙な空気が流れる。両者とも黒い外套を纏い、背に剣を刺して

いる。だが両者が立っている地点は、決して交わらないものであった。再び雷光が疾走った。降りてきた黒衣の男ディアン・ケヒトは笑みを浮かべた。

『・・・雨足が強くなりそうだ。部下を追わなくて良いのか?』

マーズテリア神殿対魔特務機関長ドレッド・アンデルセンは目の前の男を睨みつけた。目の前の男の気配は忘れられるものではない。四年前、必中を期して放たれた聖女の一撃をもともせず、魔神を逃した男である。あの時は黒い影と後ろ姿しか見ていないが、こうして対面すると魔神には見えなかった。泰然とした眼の前の魔神に、アンデルセンは臨戦態勢のまま返事をした。

『何故、貴様がここに居る? ターペⅡエトフの黒き魔神、主に逆らいし魔なる者、我らが神殿の「怨敵」、ディアン・ケヒトよ』

『アンタと同じさ。あの魔術師を追っている。最近、ランヴァーナで行方不明者が出る」と聞きつけてな。奴の仕業だと直感したよ。拐われたのは皆、若い男女だ』

アンデルセンは両手をゆっくりと上げ、剣を構えた。躰から殺気が立ち上る。そこには、魔術師を逃した苛立ちもあつた。

『貴様があの魔術師マジックの仲間では無いと、どうして言い切れる? 眼前の「魔」を放置して何が特務機関か、何がマーズテリア神殿か』

『やれやれ、狂信者って奴は・・・』

ディアンは苦笑しながらも背中への剣に手を掛けた。瞬間、アンデルセンが動いた。両腕が消え、凄まじい速度で斬りかかる。躲したディアンは背の剣クラウ・ソラスを抜剣し、撃ち下ろした。アンデルセンは二本の剣を交差させ、それを防いだ。剣同士が火花を散らす。雨の中、黒衣の二人が顔を突き合わせる。

『良い動きだ。力も速度も聖騎士より上だな。これが対魔特務機関の力か』

『貴様は何故、本気にならない？ 上級魔神を超える力が、この程度のはずが無い。それも主に伏して許しを請いたいのか？』

両者が同時に後ろに退いた。アンデルセンは息を吐き、剣を降ろした。殺気も抑えている。

『貴様が知っていることを一切合切すべて話せ。それで今回は見逃してやる』

『あの魔術師についてなら、話してやつても良いぞ。だがこの雨の中、むさい中年男を相手に語るのもな……』

『……着いて来い』

大神殿の方角に向けて、アンデルセンは歩き始めた。

マーズテリア大神殿の一室、デイアンの目の前には対魔特務機関長ドレッド・アンデルセンが腕を組んで腰掛けている。扉の外には、完全武装した騎士四名が気を張り詰めて立っている。マーズテリア大神殿に魔神が入ってきたのである。有り得ない事態に、神殿上層部は大混乱をしていた。だがデイアンは平然と椅子に座っていた。

『おい・・・この雨の中を歩いてきたのだ。茶ぐらい出すのが礼儀というものではないか?』

『フンツ 礼儀とは、秩序を維持するために人々が守るべき行動様式のことだ。秩序の「破壊者」である貴様に対して、礼儀など不要だ。さっさと教えろ。あの魔術師は何だ? マリアは何処にいる?』

デイアンは首筋を掻いて溜息を吐いた。

『奴の名は「アビルース・カツサレ」という。現在は人間から魔人へと変貌する過程だが、魔力だけなら既に魔神級だろう。ディージェネール地方の亜人族たちは、奴のことを「腐海の大魔術師」と呼んで恐れている。奴は、より強大な力を手に入れたがっている。具体的には「神族の肉体」を欲している。そのためなら、どんなことでも平然とやるだろう。高い知性と才能、強い魔力を持ちながらも完全にイカレた男だ。「有能な狂人」ほど、タチの悪いものは無いな』

『イカれているのは貴様も同じだろう? 主に対する信仰心を持たぬばかりか、あろうこ

とか主を含め神々に闘いを挑もうなどと、狂人の所業以外の何物でもあるまい』

『おいおい、オレのことは良いだろう。今は部下を助けたいんじゃないのか？ あんまりオレを逆撫でするな。此処の連中を皆殺しにして帰ってもいいんだぞ？』

『…まあ良いだろう。先ほど貴様は「何故、転移ではなく地脈魔術で逃げたか」と言っていたな。詳しく聞かせろ』

『まず考えるべきことは、奴が使っている魔術だ。結論から言えば、アレは魔術と科学の融合だ。魔導技術の道具も使っているがそれだけではない。「蜃気楼現象」といった光学の科学知識も利用している。魔術による幻影と科学による屈折現象の組み合わせだ。さつきも言った通り、奴は転移ではなく地脈魔術を使って逃げた。理由は二つだ。まず第一に、魔力の問題だ。人を抱えた状態での転移は、単体転移よりも遥かに魔力が必要になる。底までの魔力を持っていないのさ。魔人へと移行する途中段階にいるからだろう。第二は、奴の目的にある。奴は生体を欲しがっている。死体では意味が無いんだ。床に術式を描き、転移門を開放していれば問題ないが、魔力で空間に転移門を開けようとすれば、下手をしたら異界に飛びかねない。本来、そうした転移は緊急回避手段なのさ』

『奴の目的は何だ。何故、生体を欲しがっている？そして何故、それをお前が知っている？』

『奴はディージェネール地方北部に「茫熱病」という疫病を撒き散らした。問題はその目的だ。茫熱病は、高熱が続くことで生命力が徐々に弱くなり、やがて死に至る病気だ。最初は死の病を流行らせ、死体を利用するつもりかと思っていた。だがそうだとすると、あまり賢いやり方ではない。死体が欲しいのであれば自分の手で殺戮したほうが早いからな。何か別の目的があるはずだ。オレはそれを調べていた。行方不明になった亜人族たちを調べるうちに、奴が「強い生体」を欲していると気づいた。連れ去られた者の共通点は、疫病に罹らなかつた強い免疫力を持つ者か、疫病を克服して生き残つた者だからだ。疫病の発生箇所、そして目撃証言などを調べるうちに、奴の居場所がある程度まで絞れた。この街で行方不明者が出ていると聞いて、奴を見つけて尾行するつもりだった。そんな時にアンタらが出てきた。連れ去られたアンタの部下は、女だったな？ 奴のことだ。ロクな目的じゃないだろう。さっさと救出に向かつたほうが良い』

『俺の部下に死を恐れる者など居らん。マリアはマーズテリア神に全てを捧げた歴戦の魔術師だ。簡単に死ぬはずがない』

『解っていないな。いいか、死というものは時として救いですらあるんだ。奴は何かしらの目的から、アンタの部下を連れ去つた。目的を達成するまで死なせると思うか？ 想像を絶するほどの悍しい目的の為に、アンタの部下は無理矢理に生かされ、その生命を利用され尽くすだろう』

アンデルセンは腕組みを解くと立ち上がった。

『貴様が絞り込んだ場所を教えろ。対魔特務機関は、全員が体内に「魔晶石」を埋め込んでいる。マリアが意識を取り戻していれば、魔力を流しているはずだ。ある程度の距離まで近づけば俺は気付く』

『手を貸してやろうか？』

『貴様に借りは作らん。早く場所を教えろ。そしてさっさと神殿から出て行け。次に貴様を見つけたら、必ず殺す』

『・・・ディージェネール地方北部の遺跡「勅封の斜宮」の近くだ。そこはもともと龍人族が棲んでいたが、全員が行方不明だそうだ。おそらく龍人族の棲家だった場所を根城としているのだろう。斜宮から北に一里ほど行ったところに洞窟がある。恐らく、奴はそこにいる』

そう告げ、ディアンは立ち上がった。部屋の扉を開け、立っていた騎士の肩を叩く。

『ご苦労さん』

魔神が立ち去ると、アンデルセンも動き始めた。鎖帷子を纏い、両腰に短剣を刺す。神聖属性の呪符を外套の中に仕込み、二振りの剣を背負う。神殿を出ようとするアンデルセンの前に、上位神官が現れ、文句を言った。

『待て、アンデルセン殿！何故、魔神などを引き入れたのか説明をして・・・グヘエッ』

男の腹部に拳がめり込んでいた。アンデルセンの瞳には怒りが浮いていた。

『貴様らが政治ごっこにうつつを抜かしていなければ、俺の教え子も部下も無事だったのだ。貴様らに比べれば、あの魔神のほうが幾分でもまだマシであろうよ。大人しく此処で震えている。総本山から審問官が来るまでな・・・』

・・・己が心のざわめきに、心の声に耳を傾けよ。さもなくば汝の心は口を閉ざし、汝は暗闇へと堕ちるであろう。真に悪しく救い難き者とは、己が声を聴けなくなつたものなのだ・・・

黒い外套を靡かせ、銀髪の男は大神殿を出た。その背中には決死の覚悟が滲んでいた。

目を覚ましたマリア・セレンティーンは、自分が危機に陥つてゐることを自覚していた。両手両足は革紐で石台に縛り付けられていた。紐には何らかの術式が描かれてゐるようで、手から魔術を繰り出すことができない。いざとなれば舌を噛んで死ぬ覚悟はできているが、猿轡を嵌められており自決もできない状態であった。首を捻つて周りを見たわす。何処かの洞窟のようであつた。壁には等間隔で蠟燭が灯されている。ギイという音と共に、何かの気配が入つてきた。だが寧ろそれ以上に、扉の向こう側から聞

こえた叫び声や呻き声のほうに気になった。だがその音もすぐに消えた。コツコツという足音が近づいてくる。やがて漆黒の目をした老人が自分を覗き込んだ。

『おや、お目覚めでしたか。では早速、始めましょうか……』

何かの魔力が自分の中に流れ込んでくる。男が説明を始めた。

『いま、貴女の下腹部……「子袋」部分に、ある魔術を掛けています。再生魔法の一種と考えてください。これで二、三日後には妊娠できる状態になります。ああ、貴女はエルフ族の血も流れているので、もう少し早いかもしれませんね』

マリアは呻きながら首を横に振った。小男は頷いて説明を始めた。

『何をされるか知りたいでしょう？ご安心ください。きちんとして説明します。私は常々、疑問だったのです。例えばエルフ族と人間族は、その寿命は十倍以上も違います。つまり身体の代謝機能や老化の仕組みなどが全く異なるといふことです。にも関わらず、貴女のように「混血」が誕生している。犬とカラスの混血なんて想像できますか？普通は有り得ないでしょう。しかし何故か、神族と人間族、獣人族と人間族といったように、人間族が関わる混血が生まれやすいのです。では、人間族と犬、人間族と蛙などで混血は誕生するのでしょうか？実験をしたのですが誕生しませんでした。何処かに線引きがあるのです。私はそれを知りたいのです。そこで、貴女にはある種族の子種を受けていただきました。種族名は蜥蜴人種リザードマンです』

マリアは目を見開き、激しく首を振った。だが男はそれに気づかないように説明を続けた。

『蜥蜴人種は極めて面白い生態をしています。二足歩行で知恵を持ち、言葉を喋るという意味では獣人族やエルフ族と変わらないのですが、彼らは卵から生まれてくるのです。赤子に乳も与えません。その蜥蜴人種の子種を受けた人間族の女性は、どのような妊娠の仕方をするのでしょうか？卵を生むのでしょうか？それとも赤子を子袋に宿すのでしょうか？どうです。興味深い実験とは思いませんか？』

男は引き締ったような啞い声をあげた。だがいきなり冷静になると、沈痛な表情を浮かべた。

『実は・・・既にこの実験は何度かしているのです。残念ながら、普通の人間族の女性では妊娠しませんでした。最初は精液のみを子袋に注入していたのですが、妊娠しない。そこで仕方なくオスの蜥蜴人種に幻術を掛け、人間族の女性と性交させることで注入したのですが、それでも妊娠しないのです。私の仮説では二足歩行で脳がある程度発達をした知的生命体が相手であれば、人間族の女性は妊娠できるはずなのですが・・・』

ひとしきりブツブツと呟いた男は、再び笑顔に戻った。短刀を取り出してマリアの服を切り裂く。白い下履きを履いた下腹部が露わになる。

『そこで、貴女に協力をお願いしたいのです。エルフ族の血を引いた貴女なら、人間族よ

りもより広範の種族と交わるのではないかと考えました。もし貴女でも妊娠しないようであれば、人間族と蜥蜴人種との間での混血は不可能という結論を出しましょう。どうか、ご協力をお願い致しますよ？ヒヒヤヒヤヒヤッ！』

皺だらけの手で、マリアの下腹部を撫で、笑い声をあげた。男の狂気に、マリアは初めて恐怖に負けそうな気がした。

デージェネール地方北部の各集落に荷車が到着する。絹布で口と鼻を覆い、清潔な手袋をした者たちが、一斉に降りた。

『我々はエディカーヌ王国から来た救急隊です。流行り病の特効薬を持ってきました。これから各家を訪れます。どうかそのまま動かず、我々の手当を受けてください！』

茫熱病の正体は、悪意や怨念といった瘴気、魔術的儀式などによつて高濃縮された穢れなどが何らかの理由で浄化されず、大地に蓄積されたからであった。体内に取り込まれた穢れを浄化するには、エルフ族の薬を更に精製し、血管内に直接注入をする必要があった。エビルモスキートの針で造られた「注射器」で特効薬を射っていく。

『フム・・・やはり土が穢れている。土壤の改良が必要じゃ。このままではこの地は、本当に「腐って」しまうわい』

イルビット族の学者が土を調べる。土壤改良薬は、下手をしたら生態系を破壊しかねない。時間を掛ける必要があった。こうしたエディカーヌ王国の尽力もあり、ディージェネル地方北部は辛うじて、全滅という最悪の事態を逃れることができた。報告を受けたソフィアは安堵の溜息をついたが、まだ決着はついていない。窓際に立ったソフィアは怒りと苛立ちの表情で親指の爪を噛んだ。

（当面の危機は脱しそうですが、決着はまだついていません。現神殿はまだ理解できません。新しい世界を目指す私たちに対して、従来の世界を護ろうという主張は成り立つでしょう。ですが腐海の大魔術師は、まるで「破壊することが目的」のようです。目的の為には手段を選ばないという言葉がありますが、「手段の為には目的を選ばない」というのは狂気以外の何物でもありません。ディアンが追っている以上、いずれは補足できるとでしょう。この償いは、必ずさせます！）

無意識の行動に気づき、口元を離れた。ギザギザになっている親指を見つめる。

（今更ながらに改めて思い知らされます。インドリト王は・・・兄様は、なんと偉大だったのでしょうか。その背中を追っている私ですら、これ程に悩んでいるのです。その足元に届くのに、どれ程の時が必要なのでしょうか・・・）

王とは孤独な立場である。王国の象徴として振る舞い、平和と繁栄の為に苦悩を一身に背負うことが求められる。多くの歴史家が「名君になることより、名君で在り続ける

ことのほうが難しい」と指摘する。ソフィアはその重責に疲れを感じていた。その姿を見ていた護衛役のザボンが、静かに語りかけた。

『女王よ。今回の騒動が一段落したら、少し休まれては如何でしょうか。お疲れのご様子です』

『そうね・・・ デイジエエネルギー地方西岸に、デイアンが別荘を建てたそうです。女王と
いう肩書を外して、少しゆっくりしようかしら・・・』

グレーターデーモンの気遣いに、ソフィアはようやく笑顔を見せることができた。

第八話：狂気の魔術師

新七古神戦争以降においても、デイジエネール大森林は「腐海の地」として人々の立ち入りを受け入れないでいる。その理由は大きく二つある。一つは無論、隣接する大国エディカーヌ帝国が、デイジエネール大森林の立ち入りを厳しく制限しているからである。エディカーヌ帝国は、デイジエネール大森林を東西に走る大道路（獣道よりマシという程度だが）を敷くと、北部のブレニア内海沿岸部に砦を設け、冒険者の立ち入りを制限するようにする。デイジエネール地方進出を目論んでいたベルリア王国はこれに反発、腐海の地を巡る紛争が起きている。

もう一つの理由は、アヴァタール地方やレルン地方で語られ続けている「腐海の大魔術師伝説」にある。エディカーヌ王国建国から間もなく、腐海の地に「闇の大魔術師」が出現し、光闇を問わず様々な種族を苦しめた。その悪行はエディカーヌ王国のみならず、アヴァタール地方からレルン地方までのあらゆる国々を混乱に陥れたと言われている。エディカーヌ歴百三十七年、メルキア王国の穀倉地帯において土壌が汚染されるといふ事件が発生している。当時、第一級の魔導技術研究者であった「ヴェルロカ・プラダ」によって辛うじて浄化に成功するが、この事件によって腐海の大魔術師の名はア

ヴァタール五大国に知れ渡るようになった。

その後、レウイニア、メルキア、ベルリアの三大国による連合討伐軍が興されるが、エディカーヌ王国がこれに反発し、アヴァタール地方から陸路でディージェネール大森林に入る事が不可能となる。ブレニア内海中央部で合流し、ディージェネール地方への上陸する計画が起案されるが、実行に移されることは無かった。腐海の大魔術師をも上回る衝撃が、アヴァタール地方に発生したからである。それが「神殺しの登場」である。

ディージェネール大森林の深い森や険しい山道を駆け抜ける男がいた。マーズテリア神殿対魔特務機関長ドレッド・アンデルセンは、通常であれば二週間は掛かるであろう路を立ち止まること無く駆け抜ける。複数の魔物が襲いかかるが、アンデルセンは速度を落とすこと無く、その間を走り抜けた。暫くしてから、魔物たちの身体から血が吹き出す。

：：闘争に臨みし者たちよ、己が心に蒼き炎を灯せ。水面の如く涼やかに想いて、炎の如く熱く屠るが良い。終わりし時を見定め、激流の如く戦場いくさばを駆け抜けよ・・・
(マリアを連れての移動であれば、奴として戻るまでに数日の時を要したはず。追いつけぬまでも、縮めることはできよう・・・)

アンデルセンは殆ど休むこと無く、五日間を駆けた。神核を持つとは言え、尋常な気力では不可能である。肺の苦しきはやがて快感となり、それを通り過ぎて無感覚になる。「死域」と呼ばれる領域であった。この領域に入れば、死ぬまで動き続けることができる。マーズテリア神の教典を唱えることで己の信仰心を高め、人為らざる力を生み出し、人の持つ限界を超える。五日目の夕刻、夕日に照らされる遺跡が見えてきた。勅封の斜宮である。本来であれば古神の遺跡などは破壊対象であるが、今回の目的は部下の救出である。幾度目かの山を超え、教えられた洞窟に辿り着いた。

『……か……』

肩で息をする。腕も足も本来の力を出せない状態だ。だが今は、回復させる時すら惜しかった。入り口に立ち、瞑目する。心気を整えているとき、背後に気配を感じた。だがアンデルセンは振り返ること無く問い掛けた。

『……何の用だ、魔神よ?』

『お前、死ぬぞ?そんな状態で入ればな……』

振り返ったアンデルセンが見たのは、夕日に照らされる黒衣の男であった。その姿を見た途端、意識を失った。

腐海の大魔術師アビルース・カツサレは、研究記録を書いていた。机上には先日解剖した獣人族の頭蓋骨がある。それを手に持ち、熱心に眺める。

『やはり、人間族とは根本的に違います。人間族の中には、獣人族の若い女子を見て「猫耳娘」などと呼んで興奮する人もいるそうですが、理解できません。左右ではなく、頭頂部に耳が付いているということは、頭蓋骨の形状および脳の容量が人間とは異なるということです。同年、同身長の間人族の娘と比較すると、脳の容量はおよそ八割といったところでしょうか。エルフ族やドワーフ族と違って、獣人族が深くモノを考えることが苦手なのは、この脳の容量にあるのかもしれないですねえ。しかしその分、筋力や反射力は獣人族のほうが上です。ほぼ同じ重さの筋肉なのに、これはどういうことでしょうか……』

解剖したばかりの獣人の娘が石台の上に横たわっている。腕や足を切り開き、筋肉の形状をスケッチする。内臓や子宮の形状なども確認する。夢中になること数刻、ようやく一段落すると思ひ出したように顔を上げた。

『そういえば、あのハーフ・エルフに水を与え忘れていました。貴重な実験体が台無しになるところでした』

水瓶を持って部屋に入ると、ツンとした匂いがする。尿意を耐えきれずに、漏らしていた。アビルースは気にすること無く、台に拘束されたまま憔悴しているマリアに近づ

く。水瓶を見せると、マリアが口を開いた。そこに漏斗を差し込む。

『大変申し訳ありませんでした。水を飲ませて差し上げましょう。遠慮なく、お漏らししてください。貴女に種付けるリザードマンは、そんなことは気にしませんよ』

普段であれば羞恥に顔を染めるであろうが、渴ききっていたマリアは夢中で水を飲んだ。アビルースはマリアの下腹を撫でると頷いた。

『そろそろ準備もできたようですね。では種付け作業に入りましょうか。異種族交配の実験開始です。ヒヒヤヒヤヒヤッ!』

嬉しそうに嗤い、狂気の魔術師は部屋から出ていった。

氣づいたら、洞窟の入り口から少し離れた場所に横たわっていた。起き上がると、横から革袋が差し出される

『水はゆつくり飲め。一応は回復魔法を掛けているが、死域から戻ったばかりで水を飲みすぎれば、身体の負担になる』

『貴様に言われるまでもない。それより、先程の質問に答えろ。何故、貴様がここにいる?』

水を一口ずつ飲む。一滴一滴の水が、全身に染み渡るようであった。黒衣の魔神は肩

を竦めた。

『言っただろ。オレも奴を追っているんだ。ちよつと確認したいことがあつてな…』

魔神はそれ以上は言わなかった。アンデルセンは鼻を鳴らすと両手を握った。肉体も精神も問題ない。今すぐにも動けるだろう。洞窟に向けて歩き始める。魔神が後ろから付いてきた。

『…貴様の力など借りん。あの程度の相手、俺一人で十分だ』

『ま、お前はお前の目的を果たせ。オレの狙いは奴の「蔵書」だ。ついでに研究成果も貰っていく。ああ、お前にも聞いておこうか。「オメラスの解放者」という名前を聞いたことはあるか?』

アンデルセンは足を止めた。背中から殺気が立ち昇る。

『西方諸神殿の中でも、その名を知る者はごく少数… 我ら特務機関が設立された理由でもある「仇敵」の名… 何故、貴様がその名を知っている?』

『これでも長い時間を生きているからな。色々知ってるのさ。これから戦うイカレた魔術師アピルースは「解放者」に係しているかもしれない。奴が、何処から科学的知識を得たのかを掴みたい』

『つまりこの俺に、奴を生かして捉えろと言いたいのか?』

魔神は肩を竦めた。

『そこまで望んじやないさ。奴の研究室を漁れば何か出てくるだろ。お前は仲間を助けることだけを考えろ。言っておくが、奴は手強いぞ?』

『お前は戦ったことがあるのか?』

『一度だけな。膂力も速度も魔力も、お前のほうが上だろう。だが闘いでは、それらより重要な事がある。奴は強いんじゃない。巧いんだ』

フンツと鼻を鳴らし、アンデルセンは再び歩き始めた。後ろから付いてくる魔神には、もう声を掛けることはなかった。

元々は竜人族が棲んでいたという洞窟は、多少は入り組んでいるが道なりに歩けば奥へと進める造りであった。魔物などは出てこない。アンデルセンとディアンは互いに光魔法を駆使して洞窟内を照らしていた。やがて壁に灯りが備え付けられた回廊へと入っていく。別れ道の前で、二人は立ち止まった。

『…魔導技術の一種だな。だがそれだけではない。未知の技術だ。外して持ち帰るか』
壁に設置されている燈籠らしきものを観察するディアンに、アンデルセンは溜息をついた。

『おい。お前の好奇心などどうでも良い。左側からマリアの気配を感じる。俺は左に進

むぞ』

『ならオレは右だ。薬品らしき妙な臭いがする。恐らく研究施設があるだろう』

二人は黙って別れ、別々の道へと進んだ。

『フンンンンッ！』

一方その頃、対魔特務機関の一員にしてハーフ・エルフであるマリア・セレンティー又は、台座に拘束されたまま首を激しく振っていた。赤黒い瞳をした蜥蜴人種リザードマンが近づいてくる。その下半身に不気味な生殖器がむき出しになっていた。

『安心してください。薬物で自我を失っていますが、喰われることはありません。ただの「種馬」です。さあ、実験開始です』

マリアは顔を背け、きつく目を閉じた。生臭い臭いが強くなった。

その部屋は異様な空間であった。「竜人族の全身骨格」か飾られ、棚には様々な「標本」が置かれていた。透明なガラス容器の中には「人間の胎児」「種族不明の脳」などが入っており、粘性のある液体に浸されている。

『プラテットを改良して保存溶液にしているのか。ホルマリンのようなものだな。これは……』

一際大きなガラス容器には、悪魔族と思われる肉体が入っている。「思われる」としたのは、表皮や肉などが残っていないからだ。脳、内臓、血管だけが容器内で固定され、綺麗に残っている。

『……ここまで血管を残すには、心臓が鼓動している状態で保存液を注入しなければ不可能だ。生きたまま、水銀を注入したのか』

それは正に「狂気の産物」であった。全身に水銀を行き渡らせるために大動脈、大静脈に複数箇所から同時に水銀を注入する。被験者は涙を流して泣き叫び、やがてその瞳から涙ではなく水銀が垂れ落ちたはずだ。吐き気がするほどに残酷で非道な行為である。僅かでも良心がある者には、決して出来ない。だがそれによって得られた資料は極めて貴重だ。内臓、血管の「完全標本」などデイル||リフィーナ世界でも、この一点のみだろう。

『やはり、生かしてはおけん。生きていて良い存在ではない』

ディアンは舌打ちし、苦い表情を浮かべた。一人の人間として当然持つであろう「怒り」に拳を震わせながらも同時に、一人の「研究者」としてはこの標本の「価値」を冷静に認めていた。焼き払おうかとしばらく迷い、手を下ろした。

呻き声の中をアンデルセンは歩いた。牢獄を思わせる小部屋が左右に並んでいる。その中は目を背けたくなるような「狂気」に満ちていた。

『アツ…アツ…アツ…』

樹木の魔物「エント」が閉じ込められているが、その表面が異様であった。人間の子供と思しき貌が浮かび上がり、何かを発声している。どす黒い血液のようなものを注入されている獣人の子供もいる。この空間全てが、狂気の魔術師の実験施設であった。普通の人間であれば、あまりの悍ましさに発狂してしまうかもしれない。その中をアンデルセンは歩き続けた。若い男が牢獄につながれていた。全身の皮が剥ぎ取られ、既に絶命しているようであった。かつての自分の教え子のようにも見える。アンデルセンは額に青筋を浮かべたが、小さく祈りの言葉を唱え、そのまま歩き続けた。

…主よ、我に仇為す敵のなんと多きことか。「我に救い無し」と囁りし魔の多きことか。されど主よ、その輝きは我の盾、我の栄え、我の道標となりて聖なる山より我を導きたらん。一時伏して眠り、再び目を醒まし、我は歩を進める。我を囲い込み立ちはだかる萬の民を恐れず、頬を打ち、齒を砕き、主の祝福を民の頭へと掲げん…

やがて最奥に辿り着く。木で出来た扉であった。その中からマリアの気配を感じていた。そしてそれ以外の気配もある。五歩程離れたところに立つと、扉が開いた。漆黒の魔導衣を着た「狂気の魔術師」が出てきた。

『ヒヒヤヒヤッ！これはこれは、マーズテリア神殿の方ではありませんか。それともう片方は魔神ですかねえ？いつの間に光神殿は魔神と手を組んだのですか？』

『勘違いするな。奴が勝手に付いてきただけのこと… マリアを返してもらうぞ？』

だが狂える魔術師は肩を揺らしながら首を振った。

『ヒヒヒッ！それは無理ですな。彼女はいま、とても大事な実験の最中なのです。折角、最初の種付けが終わったのです。今は二発目に入っているとありますよ。さてさて、果たして彼女の仔袋は何を産み出してくれますかねえ』

『…狂ってるな。貴様… ならば死ねイイイッ！』

アンデルセンは猛然と斬りかかった。だが透明な壁のようなものに阻まれた。薄い膜のようなものに剣が絡め取られる。魔術師は漆黒の瞳をアンデルセンに顔を近づけた。

『空間そのものを歪めた結界です。貴方程度の力では打ち破ることはできませんよ。それにしても… 「狂っている」ですか？貴方が狂気を語りますか？マーズテリア神殿対魔特務機関か？ヒヒヒッ！』

『貴様ア…』

『まあ、貴方はここで大人しくしてください。私は種付け作業が気になりますので…』

魔術師が踵を返そうとしたとき、アンデルセンの後方から手を叩く音とともに声が響いた。

『いやいや。見事なものだ。「歪魔の結界」の応用版か?』

拍手をしながら、黒髪の魔神ディアン・ケヒトが姿を現した。魔術師は溜息を吐いた。だが余裕なのか、口元は笑ったままである。

『また貴方ですか。私の実験の邪魔ばかりする。困りますねえ。いい加減、怒りますよ?』

『オレはとつくに怒ってるんだがな。まあそれより、お前に聞きたい。ブレアード・カッツサレの研究資料は何処だ?』

その言葉によろやく、狂気的笑みが消えた。

『フウンンンツツ!ンンンツツ!』

マリア・セレンティーヌは悍ましい感触と痛みに呻いていた。ゴツゴツとした皮膚が自分を擦り上げ、生暖かい「何か」が体内を犯してくる。目尻から涙を流しながら、必死にマーズテリアア神への祈りを唱えていた。再び注ぎ込まれる。心のなかでまた一つ、何かが切れたような音がした。

『…物理障壁結界は、魔力を使って物理的な力、つまり運動エネルギーを「無」にする術式だ。無論、それには限界がある。強大なエネルギーを消すためには、それと同量の魔力が必要となる。だがお前の使っている結界はそれとは違うな。歪魔族は魔力を使ってデルリリフイーナ世界の「次元」そのものに影響を与え、異空間への道を空けている。オレも調べたことがあるが、アレは術式などではなく、歪魔族の「性質」そのものようだ。つまり、普通では同様のことはできない』

『ヒヒヨヒヨッ！見事な見解です。どうやら貴方も私と同じく「真理の探求者」のようですね』

黒衣の男二人が、まるで友人のように言葉を交わす。アンデルセンは眉間を険しくした。

『おい… 貴様の出番など無い。戦う気がないならさっさと失せろ』

ディアンは横目でアンデルセンを見ると、そのまま狂気の魔術師アビルースに顔を向けた。

『「腐海^イの魔術師^ウ」がアビルース・カッサレだと仮説すると、一つの疑問が生まれる。「腐海の魔術師」の名が噂として広まったのはこの数年だ。だがオレが見掛けたのは六十

年以上も前のことだ。この六十年、アビルース・カツサレは何処で何をしていたのか？ 足取りは殆ど残っていないが、幾つかの証言を聞くことができたよ。リプリーール山脈の「狂えし巫女」の話や、いつの間にか姿が見えなくなった「得体の知れないモノ」、そして「解放者」の影……これらが全て繋がっているとしたら一つの可能性が見えてくる。お前……「勅封の斜宮」で何を手に入れた？』

『貴方は既に予想しているのではありませんか？ まあご想像通りですよ』

『なるほどな……それで「狭間の宮殿」を調べていたわけか。お前、「神」になりたいのか？』

『「解放者の理想」など、私にとつてはいつでも良いのです。私の願いはただ一つ。愛しの女神をこの手に収めること……ただそれだけです』

アビルースは恍惚の表情を浮かべた。だがすぐに真顔に戻り、ディアンに漆黒の瞳を向ける。

『それにしても……貴方は一体、何なのです？「エネルギー」という言葉は寡聞にして知らないのですが……解放者^彼たちも似たような「未知の言葉」を使っていましたね。貴方、本当に魔神ですか？』

『そんなことはどうでも良い。最後の質問だ。さつきも聞いたが、ブレアードの魔導書は何処にある？お前の研究室には無かった。まだ何処かに、別の研究室を持っているの

か?』

『ブレアードの魔導書? ああ、我が家に伝わっていた本ですね。あれは…燃やしましたよ』

『なんだと?』

『一通り記憶しましたし、もう必要ありませんからねえ。どうせ私以外には読めないわけです。あ、もしかして欲しかったんですか?』

『ディアンは舌打ちした。だがすぐに切り替える。』

『…必要なことは聞いた。これで、お前を生かしておく理由も無くなったな』

『ディアンは上方に巨大な魔力を放った。山そのものが山頂から吹き飛ぶ。洞窟無いにいたはずなのに、頭上にいきなり空が出現し、アビルースは口を開けて呆れていた。落ちてくる瓦礫の中でディアンは笑った。』

『歪魔の結界は、座標軸の固定が必要だ。固定された部分を吹き飛ばしてしまえば結界は成立しない。さあどうする? もうその結界は使えんぞ?』

『全く、無茶苦茶な方法ですねえ。おっと…』

後方に飛び退いて、アンデルセンの剣撃を辛うじて交わす。ディアンの一撃で、後ろの扉も吹き飛ばされていた。頭上の変化に気づかないのか、リザードマンが腰を振っている。アビルースはヘラヘラと嗤いながら、リザードマンの背中を軽く叩いた。それだ

けで巨体が崩れ落ちる。鎖で手足を縛られ、吊るされている女性の姿があった。

『マリアツ!』

アンデルセンが突撃する。ディアンも壁を蹴り、斜め上方からアビルースに斬りかかった。気配が人間から魔神に変化する。

《死ねえっ!》

バチンツという音が響く。アビルースの物理障壁結界と魔神の一撃が衝突した。バチバチと火花が散るが、やがてアビルースが押され始める。

《魔力と磁力を掛け合わせた結界……だが所詮は子供騙しだ!》

魔神の膂力によつて剣が突き抜けてくる。さらにその下から、アンデルセンが斬りかかった。さすがのアビルースも全方位に結界を張ることはできない。脇腹に深々と剣が突き刺さる。口から黒い血を吹き出し、結界が消える。魔神の剣がアビルースの左肩から胴体までを切り裂いた。狂気の魔術師がゆっくりと崩れる。ディアンはアビルースの横に屈み、声を掛けた。

『教えろ。解放者のアジトは何処にある?』

だがアビルースは不敵な笑みを浮かべ、眼を閉じた。ディアンは立ち上がり、マリアを助けるアンデルセンを横目に研究室があつた場所に戻つた。山を吹き飛ばした衝撃で瓶などが落ちていているが、書棚は無事であつた。研究資料などをかき集める。一方、ア

ンデルセンはマリアに声を掛けていた。

『マリア、気をしっかり保て』

微かな反応を示す。回復魔法を掛け、穢れた躰を拭く。革袋に書類を詰める魔神の背中に声を掛けた。

『おい！マリアを救うために手を貸せ！』

魔神は手を止めるとマリアの横まで歩み寄った。陰部に指を突っ込む。

『あの狂人はどうやら、異種交配の研究をしていたようだな。ハーフ・エルフトリザードマンの交配か。妊娠しているかどうかは解らんが、躰を洗浄したほうが良いだろう。それと…』

マリアの頭を両手で挟む。「忘却」の魔術を掛け、この数日間の記憶を封印する。

『…神殿の連中などどうでも良いが、乱暴された女性を見捨てることはできません。この数日の記憶を封印した。早くここから連れて行け。この場にいたら封印が解けるかもしれない』

アンデルセンは頷き、マリアを抱え上げた。その場から去ろうとした時に呟いた。

『…一つ借りておく。いずれ返す』

振り返ること無く、そのまま歩み去った。

蠟燭の灯の中で資料をめくる。王都スケーマの地下にある研究室で、デイアンは回収した資料を読んでいた。いま読んでいるのは、獣人族の解剖記録である。悍ましい研究ではあるが論理は終始一貫し、客観的、科学的な視点から考察されている。叩扉され、第三使徒が入ってきた。地上では女王であつても、この空間では使徒の一人にすぎない。珈琲の香りに、デイアンは手を止めた。

『どうですか、狂人の研究記録は?』

『正に「狂気」だ。倫理の籠かごが外れると、人はここまで残酷になれるのかと怖くなつた。だが貴重な記録ではある。研究者としてのアピルースは、間違いなく第一級だ』

『どれほど優れた才覚を持つていたとしても、人間性が破綻しては意味がありません。ある一定の水準を超えると、「人格」と「才能」の均衡は難しくなるのでしょうか?』

『社会で生きるためには、多数派である「凡人」によつて生まれた「倫理」「規範」「常識」を受け入れねばならない。その結果、天才的な発想や行動が束縛されることがあるのは事実だ。「狂人とは、誰にも理解されない天才である」…そんな言葉があつたな。正にアピルース・カッサレのことだろう』

『それで、「解放者」についての記録は?』

『残念ながら、ここには無いな。だが、持ってきたのは一部の資料にすぎない。明日にで

も戻って、転送機を使って全ての資料を回収しよう』

第三使徒ソフィア・ノアⅡエディカーヌは頷くと、憂鬱な表情を浮かべた。

『本当に：アビルルス・カツサレは死んだのでしょうか？』

『左肩から右脇腹までを完全に切り裂いた。脈が止まったことも確認した。アレで生きているとは思えんがな』

『そうですね。ディアンがそう言うのなら、間違いないでしょう。あまりにも薄気味悪い存在だったので、少し不安になっただけです。気にしないでください』

ディアンは頷いたが、そう言われると不安にならないわけではなかった。呼吸、脈拍、鼓動は停止したことは確認した。だが焼き払った訳ではない。死体は存在しているのである。

『…念のため、死体を完全に消し炭にするか。完全な炭の状態にすればアンデッドにすらならないからな』

『お化けとして出るかもしれないよ？』

ソフィアは少し笑いながら冗談を言った。だが後に、この時の冗談を慥然とした気持ちで振り返ることになるのであった。

『き、機関長！わ、私…全く覚えていません！この数日間、何があったのでしょうか!』

マリア・セレンティイーヌが叫ぶ。ベルリア王国王都ランヴァーナにあるマーズテリア大神殿の一室で目を醒ましたマリアは、日付を確認して混乱した。覚えているのはカイルの話を聞いて、雨の中を街に出たあたりまでである。アンデルセンは黙って茶をすすった。マリアは結局、妊娠していなかった。綺麗な小川で身体を洗い、回復魔法を掛け、眠らせたままここまで運んだのである。マリアは未だに、自分が「処女」だと思っ
ているだろう。

『…気にするな。お前は突然倒れ、ずっと意識不明だったのだ。お前が寝ている間に、事件は俺が解決した。あとはこの神殿を「掃除」するだけだ。お前はまあ…街に出て男でも漁ってろ』

『…機関長？私は主にこの身を捧げし者です。男なんて興味ありません!』

アンデルセンは返答せず、ことさらに真面目な表情で茶を啜る。その口元には、彼には珍しい穏やかな笑みが、僅かに浮かんでいた。

得体の知れない集団が出現し、死体を取り囲んだ。大きな革袋に死体を入れる。油の
ようなものを周囲に振りまき、火を投げた。辺り一面が火の海になる。

『……これで良い。石棺に入れて蘇生させるぞ。人格破綻の危険があるが、気にすることはない。元々、破綻しているからな』

低い笑い声が複数おき、何処かへと姿を消した。一面焼き払われたその現場に黒衣の男が出現したのは、それから三日後のことであった……

第九話：女神と聖女の対談 序幕

ターペⅡエトフ王国の滅亡、そしてハイシエラ魔族国の崩壊というケレース地方の激動が過ぎると、レスペレント地方やアヴァタール地方には「束の間」の平穏が訪れる。ターペⅡエトフ滅亡により、ケテ海峡防衛という軍事的負担が軽減したカルツシャ王国は、隣国であり休戦中であつたフレスラント王国への侵攻を再び開始する。フレスラント王国はブレジ山脈北端の要塞を防衛線とするが、兵数および補給力に勝るカルツシャ王国に押され、ついに要塞は陥落する。カルツシャ王国はフレスラント王国の完全併合を目指して更なる侵攻を企てるが、この機に動き始めたのがグルーノ魔族国である。グルーノ魔族国を束ねる魔神ディアーンネは、フェミリンス神殿の占領を悲願としていた。ターペⅡエトフの滅亡により武器や食料の供給が途絶えていたとはいえ、悪魔族を中心とする強大な力に対抗するためには、カルツシャ王国の総力を傾ける必要があつた。カルツシャ王国で長年に渡つて総司令官を努めた「アリア・F・テシユオス」はすでに他界し、姫神フェミリンスの呪いを引き継ぐ「新たな將軍」は、まだ誕生していなかつた。そのためカルツシャ王国はフレスラント併合を諦めざるを得ず、ブレジ要塞の引渡しを条件に講和条約を結ぶのである。滅亡の瀬戸際であつたフレスラント王国はこれを快

諾し、ここにレスペレント地方二大国の紛争が終結した。

一方、西方諸国でも大きな動きがあった。西方の大国テルフィオン連邦は、神聖フェルシス帝国やベルリア王国との軍事的協調を進めながら、周辺領域への経済的併合を進めていた。テルフィオン連邦歴百五十年、西方北部の小国「ヴァシナル」が連邦に加わる。北方の小国であったヴァシナルは自然豊かではあったが、「歪み」と呼ばれる現象によつて魔物が出現しやすく、経済発展が遅れていた。テルフィオン連邦は、国教であるアークパリス神殿および同盟関係であるマーズテリア神殿に、ヴァシナルの辺境域「エテ」にある歪みの調査を依頼する。アークパリス神殿はその要請に応え、神聖騎士「ナイトハルト・ウオフォード」を派遣する。一方、テルフィオン連邦の急拡大を警戒していたマーズテリア神殿は、連邦内においてヴァシナルの政治的自治権を確立させるための「調整役」として、聖女ルナークリアを派遣するのである。

テルフィオン連邦歴百五十一年、後に西方諸国に衝撃を与えることになる「歪みの主根」を巡る最初の騒動が、始まるうとしていた。

大封鎖地帯の南西にあるマーズテリア神殿総本山ベテローラから北に進むこと二十日、テルフィオン連邦首都テルフィスに馬車が到着する。前後左右を六名の騎士に囲ま

れ、一際ひと目を引いた。馬車はそのまま王宮に到着する。騎士たちが整然と並ぶと、馬車から一人の女性が姿を現した。美しい黒髪を風に靡かせ、その瞳は蒼く澄んでいる。マーズテリア神殿聖女ルナークリアは、聖衣の上に白い外套を羽織っていた。

『もう「狭霧の月（十一月）」も終わりですね。そろそろ雪が舞い散る頃でしょうか…』騎士たちの間を歩く。テルフィオン連邦は、幾つかの王国によつて構成されているが、その中でも最大のアルゴラン王国の国王フェリップ三世との会談に臨むべく、ルナークリアはテルフィスを訪れていた。王宮に入ると気温が変化する。銅製の管に薪で温めた湯を通し、王宮内全体を温めていた。白い外套を脱ぐと、些か露出の多い「聖衣」の姿となる。神々しいほどの美女の揺れる豊かな胸の谷間に、衛兵たちは眼のやり場に困った。謁見の間に通される。主だった重臣たちが左右に並んでいる。その中を悠然と歩き、玉座に座る王に挨拶する。

『マーズテリア神殿聖女ルナークリアにございます。陛下に於かれましては御機嫌麗しく、お慶び申し上げます』

『テルフィオン連邦筆頭にしてアルゴラン王国国王、ウイリヴァルト・フェリップである。遠路遙々足をお運びいただき、痛み入る。後ほど、聖女殿を歓迎する晩餐会を開く予定だ。面倒な政事の話は、さっさと片付けたいものだ』

ルナークリアは微笑んで一礼した。来訪の要件を伝える。

『この度、私は教皇^{わたくし}陛下の名代として罷り越しました。貴連邦は昨年、北方の地「ヴァシナル」を新たに加えられたとのこと……ヴァシナルでは「歪み」と呼ばれる奇怪な現象がしばしば発生し、魔物が多く出現することは、御承知のことと存じます』

『無論、承知している。有り難いことに、アークパリス神殿の神聖騎士殿自らが軍を率いて、魔物討伐に乗り出すとのことだ。遠からず、ヴァシナル周辺は安定するであろう』

聖女は頷き、言葉を続けた。

『神聖騎士^{パラディン}ウオフォード殿のお力は、当神殿の聖騎士に勝るとも劣らぬものです。歪みから出現する魔物に遅れを取ることは無いでしょう。ですが、根源である歪みそのものを封じることができないでしょう。歪みは、二つの旧世界の融合によって発生しました。歪みを安定させるためには、神の御力に頼るほかにありません。そして時間を掛けて、徐々に安定させていくのです』

フェリツプ三世は手を挙げて、聖女の話を止めた。

『先年、アークリオン神殿にて神託が下りた。ヴァシナルを組み込んだのは神託によるものである。かの地の更に北にて、冬を司る氷結の女神「ヴァシーナ」の御力を借り、歪みを安定させよとな』

『では、ヴァシナルを直轄領とはなさらぬ御積りででしょうか？』

『無論だ。地方神とはいえ、現神が棲まいし地を直轄領にはできぬ。とは言え、人が住む

以上は統治が必要となる。形式上は、余の従兄弟であるリツテンハイム公爵の責任下とするが、神殿神官および行政官の派遣のみとするつもりだ。ゆくゆくは行政官も土地の者を使うことになるだろう』

『御慧眼でございませぬ。歪みが係る場合、闇神殿の蠢動にも留意が必要となります。混沌を好む彼らは、あるいは水面下で動くやもしれませぬ』

国王は深く溜息をついた。実際、この首都テルフィスにおいても「貧民窟」が存在し、そこではヴァスタールやアーライナなどの闇の現神が信仰されている。圧政によって貧民を追放したとしても、新たな貧民が誕生するだけなのは、王国の歴史が証明していた。現時点は、表立った信仰をしない限りは黙認するという方法で対処するしかない。闇神殿の動きを止めることは、現実的に不可能であった。ルナークリアは、テルフィオン連邦のそうした影の部分の承知の上で、ある案を提示した。

『闇の信仰は、貧民などを中心に広がっています。彼らは決して、自ら望んで貧しくなったわけではありません。様々な事情により、貧民窟に駆け込まざるを得なかった人たちがいます。そこで、彼らが貧しさから脱する機会を設けては如何でしょうか？』

『ほう？ 具体的には、どのような方法なのか？』

『ヴァシナルの中でも、エテと呼ばれる地が、特に歪みが強いと聞いています。このエテを中心に街を造り、魔物討伐や歪みの調査をする専門機関を設け、誰しもが参画できる

ようにするのです。討伐した魔物から得た素材、あるいは歪みの情報は、その機関が適正な価格で買い取るようにします』

『なるほど、いわば貧民たちを「冒険者」にしようというわけか』

『はい。ただ、連邦の行政組織としてしまつては貧民窟からの参画者は少ないでしょう。連邦はあくまでも支援に留め、民間で運営する「冒険者互助組織」とするのです。こうした組織を「ギルド」と呼びます』

『ふむ。早速、連邦内で検討しよう。貧民とはいえ連邦に生きる民であることに変わりはない。彼らが自らの力で貧しさから抜け出そうと努力するのであれば、それを援けるのは国の責任であろう。いや、良いことを聞かせてもらった。礼を言う。して、聖女殿はこの後は、どのようなご予定か？』

『女神ヴァシーナに向かう神官たちと話をするつもりです。諸神殿の中でも、神と対話をした経験を持つものは少ないでしょうから…』

国王は領き、悠然と立ち上がった。対談の終わりを意味していた。聖女は黙って、一礼した。この対談において、ルナークリアは全てを語らなかつた。女神ヴァシーナによつて歪みが安定した場合、どのような事態が起きるのかを知れば、フェリツプ三世はこれほど泰然とは出来なかつたであろう。

晩餐会の後、迎賓館の一室に通されたルナークリアは、日誌を書き始めた。転生の門に行くのはずっと先であろうが、自分が何を見て、何を想ったのか。聖女として、己の記録を後世に遺す必要がある。

『ヴァシナルにある「歪みの主根」は、遙か七古神戦争以前にまで遡ります。一説には、三神戦争の原因となった世界融合の衝撃を緩和するため、イアスーステリアナたちが張った結界の名残りとも言われています。いずれにしても、異界へと繋がる歪みは早く鎮めなければなりません。ですが、女神ヴァシーナの方法が気になります。主根を凍結し、闇の干渉を排除した上で主根を成長させ、光側の力だけで歪みを管理する…これが成功すれば、光側の現神たちの勢力が伸長するのは間違いないでしょう。ですがその結果、ヴァシナルの地はどうなるでしょうか。神の力で凍結された土地、そして急速な主根の成長…エテを中心に、未来永劫に人が住めない地になりかねません』

聖女であるルナークリアは、良くも悪くも現神のことを常人以上に知っている。現神は光と闇に別れ、神骨の大陸で争っている。その勝敗の鍵が、ラウルバーシユ大陸における信仰上の対立であった。光と闇の神殿が争っているのは、神々の代理戦争とも言える。光の現神であるマーズテリアは、こうした争いには一歩引いた姿勢を持っていた。あくまでも、マーズテリアの教えを信仰する者たちを庇護することに徹している。現神

として世の治安を護る使命はあるが、それもできるだけ、人間たちの手で行うことを善しとしていた。

『あの魔神が、私達の神殿と直接対立をしようとしないう理由は、主の御姿勢にあるのでしよう。確かに、もし主とあの魔神が互いの立場に関係なく出会ったとしたら、きつと気が合うことでしょうね』

ルナークリアは日記に今後のことについて書き始めた。

(エテの主根を完成させるには、時期尚早と判断する。神の力で主根を完成させるのではなく、ヒトの力で歪みを克服できないだろうか。この大陸から見れば小さな土地であつても、そこに生きる民がいる。大きな幸福のために小さな悲劇を甘受するという考え方もあるが、もう少し、人間の力を信じてみるべきではないか。女神ヴァシーナをエテに置けば、主根はいつでも完成させることができる。未来の可能性に、ヒトの成長に賭けるという選択肢も、考慮すべきだろう)

聖女の使命は、神の下僕として人々を導くことにある。神の手先となつて、人々を害してはならないのである。アークリオン神殿に降りた神託は、現神側の都合によるものであつた。ごく稀ではあるが、こうした神託が降りる時がある。それを調整し、神々の信仰を守りながら、同時に人々を未来に導くのが、神殿の役割であり聖女の役割であつた。

〔黒き魔神〕は神殿の役割を誤解している。正確には、理解しているが見ようとはしていない。神が存在するこの世界で、神とヒトとを調和させるためにも神殿は必要なのだ。もし神殿の機能が低下し、人々から信仰が希薄になつたらどうなるか。神々は再び、ラウルバーシユ大陸にその影響を広めようとするだろう。人々は神という強大な存在の前に、平伏す者とそれを除こうとする者に分かれる。神と信仰を巡つて、人々の間で悲劇的な対立が生まれる。不作となるのは神を信じぬから。病となるのは神を信じぬから。そのような風潮が生まれ、狂気の暴走が生じかねない。神殿は、信仰を通じて人々を導くとともに、信仰のあり方そのものを管理する役割も果たしているのだ。

ディアン・ケヒトとエディカーヌ王国、そして「神の道」について思索を巡らせる。西方諸国では、光と闇に分かれて神殿が乱立した状態となっている。だが「神の道」は、創造神を頂点に置くことで一本の体系としてまとめ上げている。確かに面白い思想である。信仰を巡る神々の対立、神殿領や喜捨を巡る神殿の対立を解消する一手となりうるだろう。だからこそ、ルナークリアは「神の道」を危険視した。今後、この体系を模倣した国家が次々と出現してくるのではないか。

「とんでもない人物が、同じ時代に生まれたものですね・・・」
ルナークリアは溜息をついて小さく笑った。

テルフィオン連邦首都テルフィスにあるアークパリス大神殿で会合が開かれる。アークパリス神聖騎士^{パラディン}「ナイトハルト・ウオフォード」は波打つ金色の髪と氷蒼色の瞳^{アイスブルー}を持つ美丈夫である。いかにも女性受けしような微笑みを浮かべ、聖女に挨拶する。

『アークパリス神殿騎士ナイトハルト・ウオフォードです。マーズテリア神殿史上最高とも称される聖女殿と、斯様な重要な会議を同席できること、終生の慶びと致します』
『マーズテリア神殿聖女ルナークリアです。^{わたくし}私こそ、「蒼き稻妻」と音に聞こえしウオフォード殿にお会いでき、光栄の至りです』

互いの挨拶を終え、席に座る。アークパリス大神殿神官長クルフォード・ライザックが議長となり、エテの歪みに対する会議が始まる。アークリオン、アークパリス、パルシ・ネイの三大太陽神、軍神マーズテリアの重要人物が顔を揃えている。

『さて、西方を代表する各神殿が一堂に会したこの会議、目的は北方の地「ヴァシナル」の歪みへの対処についてであることは、共通の認識だと思えます。先日、恐れ多くも主神より神聖なる神託が降り、氷結の女神ヴァシーナによる「主根の形成」が我らが使命となりました。しかしながら女神ヴァシーナはヴァシナルの更に北方の山岳地帯「霜天の盆地」に棲みし地方神……御力をお借りするためには北方に赴き、女神に祈願せ

ねばなりません。険しく、困難な途になることは容易に想像できません』

ライザツクの言葉に、神聖騎士ウオフオードが挙手する。立ち上がり自分の考えを述べる。

『女神を動かすとなれば、その威光に動じぬ強い心と、女神に届く言葉の力が必要でしょう。聖女ルナークリア殿は東方の神権国で地方神と対談され、その言葉は億の民を涙させると聞きます。聖女殿以外に、その任に耐えうる者はいないでしょう。護衛については、私自らが聖女殿の盾となり、道中の魔物、魔獣共から御守り致します』

ウオフオードの横に座る女性が咳払いをした。パルシ・ネイを主神とする「蒼き太陽神殿」の英雄騎士「ヴァネツサ・バレンタイン」であつた。鋭い瞳には、女性らしい柔和さは一切ない。

『貴殿には、歪みより生まれし魔物たちを討伐し、ヴァシナルの地を安定させるといふ役目があるであろう。聖女殿に赴いてもらうことには異論はないが、道中の警護は私こそその役を担おう』

『いかに英雄騎士シュヴァリエとはいえ、バレンタイン殿は女性ではありませんか。北方はかなりの危険地帯です。ここは私のほうが良いのではありませんか？』

『なに？ 貴様、私が女だからと見くびるか！ 今すぐに私の力を思い知らせても良いのだぞー！』

『そのように殺気立って、女神ヴァシーナも機嫌を損ねるでしょう。乙女を動かすのは男子の務め。ここは私に任せて頂きたい』

『・・・表に出ろ。貴様の粗末で穢らわしい陰囊ふくらを切り取り、下水に流してやる！』

剣呑な空気に、アークリオン神殿の大神官「エンリコ・マツケイ」が諫める。

『御二方とも止められよ！我らは一丸となつて、迫る危機に対処せねばならぬのです。ここで争つてどうするのですか！そもそも、聖女殿の意見も聞いていないのですぞ？』

全員の視線が美しき聖女に集まる。ルナークリアは立ち上がった。

『それでは、バレンタイン殿に道中の警護をお願いしましょう』

『聖女殿、それは・・・』

戸惑うウォフォードに、ルナークリアは丁寧に返事をする。

『私たち神殿は、民のために在らねばなりません。ましてテルファイオン連邦は、アークパリス神を主神とする大国です。神聖騎士ウォフォード殿にはヴァシナルに生きる民の安寧のために、剣を握っていただきたく存じます。バレンタイン殿も英雄騎士シュヴァリエとして数々の実績をお持ちの方・・・私は安心して護衛をお願ひできます』

両者を尊重しつつ、神殿の大義を説かれてしまつては、これ以上の異論を唱えようがなかつた。二人の騎士はお互いの顔を見ずに、椅子に座つた。ルナークリアは全員の顔を見て、そしてヴァネッサ・バレンタインに顔を向けた。

『ただ、女神との対話については私一人に任せていただきます。光側の現神とはいえ、女神ヴァシーナは霜天の盆地を護りし地方神です。ヴァシナルの地に遷つて頂くためには、慎重な説得が必要となります』

『構わんだろう。もとより私は、それほど言葉が上手くない。聖女殿のような流麗な説得など、出来ようはずもない』

クルフォード・ライザックやエンリコ・マツケイも頷く。ウオフォードは、聖女と同行できないことが不満な様子であったが、それについてはルナークリア以下全員が無視した。「三英傑物語」「セフィットの冒険」などの物語の契機となった「女神と聖女の対談」の序幕は、こうして始まったのであった。「霜天の盆地」に向けて出発する前夜。聖女ルナークリアは、日記を認めていた。

（女神ヴァシーナの力を用いて闇側を排除し、歪みを光側で独占するという考え方は、「神骨の大陸の都合」を持ち込むということに他ならない。神々の都合を調整することもある、神殿の役割である。主根の成長を意図的に遅らせるべきだ。神の力に頼るのではなく、人々の力によって歪みを克服する日が来ると、私は信じたい。ヴァシナルの中心地「エテ」に冒険者ギルドを設置し、歪みを探索する者たちを育てるべきだろう）

『エテの冒険者・・・「異界守」とでも呼ばれるかしら？』

そう呟き、日記を閉じた。